

フィロロギカ——古典文献学のために

XI

目次

『アンティゴネー』三つのオード	1
平野智晴	
Empedocles on Mules' Sterility: A Philological and Philosophical Note . . .	21
Jocelyn GROISARD	
シェリ訳『ヘルメース讃歌』	31
——読むに値する韻文訳——	
神保崧	
Shorter Notes	
ギリシア語の現在分詞・アオリスト分詞の男性単数主格形	51
松浦高志	
裁判員は何を被ったのか?	57
——プラトン『ソクラテスの弁明』冒頭のメッセージ——	
納富信留	
Tibullus, 1.9.21-22	62
日向太郎	
Propertius, 3.7.7-18	72
平野智晴	
has translaticias quas proprie sententias dicimus (Sen. <i>Con.</i> 1.pr.23)	80
吉田俊一郎	

2016

古典文献学研究会
(フィロロギカ編集委員会)

(編集責任)

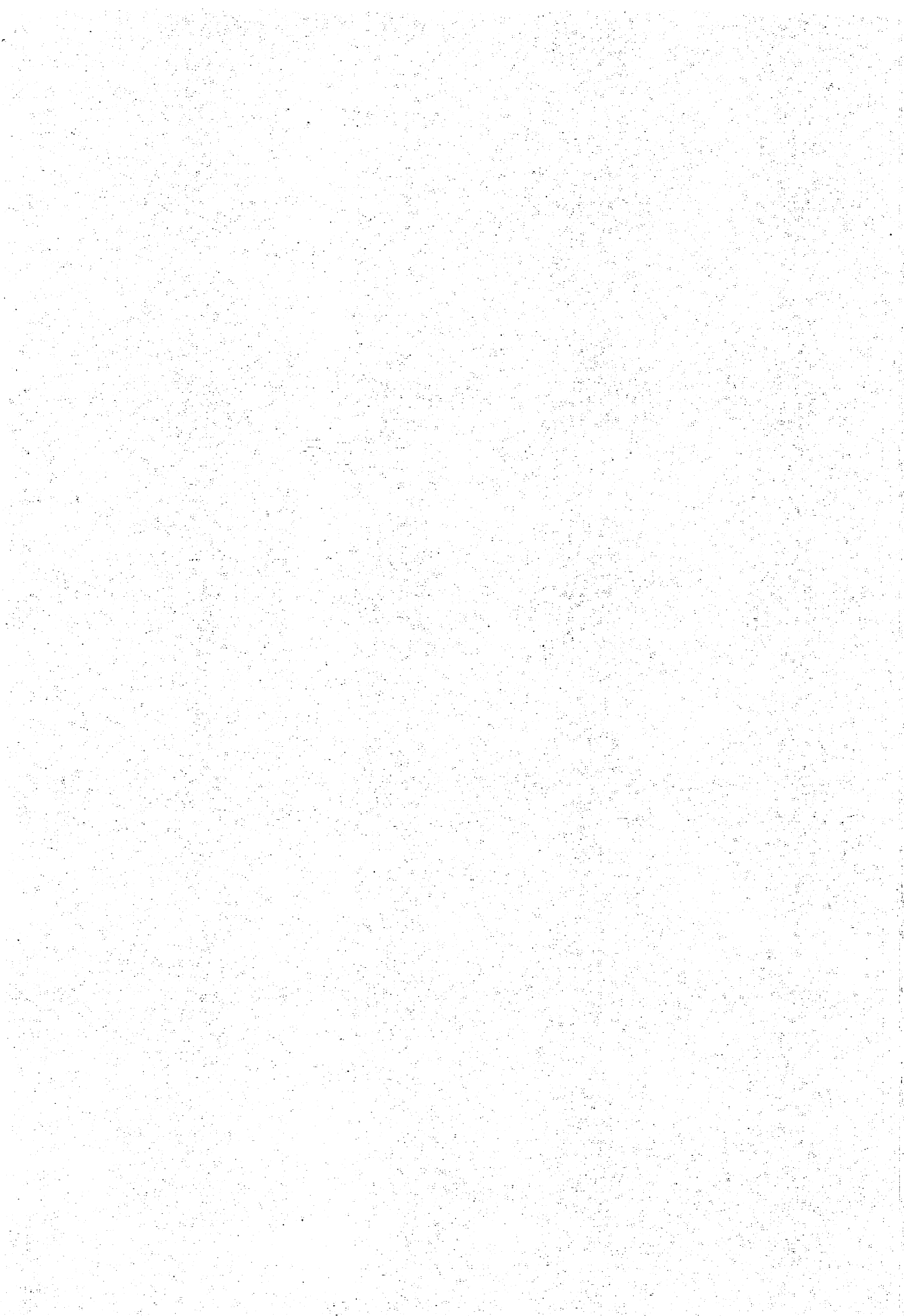
『フィロロギカ』編集委員会

事務局長 葛西康德

名誉編集委員 久保正彰、Elizabeth CRAIK、安西眞

編集委員 大芝芳弘、高橋宏幸、佐野好則、
納富信留、日向太郎、Martin CIESKO

フィロロギカ 第XI号



『アンティゴネー』 三つのオード

平野智晴

I はじめに

ソフォクレス『アンティゴネー』第三スタシモン（以下、S. *Ant.* 3rd St.）において、テーバイの長老からなるコロスが 791-794 σὺ (i.e. Ἔρως) καὶ δικαίων ἀδίκους | φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λῶβᾳ· | σὺ καὶ τόδε νέικος ἀνδρῶν | ξύναιμον ἔχεις τaráξας*1 と歌ってクレオーンとハイモーンの激しい論争を明確に振り返って見せたとき、この悲劇の破滅的な結末がどのようなものになるのであれ、それをもたらし直接的な力がともかくも ^{エロース} 愛 であるらしい、ということが当時の観衆／読者には感得されたはずである。果たして、悲劇の進行に従って、二人に ^{エロース} 愛 の破壊的な嵐が吹き荒れるのを、彼らは目の当たりにするのである。むろん、愛するアンティゴネーの亡骸を前にして半狂乱になったハイモーンが後を追って命を絶つ姿は、壮絶なものである（1219-1243）。しかし、激しい衝撃を受け惨めにも破滅したのは、むしろ、息子と妻を一度に失ったクレオーンの方であった、というべきであろう（1261-1269, 1284-1293）*2。

これと同様に、第一スタシモン（以下、1st St.）における「^{カコン}禍いに歩み寄り亡国の民へと転落する恐るべき人間」（370-371）について、まずは、クレオーンの布告に抗ったアンティゴネーを指し示しているように見えるが（449-470）、その実（、知らずして）、神の法に抗ったクレオーンを指し示していた（473-496）、という解釈*3を、そして、第二スタシモン（以下、2nd St.）における「^{トロペルバシアー}僭越に陥ったがゆえにゼウスによって迷妄／^ア破滅を被ろうとしている人間」（604-605, 622-624）について、まずは、アンティゴネーの運命を予覚しているように見えるが（853-856, 872-875）、その実（、知らずして）、クレオーンの運命を予覚していた（1261-1269, 1284-1293）、という解釈*4を、それぞれ受け容れることにする。このとき、三つのオードとの関わりから仮定される本劇全体の物語の骨格は、およそ、次のようなものとなるであろう。すなわち、「あらゆる智慧の達成の極みに

*1 ソフォクレスのテキストは、見解の分かれている読みも含めて、Lloyd-Jones and Wilson, *Sophocles Fabulae* に拠る。

*2 Winnington-Ingram 92-98.

*3 Sano 40-43.

*4 Cairns 19-26.

あつて権力をほしいままにしているクレオーンが^{ヒュプリス} (1st St.)、傲慢に陥って神の法を蔑ろにしたために、ゼウスの怒りを買ひ迷妄に取り憑かれ^{アーテ} (2nd St.)、——ついには、愛^{エロース}による破滅^{アーテ}を被ることになる (3rd St.)」。

傲慢に陥った果てに迷妄に取り憑かれて破滅を被ることになる、という物語はそれなりに理解できるものである*5。しかし、それが^{エロース}によって引き起こされる、ということについては、いささか奇異な印象が拭えない*6。コロスが傲慢に陥ったことを (知らずして) 非難している対象がクレオーンであるとして、何故、クレオーンは、愛^{エロース}による破滅^{アーテ}を被らなければならなかったのでしょうか。

実は、傲慢^{ヒュプリス}、愛^{エロース}、破滅^{アーテ}の組み合わせは、他の悲劇作品においても繰り返し現れることが知られている。

例えば、アイスキュロス『供養する女たち』第一スタシモン (以下、A. Cho. 1st St.) 冒頭のニスタンザである。これは、Ant. 1st St. との、とりわけ冒頭における類似性が指摘されてきたが (S. Ant. 332 πολλὰ τὰ δεινὰ ... と A. Cho. 585–586 πολλὰ μὲν γὰρ τρέφει | δεινὰ δειμάτων ἄχῃ ...) *7、引き続き、人間の大胆に過ぎる傲慢 (594–595) と、女を狂わす愛ならぬ愛 (599–602) *8 が現れ、その愛^{エロース}は人間の破滅^{アーテ}を伴うのである (597–598) *9:

πολλὰ μὲν γὰρ τρέφει 585
 δεινὰ δειμάτων ἄχῃ,
 πόντιαί τ' ἀγκάλαι κνωδάλων
 ἀνταίων βροτοῖσι πλή-
 θουσι· βλάπτουσι καὶ πεδαίχμιοι
 λαμπάδες πεδάοροι 590
 πτανὰ τε καὶ πεδοβάμονα· κἀνεμόεντ' ἄν
 αἰγίδων φράσαι κότον.

ἀλλ' ὑπέρολμον ἄν-

*5 Cairns 19–27.

*6 3rd St. については、しばしば、この悲劇の中心的主題とは関わりが無いものとされてきた。例えば、Burton は、ソフォクレスが強調する狂気と破壊へと導く愛の力について 603 (2nd St.) λόγου τ' ἄνοια καὶ φρενῶν Ἐρινύς を思い起こさせる、とまで論じていながら、この悲劇の主題との関わりは限定的である、と結論付けている (Burton 117–118)。

*7 Jebb 70 ad v. 332, Cairns 7–8.

*8 Garvie は、597–598 (παντόλμους) ἔρωτας について、性的情熱が含意されていることを認めた上で、それでもさらに広い意味での情熱を考える。cf. A. Sept. 688, A. Ag. 1478, S. Ant. 617 etc. ἔρωτος の破壊的な力について、cf. A. Ag. 341, 743, 1478, S. Ant. 781 ff. (3rd St.), E. Hipp. 525 ff., 1268 ff. etc. (Garvie 207 ad vv. 596–7). また、600 ἀπέρωτος ἔρωτος について、cf. Garvie 208 ad vv. 599–602.

*9 アイスキュロスのテキストは、見解の分かれている読みも含めて、Page に拠る。

δρὸς φρόνημα τίς λέγοι 595
καὶ γυναικῶν φρεσὶν τλημόνων
παντόλμους ἔρωτας, ἄ-
ταισι () συννόμους βροτῶν;
ξυζύγους δ' ὀμανλίας
θηλυκρατῆς ἀπέρωτος ἔρως παρανικᾷ 600
κνωδάλων τε καὶ βροτῶν.
 (A. Cho. 585–602)

他の例には、アイスキュロス『テーバイ攻めの七将』(以下、A. Sept.) 720–791 行のオード中盤の二スタンザがある。この、「オイディプースが家筋の根を血塗れにした」という表現については、Ant. 2nd St. の「最後の根……を、地下の神々の血塗れの刃が刈り取る」という表現に影響を与えた可能性が指摘されてきたが³ (A. Sept. 753–755 ὅστε ματρὸς ἀγνὰν | σπείρας ἄρουραν ἔν' ἐτράφη | ρίζαν αἱματοέσσαν | ἔτλα と S. Ant. 599–602 νῦν γὰρ ἐσχάτας ὑπὲρ | ρίζας ἐτέτατο φάος ἐν Οἰδίπου δόμοις· | κατ' αὐτὴν νιν φοινία | θεῶν τῶν νερτέρων ἀμῶ κοπίς)*10、ここでも、^{ヒュペルバシアー}僭越行為 (743–749, cf. S. Ant. 605 ὑπερβασία) と、^{ファイレー・アプーリアー}愛しき故の無分別 (750)*11 と、^{モロス・ハウトローイ}自らの死の運命 (751) とが、一続きとなって現れるのである：

παλαιγενῇ γὰρ λέγω
 παρβασίαν ὠκύποινον, αἰῶνα δ' ἐς τρίτον
 μένειν, Ἀπόλλωνος εὖτε Λάιος 745
 βίαι τρις εἰπόντος ἐν
 μεσομφάλοις Πυθικοῖς
 χρηστηρίοις θνάσκοντα γέν-
 νας ἄτερ σώϊζειν πόλιν,

κρατηθεῖς ἐκ φιλᾶν ἀβουλιᾶν 750
ἐγείνατο μὲν μόρον αὐτῷ,
πατροκτόνον Οἰδιπόδαν, ὅστε ματρὸς ἀγνὰν
σπείρας ἄρουραν ἔν' ἐτράφη
ρίζαν αἱματοέσσαν 755
ἔτλα· παράνοια συνᾶγε
νυμφίους φρενώλης.

(A. Sept. 743–757)

*10 Cairns 17–19.

*11 750 κρατηθεῖς ἐκ φιλᾶν ἀβουλιᾶν という意味深長な表現について、Sommerstein は、性欲が仄めかされていることはもちろんであるか³ (cf. E. Phoen. 21–22 ὁ (i.e. Λάιος) δ' ἡδονῇ ἵνδους ἔς τε βακχεῖαν πεσών | ἔσπειρεν ἡμῖν (i.e. Ἰοκάστη) παῖδα)、むしろここでは子孫を持つことの欲望が意味されている、と論じている (Sommerstein 230–231 n. 109. cf. Hutchinson 167 ad v. 750)。

すなわち、傲慢に陥ったのがクレオンだったから、愛による破滅を被ったのではない。クレオンもアガメムノーンもラーイオスも、彼らは、傲慢に陥ると、等し並みに迷妄に捕らえられ、愛による破滅を被ることになったのである。

見通しを明確にするために議論の一部を先取りしたが、本論は、*S. Ant.* 三つのオードに展開され悲劇の物語に反映されるこの傲慢—愛—破滅の過程について、その文学的な伝統を考察するものである。

2 *S. Ant.* 三つのオードの比較

S. Ant. 三つのオードは、それぞれのオードが先行作品と個別に有している、いわば作品間のテキスト関係^{*12}の他に、後続するオードが先行するオードを継承・変奏する、いわば作品内のテキスト関係をも有している。後者のオード間の関係のうち、1st St. と 2nd St. については度々論じられてきた^{*13}が、1st St. と 3rd St. については詳細に検討されてはこなかった^{*14}。そこで、本論では、1st St. と 3rd St. の、そして、2nd St. と 3rd St. の詳細な比較を行い^{*15}、これらを全て踏まえて、三つのオードの相互関係について総合的に考察する。

^{*12} 1st St. は、*A. Cho.* 1st St. 585–601 や *Sol.* 13 W 43–62 の他、前 5 世紀中～末期にかけて現れた、技術を数え上げ文明の発展を描いた一群のテキストと比較されうる。とりわけ、「プロメテウス神話」と関わる *A. PV* 442–503, *Pl. Prt.* 321 c–322 d, *E. Supp.* 201–218 との類似性が高く、ソフォクレースは、自らのオードを書くにあたって、*A. Cho.* 1st St. 585–601 と *Sol.* 13 W 43–62 と共にこれらをも念頭に置いた、と考えられる (Sano 33–36)。2nd St. については、様々な文学的資源が論じられている。すなわち、ラプダコス家代々に及ぶ禍いの描写 (594–603) において *A. Sept.* 720–765 に、また、海からはじまる嵐に比較されるゼウスの怒りの描写 (586–593) において *Sol.* 13 W 17–25, *A. Sept.* 758–765 に、迷妄／破滅の性質の描写 (615–625) において *A. Cho.* 1st St. 595–598, *Sol.* 13 W 63–70 等に、富から生ずる迷妄／破滅の描写 (613–614) において *Sol.* 13 W 11–13, 71–76 等に、それぞれ負っているのである (Cairns 16–19)。3rd St. は、賛歌の伝統的な形式に基づいて作られており、他の有名な “*Epws*” の賛歌である *E. Hipp.* 525–564、そして、“*Epws*” の第二賛歌である *E. Hipp.* 1268 ff. としばしば比較される (Burton 113)。その他、不死なる神々も逃れられない、という描写 (787–790) において *h. Ven.* 34–37 に、偉大なる法の傍らにあって支配している、という描写 (797–799) において *Pi. fr.* 169a 1–4 に、また、富を襲い正しき者の心をも不正にねじ曲げる、という描写 (791–792, 782) において *Sol.* 4 W 12–14, *Thgn.* 44–46 等に、それぞれ負っている可能性がある。

^{*13} Easterling 150, Cairns 10–13.

^{*14} 最初にこのことを指摘したのは、恐らく Steiner であった (Steiner 257)。しかし、3rd St. は、一般的に、4th St., 5th St. とともに神々の世界に呼びかけ彼らの世界を活写していると考えられ (Kitzinger 21 n. 18)、人間の限界を人間の視点から描いている 1st St., 2nd St. とは独立したものとして扱われている。

^{*15} 本論の紙幅を考慮し、1st St. と 2nd St. の比較については、ここで繰り返すことはせず、先行研究に譲ることとする。cf. Cairns 10–13.

2.1 1st St. と 3rd St. の比較

1st St. と 3rd St. を具体的に比較すると、以下の通りとなる：

πολλὰ τὰ δεινὰ κούδεν ἄν-
θρώπου δεινότερον πέλει·

τοῦτο καὶ πολιοῦ πέραν
πόντου χειμερίῳ νότῳ (335)
χωρεῖ, περιβρυχίοισιν
περῶν ὑπ' οἰδμασιν, θεῶν
τε τὰν ὑπερτάταν, Γᾶν
ἄφθιτον, ἀκαμάταν ἀποτρύεται,
ἰλλομένων ἀρότρων ἔτος εἰς ἔτος, (340)
ἵππεύῳ γένει πολεῦων. (332-341)

Ἔρως ἀνίκατε μάχαν,
Ἔρως, ὃς ἐν κτήμασι πίπτεις,
ὃς ἐν μαλακαῖς παρειαῖς
νεάνιδος ἐννυχεύεις
φοιτᾷς δ' ὑπερπόντιος ἐν τ' (785)

ἀγρονόμοις αὐλαῖς·

καί σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδεὶς
οὔθ' ἀμερίων σέ γ' ἄν-
θρώπων, ὃ δ' ἔχων μέμνηεν. (781-790)

1st St. において、人間より恐ろしいものはない (332-333)、とされるが、3rd St. において、^{エロース}愛こそ戦いにおいて打ち負かすことができない (781)、とされる。1st St. において、人間は海を越え大地を痛めつける (335-341)、とされるが、3rd St. において、^{エロース}愛は海を越え大地を訪れる (785-786)、とされる。^{エロース}愛は^{クテーマ}財産に襲いかかり*16 乙女の頬に宿るのであるから (782-784)、これが海を越え大地を訪れる、と描写されるとき、まずは、海を越え大地を痛めつける人間を捕らえる、ということが意味されている、と考えるべきである*17。実際、不死なる神々も死すべき人間もこの^{エロース}愛を逃れることができず (787-790)、これを得た者は心が狂う (790)、とされる。

*16 κτήμα は字義通り「富」と解釈すべきであり、Jebb の解釈と類例は適切であると思われる。cf. Jebb 145 ad v. 782, Lloyd-Jones and Wilson, *Sophoclea* 135-136 ad v. 782 (以下、Lloyd-Jones & Wilson)。また、愛、迷妄／破滅、富（の毀損）が一続きに現れる他の例として、cf. A. *Sept.* 766-791。すなわち、オイディプースは、自らの呪われた愛に気付いたとき (778-780)、苦しみのあまり正気を失い迷妄／破滅に捕らわれ目を潰し (780-784)、富を争って子らが殺し合いをするであろう、という呪いの言葉を放ったのであった (785-791)。cf. n. 21.

*17 3rd St. において、愛が影響を及ぼす対象は、第一義的には「不死なる神々」(787)と「生が日々に限られた人間」(789-790)とすべきである。むしろ、その描写は意図的に曖昧にされており、動物も含めた「生きとし生けるもの」と解釈する余地は残されている。cf. A. *Cho.* 599-602 ξυζύγους δ' ὀμαυλίας | θηλυκρατῆς ἀπέρωτος ἔρως παρανικαῖ | κνωδάλων τε καὶ βροτῶν.

νόμους παρείρων¹⁸ χθονὸς
 θεῶν τ' ἔνορκον δίκαν
 ὑψίπολις· ἄπολις ὅτῳ τὸ μὴ καλὸν (370)
 ξύνεστι τόλμας χάριν.
 μήτ' ἐμοὶ παρέστιος
 γένοιτο μήτ' ἴσον φρονῶν
 ὅς τὰδ' ἔρδοι. (368–375)

σὺ καὶ δικαίων ἀδίκους
 φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λάβῃ·
 σὺ καὶ τόδε νεῖκος ἀνδρῶν
 ξύναμιμον ἔχεις ταραξᾶς· (791–794)

1st St. において、国の法と神々に誓った正義を貫く者は高邁な民となり (368–370)、不埒にも悪しきことに手を染める者は亡国の民となり (370–371)、こうした者が自分たちと竈を共にし心を同じくすることがないように (372–375)、と祈願されるが、3rd St. において、愛^{エロース}は正しき者の心をも不正にねじ曲げ (791–792)、この血の繋がった男たち (すなわち、クレオンとハイモーン) の諍いを引き起こした (793–794)、とされる。彼らが諍いを起こせば、国の統治は危うくなり、亡国の民ともなり得るであろう。

νόμους παρείρων χθονὸς
 θεῶν τ' ἔνορκον δίκαν
 ὑψίπολις· ἄπολις ὅτῳ τὸ μὴ καλὸν (370)
 ξύνεστι τόλμας χάριν.
 μήτ' ἐμοὶ παρέστιος
 γένοιτο μήτ' ἴσον φρονῶν
 ὅς τὰδ' ἔρδοι. (368–375)

νικᾷ δ' ἐναργῆς βλεφάρων (795)
 ἥμερος εὐλέκτρον
 νύμφας, τῶν μεγάλων πάρεδρος
 ἐν ἀρχαῖς¹⁹
 θεσμῶν· (795–799)

1st St. において、国の法と神々に誓った正義を貫く者は高邁な民となり (368–370)、不埒にも悪しきことに手を染める者は亡国の民となり (370–371)、こうした者が自分たちと竈を共にし心を同じくすることがないように (372–375)、と祈願されるが、3rd St. において、勝利を取めるのは閨の悦びを約束する花嫁の瞳に宿る欲望^{ヒメロス}であり (795–797)、これが偉大なる法の傍にあって支配している、とされる (797–799)。

2.2 2nd St. と 3rd St. の比較

2nd St. と 3rd St. を具体的に比較すると、以下の通りとなる：

εὐδαίμονες οἷσι κακῶν ἄγευστος αἰών.
 οἷς γὰρ ἂν σεισθῇ θεόθεν δόμος, ἄτας

"Ἐρως ἀνίκατε μάχαν,
 "Ἐρως, ... (781–782)

*18 368 παρείρων の読みが疑われていることについて、cf. Jebb 76–77 ad v. 368, Griffith 189 ad vv. 368–71. しかしながら、cf. Lloyd-Jones & Wilson 124 ad v. 368.

*19 797 πάρεδρος ἐν ἀρχαῖς の読みが疑われていることについて、cf. Jebb 147–148 ad v. 797, Griffith 260 ad vv. 797–9. しかしながら、cf. Lloyd-Jones & Wilson 136 ad v. 797.

οὐδὲν ἐλλείπει γενεᾶς ἐπὶ πλῆθος ἔρπον· (583-585)

ἄμαχος γὰρ ἐμ-
παίζει θεὸς Ἀφροδίτα. (799-800)

まず、2nd St. においては、不幸を味わうことなく人生を全うする者は幸せである (583)、と始まり (、そのような幸せな人間などいない)、神によって家を揺さぶられる者には、何代にもわたってあらゆる破壊が襲ってくる (584-585)、と続くことで、神が人間を打ち負かす様子が描かれる。これに対して、3rd St. においては、^{エロース}愛は戦いにおいて打ち負かすことができない (781)、と始まり、^{アフロディーテ}愛は打ち負かすことができない存在として戯れている (799-800)、と終わることで、^{エロース}愛が不死なる神をも死すべき人間をも打ち負かす様子が描かれる (cf. 787-790)。

ὥστε ποντίας ἁλὸς
οἶδμα δυσπνόοις ὅταν
Θρήσσησιν ἔρεβος ὕφαλον ἐπιδράμη πνοαῖς,
κυλίνδει βυσσόθεν (590)
κελαινὰν θίνα καὶ δυσάνεμοι
στόνων βρέμουσιν ἀντιπλήγες ἄκται.
ἀρχαῖα τὰ Λαβδακιδᾶν οἰκῶν ὀρώμαι
πήματα φθιτῶν ἐπὶ πῆμασι πίπτοντ', (595)
οὐδ' ἀπαλλάσσει γενεὰν γένος, ἀλλ' ἐρείπει
θεῶν τις, οὐδ' ἔχει λύσιν.
νῦν γὰρ ἐσχάτας ὑπὲρ
ρίζας ἐτέτατο φάος ἐν Οἰδίπου δόμοις· (600)
κατ' αὖ νιν φοινία
θεῶν τῶν νερτέρων ἅμᾳ κοπῖς²⁰,
λόγου τ' ἄνοια καὶ φρενῶν Ἐρινύς. (586-603)

φοιτᾷς δ' ὑπερπόντιος ... (785)

... ἐν τ'
ἀγρονόμοις αὐλαῖς· (785-786)

σὺ καὶ δικαίων ἀδίκους
φρένας παρασπᾷς ἐπὶ λῶβα·
σὺ καὶ τόδε νεῖκος ἀνδρῶν
ξύναιμον ἔχεις παράξας· (791-794)

2nd St. において、神が家を揺さぶるその様子は、まるで、海の波のうねりが海底の砂を巻き上げそれが風に吹きさらされ (587-591) 岸を呻き轟かせるかのようなのである (591-593)、とされ、オイディプースの家の最後の根もまた、まるで、畑の収穫作業であるかのように刈られようとしている (599-602)、とされるが、3rd St. において、^{エロース}愛は取り憑いた人間とともに海を越え大地を訪れる (785-786)、とされる。また、2nd St. において、言葉における無分別と心における狂気 (603) は、今、(国を統べているクレオーンによって、かつて国を統べていた) オイディプースの家の根絶を招こうとしているが、3rd St. において、^{エロース}愛は正しき者の心をも不正にねじ曲げ (791-792)、(今、この国を統べている) この血の繋

*20 伝承は *κόνης* (cf. Jebb 114-115 ad vv. 601 f.). しかしながら、cf. Lloyd-Jones & Wilson 129 ad v. 602.

がった男たち（すなわち、クレオンとハイモーン）の諍いを引き起こした（793-794）、とされる。

τεάν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἀν-
δρῶν ὑπερβασία κατάσχοι; (605)
τὰν οὐθ' ὕπνος αἰρεῖ ποθ' ὁ †παντογῆρως†
οὐτ' ἀκάματοι θεῶν
μῆνες, ἀγῆρως δὲ χρόνῳ δυνάστας
κατέχεις Ὀλύμπου
μαρμαρόεσσαν αἴγλαν. (610)
τό τ' ἔπειτα καὶ τὸ μέλλον
καὶ τὸ πρὶν ἐπαρκέσει
νόμος ὅδ' οὐδέν' ἔρπει
θνατῶν βίοςτος ἀμύπολυς ἐκτὸς ἄτας. (604-614)

καὶ σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδεὶς
οὐθ' ἀμερίων σέ γ' ἀν-
θρώπων, ὁ δ' ἔχων μέμνηεν. (787-790)

νικᾷ δ' ἐναργῆς βλεφάρων (795)
ἥμερος εὐλέκτρον
νύμφας, τῶν μεγάλων πάρεδρος
ἐν ἀρχαῖς
θεσμῶν. (795-799)

2nd St. において、人間の僭越行為は、ゼウスの力を制御することはできない（604-605）が、3rd St. において、不死なる神々も死すべき人間も ^{エロース}愛を逃れることができず（787-790）、これを得た者は心が狂う（790）、とされる。2nd St. において、ゼウスの法は、今後も、未来も、そして、過去も支配し続ける（611-613）、すなわち、死すべき人間の富に満ちた暮らしは ^{アーテ}迷妄からは免れない、と（613-614）。これに対して、3rd St. において、勝利 ^{ヒュメル}を収めるのは閨の悦びを約束する花嫁の瞳に宿る欲望であり（795-797）、これが偉大な法の傍にあつて支配している（797-799）、とされる。

σοφία γὰρ ἔκ του (620)
κλεινὸν ἔπος πέφανται,
τὸ κακὸν δοκεῖν ποτ' ἐσθλὸν
τῷδ' ἔμμεν ὄτω φρένας
θεὸς ἄγει πρὸς ἄταν
πράσσει δ' ὀλίγος τὸν χρόνον ἐκτὸς ἄτας. (625)

καὶ σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδεὶς
οὐθ' ἀμερίων σέ γ' ἀν-
θρώπων, ὁ δ' ἔχων μέμνηεν. (790)
σὺ καὶ δικαίων ἀδίκους
φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λώβα. (787-792)

2nd St. において、神がその心を ^{アーテ}迷妄に ^{カコン}向ける者には ^{エストロン}禍いも ^{エロース}幸いであるように見える（622-624）が、そもそも、人間が ^{アーテ}破滅から免れて暮らせるのは東の間に過ぎない（625）、とされる。これに対して、3rd St. において、不死なる神々も死すべき人間も ^{エロース}愛を逃れることができず（787-790）、これを得た者は心が狂う（790）、そして、^{エロース}愛は正しき者の心をも不正にねじ曲げ ^{ローベ}破滅へと導く（791-792）、とされる。

2.3 S. Ant. 三つのオードの比較のまとめ

上記の比較を整理すると、およそ、以下のようになる。

1st St. において、世界を支配するのは人間であるが（332-333 πολλὰ τὰ δεινὰ κοῦδὲν ἀν-

θρώπου δεινότερον πέλει)、2nd St. において、人間を支配するのはゼウスであり (604-605 τεάν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἀν- | δρῶν ὑπερβασία κατάσχοι;)、3rd St. において、神々も人間も支配するのは^{エロース}愛である (787-790 καί σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδείς | οὐθ' ἀμερίων σέ γ' ἀν- | θρώπων, ὁ δ' ἔχων μέμνην)。

1st St. において、人間の支配は海にも大地にも及ぶが^カ (334-336 τοῦτο καὶ πολιοῦ πέραν | πόντου χειμερίῳ νότῳ | χωρεῖ, ..., 338-339 θεῶν | τε τὰν ὑπερτάταν, Γᾶν | ἄφθιτον, ἀκαμάταν ἀποτρύεται)、2nd St. において、ゼウスは人間にまるで海の嵐のような禍いを与え (587-593 ὥστε ποντίας ἁλὸς | οἶδμα ... | κυλίνδει βυσσόθεν | κελαινὰν θίνα καὶ δυσάνεμοι | στούνῳ βρέμουσιν ἀντιπλήγες ἀκταί)、その人間の家筋の根を畑の収穫のように刈り取ろうとするが^カ (599-602 νῦν γὰρ ἐσχάτας ὑπὲρ | ρίζας ἐτέτατο φάος ἐν Οἰδίπου δόμοις· | κατ' αὐτὴν νιν φοινία | θεῶν τῶν νερτέρων ἀμᾶ κοπίς)、3rd St. において、^{エロース}愛もまた海にも大地にも行き渡るものである (785-786 φοιτᾷς δ' ὑπερπόντιος ἐν τ' | ἀγρονόμοις αὐλαῖς)。

1st St. において、人間は言語と思考そして国を統べる心構えを自ら学んだが^カ (353-356 καὶ φθέγμα καὶ ἀνεμόεν φρόνημα καὶ ἀστυνόμους | ὀργὰς ἐδιδάξατο)、2nd St. において、人間はゼウスによって心が^{アーチ}迷妄に向けられると (623-624 ὅτῳ φρένας | θεὸς ἄγει πρὸς ἅταν) 言葉における無分別と心における狂気 (603 λόγου τ' ἄνοια καὶ φρενῶν Ἑρυνύς) に陥る、しかし、3rd St. において、^{エロース}愛は正しき者の心をも不正にねじ曲げ (791-792 σὺ καὶ δικαίων ἀδίκους | φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λώβῃ) (この) 血の繋がった男たちの諍いを引き起こしてしまふ (793-794 σὺ καὶ τόδε νεῖκος ἀνδρῶν | ξύναιμον ἔχεις ταραξας)。

1st St. において、^{さか}賢しくも臨機応変な術を^{すべ}望みを越えて持つ者は (365-367 σοφόν τι τὸ μηχανόεν τέχνας ὑπὲρ ἐλπίδ' ἔχων) ある時は禍いへある時は幸いへと歩み寄る (367 τοτὲ μὲν κακόν, ἄλλοτ' ἐπ' ἐσθλὸν ἔρπει) が、2nd St. において、ゼウスがその心を^{アーチ}迷妄に向ける者には禍いも幸いであるように見える (622-624 τὸ κακὸν δοκεῖν ποτ' ἐσθλὸν | τῷδ' ἔμμεν ὅτῳ φρένας | θεὸς ἄγει πρὸς ἅταν) が、3rd St. において、^{エロース}愛を得た者は神々であつても人間であつても (必ず) 心が狂う (787-790 καί σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδείς | οὐθ' ἀμερίων σέ γ' ἀν- | θρώπων, ὁ δ' ἔχων μέμνην)。

すなわち、この三つのオードにおいて、人間、ゼウス、^{エロース}愛には、前者よりも後者が優越する階層関係があるのであり、これは、「オードを跨いだプリアメル」とでもいうべきものである。そして、このオードを跨いだプリアメルは、本論冒頭にも示したように、A. Cho. 1st St. 冒頭二スタンザにおける「大地にも海にも恐ろしいものは数多あるが、人間の^{ヒュベルトルモス}傲慢はさらに恐ろしく、向こう見ずな女どもの非情な^{エロース}愛はさらに恐ろしい」、というプリアメルと比較が可能である。

3 A. Cho. 1st St. 冒頭ニスタンザと S. Ant. 三つのオードの比較

両者を具体的に比較すると、以下の通りとなる：

A. Cho. 1st St. (585–602)

πολλὰ μὲν γὰρ τρέφει (585)
 δεινὰ δειμάτων ἄχη,
 πόντιαί τ' ἀγκάλαι κνωδάλων
 ἀνταίων βροτοῖσι πλή-
 θουσι· βλάπτουσι καὶ πεδαίχμοι
 λαμπάδες πεδάοροι (590)
 πανὰ τε καὶ πεδοβάμονα· κἀνεμόεντ' ἄν
 αἰγίδων φράσαι κότον.

ἀλλ' ὑπέρτολμον ἀν-
 δρὸς φρόνημα τίς λέγοι (595)

καὶ γυναικῶν φρεσὶν τλημόνων
 παντόλμους ἔρωτας, ἄ-
 ταισι () συννόμους βροτῶν;

ξυζύγους δ' ὀμαυλίας
 θηλυκρατῆς ἀπέρωτος ἔρωσ παρανικᾷ (600)
 κνωδάλων τε καὶ βροτῶν.

S. Ant. 1st St.

πολλὰ τὰ δεινὰ κοῦδέν ἀν-
 θρώπου δεινότερον πέλει·
 τοῦτο καὶ πολιοῦ πέραν
 πόντου χειμερίῳ νότῳ (335)
 χωρεῖ, περιβρυχίοισιν
 περῶν ὑπ' οἰδμασιν, θεῶν
 τε τὰν ὑπερτάταν, Γᾶν
 ἄφθιτον, ἀκαμάταν ἀποτρύεται,
 ἰλλομένων ἀρότρων ἔτος εἰς ἔτος, (340)
 ἵππειῳ γένει πολεύων. (332–341)

S. Ant. 2nd St.

τέαν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἀν-
 δρῶν ὑπερβασία κατὰσχοι; (604–605)

· · · · ·

ἀ γὰρ δὴ πολὺπλαγκτος ἐλ- (615)
 πὶς πολλοῖς μὲν ὄνησις ἀνδρῶν,
 πολλοῖς δ' ἀπάτα κουφονόων ἐρώτων· (604–617)

S. Ant. 3rd St.

Ἔρωσ ἀνίκατε μάχαν,
 Ἔρωσ, ὃς ἐν κτήμασι πίπτεις,²¹
 ὃς ἐν μαλακαῖς παρειαῖς
 νεάνιδος ἐννυχεύεις,

· · · · ·

καὶ σ' οὐτ' ἀθανάτων φύξιμος οὐδεὶς
 οὔθ' ἁμερίων σέ γ' ἀν-
 θρώπων, ὃ δ' ἔχων μέμνηεν. (790)
 σὺ καὶ δικαίων ἀδίκους
 φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λῶβᾳ·

· · · · · (781–800)

*21 Cairns は、Ant. 615–619 について Sol. 13 W 71–76, 11–13 からの影響を論じ、ソローンでは明示的な ὕβρις – κέρδος – ἄτῃ の繋がりは、2nd St. においては、613–614 οὐδέν' ἔρπει | θνατῶν βίσιος πάμπολυς ἐκτὸς ἄτας という形で触れられるだけである、と但し書きしている (Cairns 16)。しかしながら、本文の比較が示しているように、ἄτῃ – ἔρωτες / Ἔρωσ という形にまで広く捉えるならば、この繋がりは、本悲劇においても明示的に示され得る、と考えられる、すなわち：Ant. 781–782 Ἔρωσ ἀνίκατε μάχαν, | Ἔρωσ, ὃς ἐν κτήμασι πίπτεις, cf. n. 16.

A. Cho. 1st St. において、大地はたくさんの恐るべき労苦を養い (585-586)、海の深き懷は敵意ある怪物に満ち (587-589)、天地の間には流星や怒れる風孕む嵐がある (589-593)。しかし、人々は解き明かすことができない、人間の大胆に過ぎる傲慢^{フロネーマ}を (594-595)、そして、向こう見ずな女たちの非情な愛^{エローテス}を (596-597)、死すべき者々の破滅^{アータイ}を伴う愛^{エローテス}を (597-598)。すなわち、人間や動物の区別なく、女を狂わす愛ならぬ愛が、夫婦の絆を打ち負かすのだ (599-602)。

S. Ant. 1st St. において、恐ろしいものがたくさんあるが、人間より恐ろしいものはない (332-333)、人間は海を越え大地を痛めつける (335-341)。しかし、2nd St. において、人間の僭越^{ヒュベルバシアー}／過ちはゼウスの力を抑えることはできず (604-605)、その彷徨わせる希望^{エルピス}は、多くの人々にとって空しい欲望による欺瞞となる (615-617)。そして、3rd St. において、愛^{エロース}は戦いにおいて打ち負かすことができず (781)、神々も人間も逃れることができず (787-789)、これを得た者は心が狂う (790)。そして、この愛^{エロース}は、正しき者の心をも不正にねじ曲げ、破滅^{ローベ}へと導くのだ (791-792)。

A. Cho. 1st St. と S. Ant. 1st St. について、冒頭からの類似性は、よく知られている (A. Cho. 585-586 πολλὰ μὲν γὰρ τρέφει | δεινὰ δειμάτων ἄχη, ... と S. Ant. 332 πολλὰ τὰ δεινὰ ...)*22。前者における大地、海、空への言及と、後者における海、大地、空 (cf. S. Ant. 342-343 φῦλον ὅρ- | νίθων) への言及の類似性も、知られている*23。

また、A. Cho. 1st St. において人間の大胆に過ぎる傲慢^{フロネーマ}が導入される際の詩行 (A. Cho. 594-595 ἀλλ' ὑπέρτολμον ἄν- | δρὸς φρόνημα τίς λέγει ...) と、S. Ant. 2nd St. において人間の僭越^{ヒュベルバシアー}／過ちも抑えられないゼウスの力が導入される詩行 (604-605 τεάν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἄν- | δρῶν ὑπερβασία κατάσχοι) が、内容のみならず構文までもが類似していることも、知られている (恐らく、意図的な文体模倣であろう*24)。

そして、A. Cho. 1st St. における、女を狂わす「愛ならぬ愛が打ち負かす」、という表現 (A. Cho. 599-602 ξυζύγους δ' ὁμαυλίας | θηλυκρατῆς ἀπέρωτος ἔρως παρανικᾷ | κνωδάλων τε καὶ βροτῶν) と、S. Ant. 3rd St. における、戦えば「打ち負かすことのできない」愛^{エロース}が正

*22 Jebb 70 ad v. 332, Cairns 7-8.

*23 詳細な比較については、cf. Cairns 7-8.

*24 抽象的な可能性を表す ἄν の省略された希求法において、否定の答えが要求される修辞疑問文の形になっているのは、現存するテキストにおいては、A. Cho. 594-598 ἀλλ' ὑπέρτολμον ἄν- | δρὸς φρόνημα τίς λέγει | ... と S. Ant. 604-605 τεάν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἄν- | δρῶν ὑπερβασία κατάσχοι; の二例だけのようである。これに対して、単純に否定文または肯定文の形である例は、cf. Hom. Il. 19.321, Od. 3.231. οὐκ ἔστιν ὅστις ... に後続し従属節を形成する例としては、cf. A. PV 292, Ag. 620, Cho. 172, E. Alc. 52 (cf. Jebb 116 ad v. 604, Griffith 227 ad vv. 604-5, Smyth 406-407 [§1821]).

しき者の心をも不正にねじ曲げ「打ち負かすことのできない」ものとして支配している、という表現 (781 *Ἔρως ἀνίκατε μάχαν*, ... 791 ff. *σὺ καὶ δικάϊων ἀδίκους* | *φρένας παρασπᾶς ἐπὶ λῶβα*: ... *νικᾶ δ'* ... *ἕμερος* ...) も、また、*νικᾶ*, *παρανικᾶ*, *ἀνίκατε* といった同じ語源の単語が用いられ、そして、*ἀπέρωτος ἔρως*, *δικαίων ἀδίκους* といった反対の意味の単語が隣接する表現が用いられている、という点で類似している*25。

このように、*S. Ant.* 1st St., 2nd St., 3rd St. の三つのオードは、*A. Cho.* 1st St. 冒頭二スタンザ (585–602) に対して、プリアメルという構成において、さらには主要な詩行の単語・構文において、具体的な対応関係が見られるのであり、このことは、後者が前者の直接的な文学的資源 (のひとつ) となっていることを強く示唆するものである。

ただし、この *A. Cho.* 1st St. 冒頭二スタンザと *S. Ant.* 三つのオードには、三つの相違が見られる。第一は、*S. Ant.* 1st St. においては人間が最も恐るべき存在となった根拠である「智慧による様々な達成のカatalog」が展開されるが、*A. Cho.* 1st St. 冒頭二スタンザにはそれが見られないことである。第二は、*S. Ant.* 2nd St. においては人間が^{ヒュベルバシアー}傲^{アーテー}慢に陥るとゼウスの怒りを買ひ迷妄に取り憑かれる、という「蔑ろにされたゼウスの怒りと介入」が示されているが、*A. Cho.* 1st St. 冒頭二スタンザにはそれが見られないことである。第三は、*A. Cho.* 1st St. 冒頭二スタンザにおける「^{エロース}愛^{アータイ}に伴う破滅」は妻と姦夫によって夫が謀殺されたことを指しているが、*S. Ant.* 3rd St. における「^{エロース}愛^{アーテー}が導く破滅」は息子の^{いいなづけ}許嫁の死が息子と妻の死を引き起こすことを指している、ということである。第一、第二の相違は *S. Ant.* 三つのオードがさらに別の文学的資源を踏まえていることによるものと考えられ、第三の相違はそれらによって「愛による破滅」の意味合いに変化がもたらされたことによるものと考えられる。

これらの相違をもたらしした要因については本論の最後で論ずることとし、ここでは、「智慧による様々な達成のカatalog」、「蔑ろにされた神の怒りと介入」、「子供の結婚の失敗がもたらす^{アーテー}破滅」が扱われ、なおかつ「人間が^{ヒュベルバシアー}傲^{アーテー}慢に陥ると、迷妄に取り憑かれ、^{エロース}愛による破滅を被る」という、*S. Ant.* 三つのオードのプリアメルが指し示す悲劇の物語が継承されている類例を挙げたい。それは、*A. Sept.* の後日譚であり、クレオンが七将の遺体の埋葬を禁じたところから始まる、エウリーピデース『救いを求める女たち』(以下、*E. Supp.*) における、テーセウスのアドラーストスに対する台詞である*26。

*25 Garvie 208–209 ad vv. 599–602.

*26 当該箇所の一部 (201–218) は、Sano によって「プロメーテウス神話」に関わるテキスト群として分類され、*S. Ant.* 1st St. と綿密に比較されている (Sano 34, 46)。

4 E. Supp. 201–228 と S. Ant. 三つのオードの比較

このテーセウスの台詞を S. Ant. 三つのオードと突き合わせると、以下のようになる。
すなわち*27：

智慧から傲慢へ： cf. S. Ant. 332–371	αἰνῶ δ' ὅς ἡμῖν βίοντον ἐκ πεφυρμένου καὶ θηριώδους θεῶν διεσταθμήσατο, πρῶτον μὲν ἐνθεῖς σύνεσιν, εἶτα δ' ἄγγελον γλῶσσαν λόγων δούς, ὥστε γιγνώσκειν ὅπα, ... (201–215)
傲慢から迷妄へ： cf. S. Ant. 604–614	ἀλλ' ἡ φρόνησις τοῦ θεοῦ μεῖζον σθένειν ζητεῖ, τὸ γαῦρον δ' ἐν φρεσὶν κεκτημένοι δοκοῦμεν εἶναι δαιμόνων σοφώτεροι. ἧς καὶ σὺ φαίνῃ δεκάδος, οὐ σοφὸς γεγώς, (216–219) ὅστις κόρας μὲν θεσφάτοις Φοίβου ζυγεῖς (220) ξένοισιν ᾧδ' ἔδωκας ὡς δόντων θεῶν, λαμπρὸν δὲ θολερῶι δῶμα συμμείξας τὸ σὸν ἥλκωσας οἴκους· χρὴ γὰρ οὔτε σώματα ἄδικα δικαίοις τὸν σοφὸν συμμειγνύναι εὐδαιμονοῦντάς τ' ἐς δόμους κτᾶσθαι φίλους. (225) κοινὰς γὰρ ὁ θεὸς τὰς τύχας ἡγούμενος τοῖς τοῦ νοσοῦντος πῆμασιν διώλεσεν τὸν οὐ νοσοῦντα· κούδεν ἡδίκηκότα. (220–228) (E. Supp. 201–228)
子供の結婚の失敗： cf. S. Ant. 771–800	

Supp. 201–228 において、テーセウスは、アドラーストスに対して、およそ以下のよう
なことを述べている。すなわち、「神は、人間に、まず知性を、言語を、そして、大地の
実りを与えた。また、冬の嵐を防ぎ、太陽の灼熱を避ける術、そして、航海の、占いの術
を与えた (201–215)。ところが、これほどまでの術を授けられながら、我々人間は、傲慢
にも欲するのだ*28、神々よりも強くなることを、そして、傲慢にも考えるようになるの
だ、神々よりも智慧がある、と (216–218)。アドラーストスよ、お前も、そうした人間ら
しい。愚かにも、フォイボスの神託に縛られて娘を異国の者の手に渡し、そのためにお前
の輝かしい家筋を狂気に苦しむそれに混ぜ合わせ*29、家名を酷く傷付けたのだ。そのよう

*27 エウリーピデースのテキストは、見解の分かれている読みも含めて、Diggle に拠る。

*28 216–217 ἡ φρόνησις τοῦ θεοῦ μεῖζον σθένειν | ζητεῖ の ἡ φρόνησις について、同じ語源の単語が同じ否定的
な意味で用いられている類例として、cf. A. Cho. 594–595 (1st St.) ἀλλ' ὑπέρολμον ἄν- | δρὸς φρόνημα τίς
λέγοι | ...; 文脈から、前者には後者からの影響がある、と考えるべきであろう。

*29 アドラーストスが娘アルゲイアーを妻として与えた相手は、いうまでもなく、S. Ant. 2nd St. でその迷妄が
歌われた、「ラブダコス家の末裔」の一人であるポリュネイケースであった。222–223 λαμπρὸν δὲ θολερῶι

なことをすべきではなかった。というのも、神は、罪のある者の禍いによって、罪のない者を滅ぼすものなのだから（219-228）」。

これに対して、本論で検討してきた *Ant.* 三つのオードを、悲劇の物語^{ミュートス}を踏まえてクレオンに引き付けて要約し直すと、次のようになる。すなわち、「世界に人間ほど恐ろしいものはない。人間は、航海の術を、農耕の術を、鳥や獣や魚を捕らえる術を、そして、言葉を、思考を、政治を自ら学んだ……。それでも、人間は、神に誓った正義を守らなくてはならない（1st St.）。ところが、クレオンよ、お前は、人間の身でありながら、傲慢にも、神の法を蔑ろにして自らの法を強要し、ゼウスの怒りを買ひ、迷妄^{アーテー}に取り憑かれて^{ミュートス}いる（2nd St.）。いずれ、お前は、息子が許嫁の後を追って自殺する、という^{エロース}愛による破滅を被ることになるであろう。というのも、^{エロース}愛は、偉大な法の傍にあって、支配しているのだから（3rd St.）」。

「傲慢な」アドラーストスは、（フォイボスの神託を解き損なって（137-146）娘を呪われた家の者の手に渡し、その結果として（アンフィアラオスの予言を聞き入れることもなく（155-159））テーバイ攻めを敢行し敗北の憂き目に遭ったのであり、これは「傲慢」に陥った者が「女の贈与」を伴う局面において迷妄^{アーテー}に取り憑かれて^{ミュートス}*30 被ることになった「神罰としての破滅」であった。

また、「傲慢な」クレオンも、神の法を蔑ろにして自らの法を強要し（イスメーネーの説得にも関わらず（566-576））アンティゴネーの死刑について決意を翻さなかったために、息子のハイモンが許嫁の後を追って自殺するという憂き目に遭ったのであり、これもやはり「傲慢」に陥った者が迷妄^{アーテー}に取り憑かれて被ることになった、「女の贈与」を伴う局面における「神罰としての破滅」であった。

ゆえに、この *A. Cho.* 1st St. 冒頭二スタンザにおける^{エロース}「愛による破滅」^{アーテー}は、*S. Ant.* 三つのオードにおいては、女の贈与に伴う「神罰としての破滅」^{アーテー}という形に読み替えられたといえるのであり、これが、悲劇の物語^{ミュートス}に反映され、*E. Supp.* 201-228 にも継承されて行った、と考えられるのである。

さて、先の考察において、*A. Cho.* 1st St. 冒頭二スタンザと *S. Ant.* 三つのオードを比較したときに見られた「人間の技術のカatalogue」、「ゼウスの怒りと介入」という相違は異なる文学的資源に拠るものである、と想定したのであった。この、女の贈与に伴う「神罰とし

δῶμα συμμείξας τὸ σὸν | ἡλκωσας οἴκους という表現には、*A. Sept.* 752-756 ... Οἰδιπόδαν, ὅσπερ ματρὸς ἄγναν | σπείρας ἄρουραν ἔν' ἐτράφη | ῥίζαν αἱματόεσσαν | ἔτλα, *S. Ant.* 599-600 νῦν γὰρ ἐσχάτας ὑπὲρ | ῥίζας ἐτέτατο φάος ἐν Οἰδίπου δόμοις の痕跡が窺われる。

*30 cf. 137 (Θη) τὴν' εἰς ἔρωτα τῇσδε κηδείας μολών· cf. *S. Ant.* 615-617.

ての破滅」を踏まえて、改めて S. *Ant.* 三つのオードのプリアメルが指し示す悲劇の物語「人間が^{ヒュベルバシアー}傲慢に陥ると、^{アーテー}迷妄に取り憑かれ、^{エロース}愛による破滅を被る」を振り返ったとき、私は、これらが、Sol. 13 W (, A. PV 442–503), A. *Cho.* 1st St. 等とともに主要な文学的資源として拠っていたのは、ヘーシオドス『仕事と日』(以下、Hes. *Op.*) 47–105 の、いわゆる「パンドーレーの瓶^{かめ}の神話」でなかったのではないか、と考えるのである。

5 Hes. *Op.* 47–105 「パンドーレーの瓶の神話」と S. *Ant.* 三つのオードの比較

「パンドーレーの瓶の神話」は、以下のように要約される、すなわち、プロメーテウスは人間のためにゼウスの隠した火を盗み取ったが(47–52)、ゼウスはこの火を盗んだ罰として女パンドーレーを贈った(53–83)、そして、パンドーレーは瓶の蓋を開けて中身を撒き散らし、その結果、数多の厄災が人間の間に跳梁することになった(95–105)、と。ここには、プロメーテウスから火が与えられ、ゼウスからその代償として女が贈られ、それによって数々の禍いがもたらされた、という、現在人間が置かれている苦境の原因が描かれている。

綿密な比較によって立証されていることであるが、1st St. における「人間の技術のカタログ」は、前 5 世紀中～末期にかけて現れた「プロメーテウス神話」に関わるテキスト群、すなわち A. PV 442–503, Pl. *Prt.* 321 C–322 D, E. *Supp.* 201–218 と高い親和性がある*31。そして、プラトーンが描くプロタゴラスによれば、プロメーテウスの与えた数多の技術は、火なくしては、人間にとって、技術の智慧を獲得することも、利用することもできないものであり(Pl. *Prt.* 321 D2–3 ἀμήχανον γὰρ ἦν ἄνευ πυρὸς αὐτὴν κτητὴν τῷ ἢ χρησίμην γενέσθαι)、さらには、プロメーテウスの火盗みは、これら「プロメーテウス神話」に関わるテキスト群が依拠している最も古い神話においては、「神罰として贈られた女」と分かち難く結び付いているのであった(Hes. *Op.* 60–105, *Th.* 570–616)。ゆえに、「人間が獲得した技術・智慧のカタログ」は、「プロメーテウスの火盗み」から出発し「神罰として贈られた女」へと終着する、いわば潜在的な文脈を有しているといえ、これらは、本来、一続きのものとして考えられるものである。

そもそも、Hes. *Op.* 47–105 「パンドーレーの瓶の神話」には、S. *Ant.* 三つのオードで論じられてきた主要な要素が、多少異なった文脈においてであるとはいえ、およそ全て現れているように思われるのである。本論では、それらの要素がまとまった形で見られる *Op.*

*31 Sano 36–39.

90–105 について、考えてみたい*32：

πρὶν μὲν γὰρ ζώεσκον ἐπὶ χθονὶ φύλ' ἀνθρώπων 90
 νόσφιν ἄτερ τε κακῶν καὶ ἄτερ χαλεποῖο πόνοιο
 νούσων τ' ἀργαλέων αἵ τ' ἀνδράσι κῆρας ἔδωκαν 92
 ἀλλὰ γυνὴ χεῖρεσσι πίθου μέγα πῶμ' ἀφελούσα 94
 ἐσκέδασ' ἀνθρώποισι δ' ἐμήσατο κήδεα λυγρά. 95
 μούνη δ' αὐτόθι Ἑλπίς ἐν ἀρρήκτοις δόμοισιν
 ἔνδον ἔμιμνε πίθου ὑπὸ χεῖλεσιν, οὐδὲ θύραζε
 ἐξέπτει· πρόσθεν γὰρ ἐπέμβαλε πῶμα πίθοιο
 αἰγιόχου βουλῇσι Διὸς νεφεληγερέταο.
 ἄλλα δὲ μυρία λυγρὰ κατ' ἀνθρώπους ἀλάληται 100
 πλείη μὲν γὰρ γαῖα κακῶν, πλείη δὲ θάλασσα·
 νοῦσοι δ' ἀνθρώποισιν ἐφ' ἡμέρη, αἱ δ' ἐπὶ νυκτί
 αὐτόμαται φοιτῶσι κακὰ θνητοῖσι φέρουσαι
 σιγῇ, ἐπεὶ φωνὴν ἐξείλετο μητίετα Ζεὺς.
 οὕτως οὐ τί πη ἔστι Διὸς νόον ἐξαλέασθαι. 105
 (Hes. *Op.* 90–105)

Hes. *Op.* 90–105 は、次のように要約される。すなわち、火を盗み与えられた人間に対して、ゼウスは、その罰として、抱き締め心から愉しむ^{カコン}として女を贈ったところ (cf. 57–58 τοῖς δ' ἐγὼ (i.e. Ζεὺς) ἀντὶ πυρὸς δώσω κακόν, ᾧ κεν ἅπαντες | τέρπωνται κατὰ θυμόν, ἐὼν κακὸν ἀμφαγαπῶντες)、その女は、瓶の大蓋を取り去り中身を撒き散らし、悲惨な厄災をもたらした (94–95)。しかし、希望^{エルピス}だけが瓶の口の下に残り、外には飛び出なかった (96–98)。これまで、地上で生きてきた人間の種族は、禍いの数々から、すなわち苛酷な労働や死をもたらす苦しい病から免れていたが (90–92)、この女のために、人間どもの間に、無数の悲惨が彷徨うこととなった (100)。というのも、禍いの数々は大地にも海にも満ちており、病は夜となく昼となく自らの意志で人間に訪れるからだ (101–104)。しかし、そもそも、瓶の蓋を閉じて希望^{エルピス}を閉じ込めたのもゼウスの思惑ならば (98–99)、病が訪れることによって禍いの数々が気付かれることなくもたらされるのもゼウスの仕業である (103–104)。このように、なにものも、決してゼウスの意図を逃れることなどできないのである (105)。

これに対して、本論で検討してきた *S. Ant.* 三つのオードを、Hes. *Op.* 90–105 に突き合わせて要約し直すと、次のようになる。すなわち、火をはじめ (cf. *Pl. Prt.* 321 D2–3) 様々な智慧を自ら獲得し恐るべき存在となった人間は (*Ant.* 332–333)、(生活の糧を求め) 海にも大地にも進出して行き (334–336)、起こり得ることに必ず策を以て立ち向かう

*32 ヘーシオドスのテキストは、見解の分かれている読みも含めて、West に拠る。

(360-361)。もつとも、その智慧を以てしても、死を逃れることまではできないのであるが(361-362)。しかしながら、人間は、自分の智慧によって、思いもよらずに禍^{カコン}いにも幸^{エストロン}いにも導かれるものであり(365-367)、その、人間を遠くへと彷徨^{エルビス}わせる希望は、結局のところ、多くの人々にとって空しい欲^{エローテス}望による欺^{アバデー}瞞となるのだ(615-617)。その心を神が迷^{アーデー}妄に向ける者には、禍^{カコン}いもつ^{エストロン}いには幸^{エストロン}いであるように見えるのだが(622-624)、いずれにしても、破滅^{アーデー}から免れて暮らせるのは、束の間に過ぎない(625)。いかなる人間の僭^{ヒュベルバシアー}越／過ちも、ゼウスを抑えることはできず(604-605)、時によって老いることのない支配者として、ゼウスは、燦然と輝くオリュンポスに君臨する(608-610)。そして、閨の悦びを約束する花嫁の瞳に宿る愛^{エロース／アフロディーテー}の神もまた、偉大なる法の傍にあって支配しているのだ(781, 795-799)。

両者において、火(*Op.* 50-52)そして火をはじめとする様々な智慧(*Pl. Prt.* 321 D2-3)、それらを(神からあるいは自ら)手にした人間(*Ant.* 359-360)、それでも逃れられない死(*Op.* 90-92, 101-104 と *Ant.* 361-362)、(火の代償として贈られる愛^{エロース}の対象としての)女(*Op.* 57-58 と *Ant.* 795-799)、(利益^{オネーシス}にも欺^{アバデー}瞞にもなり得る両義的な)希望^{エルビス}(*Op.* 96-98 と *Ant.* 615-617)*³³、ゼウスの絶対的な支配(*Op.* 105 と *Ant.* 608-610)、といった要素が共通して現れている。また、前者 *Op.* 90-105 において、無数の悲惨は海にも大地にも満ち溢れている(*Op.* 100)が、後者 *Ant.* 1st St. において、そうした事々に策を以て立ち向かうべく、人間(*Ant.* 360-361)もまた海にも大地にも進出する(*Ant.* 334-336, 338-340)、という意味で、両者に繋がりを見出すこともできるのである。

6 ゼウスの罰として贈られた女

こうして、S. *Ant.* 三つのオードは、A. *Cho.* 1st St. 冒頭二スタンザから傲慢^{ヒュプリス}—愛^{エロース}—破滅^{アーデー}のプリアメルを継承するにあたり、(Sol. 13 W 43-66 をはじめとする)「プロメーテウス神話」に関わるテキスト群から「人間の技術のカatalog」を、そして、(これら全てに影響を与えているであろう) Hes. *Op.* 47-105 「パンドーレーの瓶の神話」から「ゼウスの罰として贈られた女」という考え方を(改めて)持ち込み、これらを悲劇^{ミュートス}の物語に反映させたのであった。

*33 Cairns は、*Ant.* 615-619 について Sol. 13 W 33-36 からの影響を論ずるが、これらは、そもそも、*Op.* 94-98 に端を発しているように思われる。すなわち、希望は、既に、*Op.* の時点で善悪の区別が曖昧なものとして解釈される余地が残されており、Sol. 13 W において、これが希望の虚しさとして敷衍され、さらに、*Ant.* によって、(利益とも)欺瞞と(も)なる、という形に (Jebb 119 ad v. 616) 継承されたのである (Cairns 15, cf. West 169-170 ad v. 96)。

このことを踏まえたとき、S. *Ant.* のテキストの以下の二つの点について、さらに理解が容易になるものと思われる。

第一は、アンティゴネーの埋葬問題に関わる言動と^{エロース}愛のオード S. *Ant.* 3rd St. との関わりである。当時の観衆／読者は、1st St. において「人間の技術のカatalog」と亡国の民へ転落する恐れが歌われたとき（332-375）、その背後に、A. *Cho.* 1st St. 冒頭二スタンザと「プロメーテウス神話」を想起し、はやくも、その後にアンティゴネーという「女」とその^{エロース}愛がもたらす^ア破滅^テ迷妄を、想像したはずである*34。とはいえ、私たちから見て、同じ「傲慢な」人間を^{エロース}愛によって打ち負かす存在であるとしても、姦夫と謀って夫を殺すようなクリュタイメーストラーと、兄の埋葬を主張して乙女のまま石室に連れて行かれて自死を遂げるアンティゴネーとでは、人物造形の相違があまりに甚だしい。

しかし、この「ゼウスの罰として贈られた女」という考え方を踏まえたとき、アンティゴネーの言動には、同じ^{エロース}愛の罰を与える存在でありながら、先行者たるクリュタイメーストラーよりも遙かに強大な力と強固な正当性が賦与されていることが理解されることになる。すなわち、丁度、瓶の蓋を開けて禍いの数々を撒き散らし希望を手許に残して蓋を閉じたパンドレーがその実ゼウスの意のままに行動していたに過ぎないように*35、アンティゴネーの言動もまた、確かに自らの意志によるものであったがその実ゼウスの神意によるものでもあった、という解釈が可能になるのである*36。彼女の言動には、クリュタイメーストラーのような悪意は存在しない。むしろ、ゼウスの神意が関わっていたというべきである。

このことは、コロスが、278-279 ἀναξ, ἐμοί τοι μή τι καὶ θεήλατον | τοῦργον τόδ' ἡ ξύννοια βουλεύει πάλαι という台詞によって、かなり早い段階から（もちろんその後の展開など知るべくもないのであるが）神の関与を仄めかしていたことから裏付けられる。しかも、1st St. が歌われるきっかけとなったのは、クレオーンがこのコロスの発言を咎めたことであった*37。コロスにとって（知らずしてではあるが）アンティゴネーの言動はゼウスの神意に即したものであり、彼らが「人間の技術のカatalog」を始めとする一連のオードを歌

*34 Cairns 10.

*35 厳密には、ゼウスの意のままにパンドレーが行ったことは、瓶の蓋を開じたことだけである。cf. Hes. *Op.* 98-99.

*36 cf. *Ant.* 450-457 (An.) οὐ γάρ τί μοι Ζεὺς ἦν ὁ κηρύξας τάδε, | οὐδ' ἡ ξύννοικος τῶν κάτω θεῶν Δίκη | τοιούσδ' ἐν ἀνθρώποισιν ὥρισεν νόμους, ..., 604-605 (2nd St.) τεάν, Ζεῦ, δύνασιν τίς ἀν- | δρῶν ὑπερβασία κατὰσχοι; 795-799 (3rd St.) νικᾷ δ' ἐναργῆς βλεφάρων | ἥμερος εὐλέκτρον | νύμφας, τῶν μεγάλων πάρεδρος ἐν ἀρχαῖς | θεσμῶν, 925-928 (An.) ἀλλ' εἰ μὲν οὖν τάδ' ἐστὶν ἐν θεοῖς καλά, | παθόντες ἂν ξυγγνοῖμεν ἡμαρτηκότες· | εἰ δ' οὔδ' ἁμαρτάνουσι, μὴ πλείω κακὰ | πάθουεν ἢ καὶ δρῶσιν ἐκδίκως ἐμέ.

*37 Sano 31-32.

い出した動機もまた（知らずしてではあるが）クレオーンの傲慢な言動に抗うことにあった、と考えることができるであろう。

第二は、イスメーネーとクレオーンの、^{エロース}愛に関わる奇妙な台詞の数々である。クレオーンとの^{アゴーン}論争におけるイスメーネーの台詞 568 ἀλλὰ κτενεῖς νυμφεῖα τοῦ σαυτοῦ τέκνου; ... 570 οὐχ ὥς γ' ἐκείνῳ τῇδ' ἔ' ἦν ἡρμοσμένα. ... 572 ὦ φίλταθ' Αἴμον, ὥς σ' ἀτιμάζει πατήρ ^{エロース}が、愛の主題の実質的な開始を告げるものである、ということは一般に了解されている*38。イスメーネーは、頑迷なクレオーンに死刑の決意を翻させるために、息子のハイモーンとの婚約のを持ち出すのである*39が、それでも、彼女のこの問題の切り出し方はいささか唐突で場違いな印象を与える。それは、クレオーンの受け答え 569 ἀρώσιμοι γὰρ χατέρων εἰσὶν γύαι. ... 571 κακὸς ἐγὼ γυναῖκας υἱέσι στυγῶ も同様であり、しかも、彼の場合、こうした台詞が 2nd St. を挟んでその後も続くのである：648–651 μὴ νῦν ποτ', ὦ παῖ, τὰς φρένας γ' ὑφ' ἡδονῆς | γυναικὸς οὐνεκ' ἐκβάλης, εἰδὼς ὅτι | ψυχρὸν παραγκάλισμα τοῦτο γίνεταί, | γυνὴ κακῇ ξύνευνος ἐν δόμοις.

しかし、この「ゼウスの罰として贈られた女」という考え方を踏まえたとき、イスメーネーやクレオーンの一連の台詞は、当時の観衆／読者にとっては、むしろ、本悲劇の主題に即した巧妙な台詞——すなわち、「人間の技術のカタログ」によって示される賢しくも傲慢な人間を代表するクレオーンに「女の贈与」を通じて禍いの数々がもたらされる、ということを確認に予告する台詞——であったことが理解されるのである。とりわけ、クレオーンの後者の台詞（648–651）は、例えば、Hes. *Op.* 57–58 τοῖς δ' ἐγὼ ἀντὶ πυρὸς δώσω κακόν, ὦ κεν ἅπαντες | τέρπωνται κατὰ θυμόν, ἐὼν κακὸν ἀμφαγαπῶντες を踏まえていた可能性があり*40、彼らにとっては、「パンドレー神話」をより具体的に想起させるものであった、と考えることができるであろう。

このように、「人間の技術のカタログ」と「ゼウスの罰として贈られた女」は、一方で「賢しくも傲慢な人間」の姿を最大限に強調しながら、他方でいわば「ゼウスの御心のままに」禍いの数々をもたらす「女の贈与」という局面を作り出すことで、傲慢—愛—破滅という従来のプリアメルを踏まえながらさらにそれを刷新して、悲劇の物語においてゼウスが神罰を下す過程を克明に描くことをも可能にしたと考えられる。「プリアメル」、「カタログ」、「女の贈与」に関わる文学的伝統を正しく理解したとき、私たちは、これらがア

*38 Griffith 216 ad v. 568.

*39 Jebb 109 ad v. 568.

*40 ヘーシオドスにおける他の類例として、Hes. *Op.* 373–375, 703–705 (Griffith 235 ad vv. 648–52). また、cf. Hes. *Op.* 85–89.

ンティゴネーが主張する「兄の埋葬」や「書かれざる法」と表裏一体を成し有機的に悲劇をまとめ上げていく重要な機能を果たしていることを、確信するはずである*41。

(東京大学)

主要参考文献

- Bowra, C. M., *Sophoclean Tragedy* (Oxford 1944).
 Burnet, J. ed., *Platonis Opera*, Tomus III (OCT; Oxford 1903).
 Burton, R. W. B., *The Chorus in Sophocles' Tragedies* (Oxford 1980).
 Cairns, D., 'From Solon to Sophocles: Intertextuality and Interpretation in Sophocles' *Antigone*', *JASCA* 2 (2014) 3–30.
 Collard, C. ed., *Euripides: Supplices*, 2 vols. (Groningen 1975).
 Diggle, J. ed., *Euripidis Fabulae*, Tomus II (OCT; Oxford 1981).
 Easterling, P. E., 'The Second Stasimon of *Antigone*', in Dawe, R. D., et al., eds., *Dionysiaca* (Cambridge 1978) 141–158.
 Garvie, A. F. ed., *Aeschylus: Choephoroi* (Oxford 1986).
 Griffith, M. ed., *Sophocles: Antigone* (Cambridge 1999).
 Hutchinson, G. O. ed., *Aeschylus: Seven Against Thebes* (Oxford 1985).
 Jebb, R. C. ed., *Sophocles: Plays, Antigone* (Cambridge 1900. Repr. London 2004).
 Kamerbeek, J. C. ed., *The Plays of Sophocles*, Part III: *The Antigone* (Leiden 1978).
 Kitto, H. D. F., *Form and Meaning in Drama* (London 1956).
 Kitzinger, M. R., *The Choruses of Sophocles' Antigone and Philoktetes: A Dance of Words* (Leiden and Boston 2008).
 Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G., *Sophoclea: Studies on the Text of Sophocles* (Oxford 1990).
 Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G., *Sophocles: Second Thoughts* (Göttingen 1997).
 Lloyd-Jones, H. and Wilson, N. G. ed., *Sophoclis Fabulae* (OCT; Oxford 1990).
 Page, D. L. ed., *Aeschyli Septem Quae Supersunt Tragoedias* (OCT; Oxford 1972).
 Sano, Y., 'The First Stasimon of Sophocles' *Antigone* (332–375): Comparison with Texts of Cultural Progress', *JASCA* 2 (2014) 31–46.
 Sommerstein, A. H. ed., *Aeschylus: Persians, Seven Against Thebes, Suppliants, Prometheus Bound* (Loeb CL; Cambridge, Massachusetts and London 2008).
 Steiner, G., *Antigones* (Oxford 1984).
 West, M. L. ed., *Hesiod: Works and Days* (Oxford 1978).
 Winnington-Ingram, R. P., *Sophocles: An Interpretation* (Cambridge 1980).

*41 本稿作成にあたって、有益な助言を下された二名の匿名査読委員の方々に、感謝を申し上げたい。

Empedocles on Mules' Sterility: A Philological and Philosophical Note

Jocelyn GROISARD

I Introduction

We have only two short testimonies on how the Presocratic philosopher Empedocles explained why mules are sterile. The most ancient one comes from Aristotle's biological treatise *On the generation of animals*, where it is included in the discussion, and refutation, of several theories explaining mules' sterility by their being hybrids; Aristotle, on the contrary, believed that hybrids are usually able to reproduce so that there is no causal link between hybridity and sterility;¹ it is in the context of this debate that Aristotle mentions, in order to contradict it, Empedocles' theory. The second testimony derives from a lost doxographical corpus usually considered to be the work of Aëtius as it is reflected in another doxography known as Pseudo-Plutarch's *Placita philosophorum*; it is included in a short sequence of three opinions about "Why mules are sterile?" (Διὰ τί αἱ ἡμίονοι στέραι;) between those of Alcmaeon and Diocles; the theory attributed here to Empedocles bears no resemblance whatsoever with that mentioned by Aristotle.

2 Testimonies

(a) Aristotle

Empedocles gives as cause (of mules' sterility) the fact that the mixture of both semen gets solid because seminal matter from both parents is soft; indeed, hollow and solid parts fit together and from such soft matters something hard is produced as when copper is mixed with tin.²

This testimony is not completely clear and Aristotle may be right in criticizing Empedocles for "speaking unclearly" (747^a26–27: λέγων οὐ σαφῶς). What is most strange in the view here attributed to Empedocles is that mules' sterility is not related to any physiological features of *mules* themselves, but to the consistence of the seminal mixture at the time of conception: it is because semen from both horse and donkey is soft that the product of the mixture is hard, and

¹ For a general account of Aristotle's views about hybridity, see J. GROISARD, "Hybridity and Sterility in Aristotle's *Generation of Animals*", in D. LEFEBVRE and A. FALCON (eds.), *Aristotle's Philosophy and the Generation of Animals*, Cambridge University Press (forthcoming).

² ARISTOTLE, *De generatione animalium*, II 8, 747^a34–^b3 [= DK 31 B 92]: Ἐμπεδοκλῆς δ' αἰτιᾶται τὸ μίγμα τὸ τῶν σπερμάτων γίνεσθαι πυκνὸν ἐκ μαλακῆς τῆς γονῆς οὐσῆς ἑκατέρας· συναρμόττειν γὰρ τὰ κοῖλα τοῖς πυκνοῖς ἀλλήλων, ἐκ δὲ τῶν τοιούτων γίνεσθαι ἐκ μαλακῶν σκληρὸν ὥσπερ τῷ καττιτέρῳ μυχθέντα τὸν χαλκόν.

the offspring developing from this hard mixture will be sterile because of this same hardness. The causal relation between hardness of the seminal mixture from which the embryo will develop and sterility of the full-grown mule developing from it remains completely unaccounted for. One hypothesis could be that proper development of the embryo requires a determinate consistence of the seminal mixture at the start, so that too hard a mixture will imply some deficiencies such as inability to reproduce.

(b) Aëtius

Empedocles (says that mules' sterility is) because of the uterus being too little, too low and too narrow, its position in the belly being reversed so that the semen misses the target or, if it ever reaches it, the uterus does not receive it.³

This second testimony is much easier to understand than the previous one: here sterility is clearly explained by abnormal size, position and form of the uterus in female mules, making it unable to receive the male semen when mating. The lack of any relation between this testimony and Aristotle's more authoritative one has rightly made scholars suspicious about its value as a source about Empedocles' actual theory.⁴ Indeed, putting rather obvious explanation under a big name could be an easy way to give them more weight, so here clarity and simplicity are no sign of authenticity. Yet one should also note that there is nothing in Aristotle's testimony to contradict that of Aëtius: maybe Empedocles' explanation included several factors such as the hardness of the semen mixture from which mules develop *and* a deformity of adult mules' genital organs; according to the hypothesis just made above about Aristotle's testimony, one could even suppose that both explanations were originally related since too hard a mixture at the start could have been considered as the mechanical cause of an abnormal development of the fetus resulting in some deficiency of female mules' genital apparatus.

Maybe a stronger philological reason to be suspicious about this second testimony is the strange continuity between the three opinions attributed by the doxographer to Alcmaeon, Empedocles and Diocles. Alcmaeon is reported to have given two explanations of mules' sterility, one for males, namely thinness and coldness of semen, and one for females, which is that the uterus is not "gaping wide upwards" (*ἀναχάσκειν*);⁵ the latter explanation has very close similarities to the view attributed to Empedocles according to which mules' sterility is caused by the uterus being too narrow and too low, i.e., *not* "gaping wide upwards", thus preventing the male's semen from reaching it. A similar continuity can be found with the next testimony, which is explicitly

³ AËTIUS, V, 14, 2 Diels (PSEUDO-PLUTARCH, *Placita philosophorum*, 907B 5–8) [= DK 31 A 82]: Ἐμπεδοκλῆς διὰ τὴν σμικρότητα καὶ ταπεινότητα καὶ στενότητα τῆς μήτρας, κατεστραμμένως προσπεφυκυίας τῇ γαστρὶ, μήτε τοῦ σπέρματος εὐθυβολούντος εἰς αὐτὴν μήτε, εἰ καὶ φθάσειεν, αὐτῆς ἐκδεχομένης.

⁴ H. DIELS, *Doxographi Graeci*, Berlin, 1879, p. 425, refers to S. KARSTEN, *Empedoclis Agrigentini carminum reliquiae*, Amsterdam, 1838, p. 469, n. 241: according to Karsten, the view attributed to Empedocles in Aëtius could just be the continuation of the previous testimony about Alcmaeon, and Empedocles' name could have been introduced in it by derivation from that of Diocles in the next testimony.

⁵ AËTIUS, V, 14, 1 Diels (PSEUDO-PLUTARCH, *Placita philosophorum*, 907B 1–4) [= DK 24 B 3]: Ἀλκμαίων τῶν ἡμιόνων τοὺς μὲν ἄρρενας ἀγόνους παρὰ τὴν λεπτότητα τῆς θορῆς ἢ ψυχρότητα· τὰς δὲ θηλείας παρὰ τὸ μὴ "ἀναχάσκειν" τὰς μήτρας. οὕτω γὰρ αὐτὸς εἴρηκεν.

introduced as a confirmation of Empedocles' view, since Diocles is reported to have mentioned dissections in which he could observe such a disposition of the uterus in female mules.⁶ Whereas the view attributed to Empedocles seems to have little relation to what is otherwise known about his physical and biological theories, it has strong connections with its immediate context in Aëtius' report: it could be, if one wants to give some credit to this testimony, that the doxographer made a conscious effort to connect Empedocles' authentic doctrine with the preceding and following ones; but this kind of effort is quite unusual in doxographical literature, where discontinuity between reported opinions is an almost constant rule; so a more probable hypothesis would be that Empedocles' name has been artificially introduced right in the middle of a previous continuous doxographical material.

The introduction of Empedocles' name could have been the result of some kind of forgery at any stage during the constitution of the doxographical material, but there is some ground to think that Empedocles' name was introduced precisely in this text, which originally did not have it. First, as suggested by Karsten, the proximity between the names "Diocles" and "Empedocles" may have played some part in the process of introducing the latter (and more famous) one in a text mentioning the former.⁷ Second, the strong continuity between the views attributed to Alcmaeon (A) and Empedocles (A') makes it quite possible that they originally constituted one single entry about Alcmaeon (A + A') and that the "Empedoclean" part was at some stage separated from this original entry about Alcmaeon. Fortunately, there seems to be in the text a quite visible mark of this separation process: part A ends with the short conclusive sentence "For thus he said himself" (οὕτω γὰρ αὐτὸς εἶρηκεν); besides being void of any informative content, which is strange for such an information-oriented genre as doxography, this kind of redundant conclusion is completely unparalleled in the whole doxographical corpus attributed to Aëtius; rather than an awkward conclusion to A, this could be more probably the beginning of A', which was originally either the continuation of A⁸ or an alternative version of A added at the end of it; then the name "Empedocles" was added after εἶρηκεν, separating A' from A and making it a spurious testimony on Empedocles' theory about the sterility of mules.

3 Aristotle's arguments against Empedocles

Since the text in Aëtius is probably about Alcmaeon and not Empedocles, let us turn back to our first testimony, that coming from Aristotle. Although this short report is not very explicit, as we already mentioned, some light may be shed on it by the way Aristotle tries to refute Empedocles' view. Two arguments are used: the first is an objection to Empedocles' example of copper and tin as a model for the mixture between horse and donkey semen giving birth to mules; the second is an attempt to establish a contradiction between Empedocles' explanation of mules' sterility and the fact that cross-breeding between horse and donkey species can happen either between a stallion and she-ass or a mare and he-ass.

⁶ AËTIUS, V, 14, 3, 1–3 Diels (PSEUDO-PLUTARCH, *Placita philosophorum*, 907B 9–10) [fr. 24 ed. van der Eijk]: Διοκλῆς δὲ μαρτυρεῖ αὐτῷ λέγων· ἐν ταῖς ἀνατομαῖς πολλὰκις ἐωράκαμεν τοιαύτην μήτραν τῶν ἡμιόνων.

⁷ See n. 4 above.

⁸ This was also Karsten's suggestion.

Let us begin with Aristotle's first objection:

Neither does Empedocles correctly say the cause about copper and tin (we have given explanations about them in our *Problems*), nor does he take at all as principles things that are known to us: for how can the combination of hollow and solid parts make the mixture, for example of wine and water? For this is more than what we can say: indeed how we should conceive the hollow parts of wine and water is altogether beyond our perception.⁹

Although this text as a whole is not very explicit, it clearly consists of two different sub-arguments. The first one deals with the physical process of mixture between tin and copper, Aristotle reproaching Empedocles with not properly accounting for it; unfortunately, Aristotle does not explain what the correct account should be and only refers to his own *Problems*, but, unfortunately again, there is nothing in the corpus of Aristotle's *Problems* as transmitted to us that seems to match this reference. There actually is an explanation of tin and copper mixture in the Aristotelian corpus, but it is rather to be found in his treatise *On generation and corruption*: there Aristotle gives a full-fledged account of mixture in general as a symmetrical process of reciprocal division and qualitative assimilation,¹⁰ and the particular case of copper and tin is used to illustrate a type of mixture in which one ingredient, being stronger than the other, almost completely assimilates it:¹¹ here tin is the weaker ingredient, so that it almost disappears, only leaving its colour in the resulting alloy, as though it were just a quality without its own matter; one consequence of this unbalanced mixture is that the result has the same volume as the original copper, as though it received tin within itself without becoming larger. This lack of increase in volume may be what Empedocles had tried to explain by his model of hollow and solid parts fitting together: for if solid parts in a body fit inside hollow parts in the other, it could be that both mix without gaining any volume; only the mixture will have no hollow parts anymore, or at least fewer than the original ingredients, which accounts for its being harder. If this hypothesis is true, Aristotle's objection could be more precisely restated as the following: Empedocles explains the lack of volume increase in the mixture between copper and tin by the combination of hollow and solid parts, whereas actually it results from an unbalanced mixture in which one body excessively dominates the other. Another hypothesis, philological now, could be that at the time of writing this part of *On the generation of animals*, Aristotle had dealt with this issue in a separate *Problem*, the content of which was reused when writing *On generation and corruption*; then this separate *Problem* was lost while only the reference to it in *On the generation of animals* remained.

The second part of the objection is rather epistemological than physical: here Aristotle's point seems to be that the combination of hollow and solid parts postulated by Empedocles is far beyond our perception, presumably because these parts are too small, so that his theory is based

⁹ ARISTOTLE, *De generatione animalium*, II 8, 747^b 4–10: λέγων οὐτ' ἐπὶ τοῦ χαλκοῦ καὶ τοῦ καττιτέρου τὴν αἰτίαν ὀρθῶς (εἴρηται δ' ἐν τοῖς Προβλήμασι περὶ αὐτῶν) οὐθ' ὅλως ἐκ γνωρίμων ποιούμενος τὰς ἀρχάς. τὰ γὰρ κοῖλα καὶ τὰ στερεὰ ἀρμόττοντα ἀλλήλοις πῶς ποιεῖ τὴν μίξιν οἶον οἶνου καὶ ὕδατος; τοῦτο γὰρ ὑπὲρ ἡμᾶς ἐστὶ τὸ λεγόμενον· πῶς γὰρ δεῖ λαβεῖν τὰ κοῖλα τοῦ οἶνου καὶ τοῦ ὕδατος λίαν ἐστὶ παρὰ τὴν αἴσθησιν.

¹⁰ ARISTOTLE, *De generatione et corruptione*, I 10; on the issue of mixture in Aristotle, see J. GROISARD, *Mixis. Le problème du mélange dans la philosophie grecque d'Aristote à Simplicius*, Paris, 2016, part I: "La théorie aristotélicienne du mélange", pp. 1–76.

¹¹ ARISTOTLE, *De generatione et corruptione*, I 10, 328^b 6–13.

on things we cannot know for sure. Obviously, this is quite a weak argument, since the microscopic combination of parts postulated by Empedocles could be both beyond our perception *and* true. Besides, there is a strange shift in Aristotle's objection from tin and copper to the case of wine and water. Could it be that the combination of hollow and solid parts was in Empedocles a more general model of mixture also applying, for instance, to water and wine? Probably not, since this model seems specifically designed to explain hardness, whether it be that of the bronze alloy or that of the semen mixture giving birth to mules. So the shift to wine and water rather seems an undue generalisation by Aristotle himself, who seems to apply Empedocles' combination model to a less special case than tin and copper; as a matter of fact, wine and water is the most commonplace example of mixture, so here Aristotle seems to ignore the specificity of the tin and copper combination to transfer Empedocles' explanation to the most unspecific case of mixture, then blame it for relying on a microscopic process. This rather awkward argumentative strategy can be set in sharp contrast with Aristotle's very subtle treatment, and refutation, of combination models in *On generation and corruption*,¹² which could be another sign that the present passage was devised at an anterior and far less elaborate stage of his reflection about mixture theories.

Let us now move to Aristotle's second argument, which more specifically bears on the problem of hybridity and mules' sterility. Once again Aristotle's text is not entirely clear, but here is a tentative translation:

Moreover, (1a) since it happens that a horse is born of horses, or a donkey of donkeys, or a mule of a horse and a donkey, whether they are respectively a male and a female or the contrary, (1b) why in the latter case is the product so hard that it becomes sterile whereas when coming from male and female horses, or male and female donkeys, it does not become sterile? And yet (2a) both the semen coming from the male horse and that coming from the female are soft, (2b) and both stallion and mare can mate with, respectively, a female and male donkey. (3) And the reason they are born sterile in both cases, according to him, is that from both of them is produced something hard, because semen from both of them is soft. (4) So it should also be the case for what is produced from male and female horse. (5a) For if only one of them could mate, then it would be possible to say that only one of them is the cause of infertility by being identical with the donkey's semen; (5b) but in fact, whatever quality has the semen with which the mixture is made, the semen of the congener will also have it.¹³

Although the order of exposition is slightly disconcerting and some passages are quite intricate in detail, Aristotle's general line of argument can clearly be summed up as follows: according to

¹² See J. GROISARD, *Mixis*, pp. 6–10 as well as M. RASHED, *Aristote. De la génération et la corruption* [CUF], Paris, 2005, pp. 149–150.

¹³ ARISTOTLE, *De generatione animalium*, II 8, 747^b 10–23: ἔτι δ' ἐπειδὴ συμβαίνει καὶ ἐξ ἵππων γίνεσθαι ἵππον καὶ ἐξ ὄνων ὄνον καὶ ἐξ ἵππου καὶ ὄνου ἡμίονον, ἀμφοτέρως ἄρρενος καὶ θήλεος ὁποτέρου οὖν ὄντος, διὰ τί ἐκ μὲν τούτων γίγνεται πυκνὸν οὕτως ὥστ' ἄγονον εἶναι τὸ γενόμενον, ἐκ δὲ ἵππου θήλεος καὶ ἄρρενος ἢ ὄνου θήλεος καὶ ἄρρενος οὐ γίγνεται ἄγονον; καίτοι μαλακὸν καὶ τὸ τοῦ ἄρρενος ἵππου ἐστὶ καὶ τὸ τοῦ θήλεος, μίγνυται δὲ καὶ ὁ θήλυς ἵππος καὶ ὁ ἄρρην τῷ ὄνῳ, καὶ τῷ ἄρρην καὶ τῷ θήλει. καὶ διὰ τοῦτο γίνονται ἄγονα ἐξ ἀμφοτέρων, ὥς φησιν, ὅτι ἐξ ἀμφοῦν πυκνὸν τι γίγνεται, μαλακῶν ὄντων τῶν σπερμάτων. ἔδει οὖν καὶ τὸ ἐξ ἵππου ἄρρενος καὶ θήλεος γιγνώμενον. εἰ μὲν γὰρ θάτερον ἐμίνυτο μόνον, ἐνὴν ἂν λέγειν ὅτι θάτερον αἴτιον τοῦ μὴ γεννᾶν ὅμοιον ὃν τῇ τοῦ ὄνου γονῇ· νῦν δ' οἷα περ ἂν ἡ ἐκείνη ἡ μίγνυται, τοιαύτη καὶ ἡ τοῦ συγγενούς.

Empedocles, mules are sterile because they are born from a hard semen mixture, whose consistence results from both parents' semen being soft (3); yet cross-breeding between horse and donkey is possible between either a stallion and a she-ass, or a mare and a he-ass (1a and 2b); so in order for Empedocles' explanation to work, all the four of them should have a soft semen (2a and 5b); but if this is the case, then the offspring should be sterile not only in the case of cross-breeding between both species, but also in the union of congeners, since in all cases the semen from both parents will be soft, and consequently the semen mixture will be hard, and consequently again the offspring developing from it will be sterile (1b and 4). Unlike the first argument above, which was rather weak, this seems to be quite a sound objection to Empedocles' theory, which is criticised from the inside by constructing a contradiction between its internal explicative pattern (mixture of identically soft semen from both parents results in sterility) and the established fact that cross-breeding between horse and donkey is possible for both sexes in each species.

Since Aristotle is our sole source here, some caution is needed as to whether Empedocles' theory was actually liable to such a criticism; as always with Aristotle's account of his predecessors, it is difficult to draw the line between the original theory and the refutation of it. Yet there is clearly an Empedoclean flavour in the theory refuted here, for the most striking aspect of it is that sterility of cross-bred offspring is not caused, as one could expect, by difference, namely by mother and father being of different species, but on the contrary by identity, namely the identical soft consistence of the semen coming from both parents: if sameness results in infertility, then conversely fertile reproduction should rely on difference, and this fits well into the frame of Empedocles' general theory of sexual reproduction, where difference plays a decisive part. Our source about this theory is again Aristotle in another passage of *On the generation of animals* where he reports that Empedocles accounted for generation by using the metaphor of the symbol, i.e., a broken piece of pottery whose parts fit perfectly and serve as a sign of recognition:

For Empedocles says that parts of the offspring are in the male and the female like a symbol, and the whole of it does not come from only one of them: "but the nature of members is scattered, one in the male's..."¹⁴

Aristotle's quotation of Empedocles is incomplete but one can easily supply something like "one in the male's *semen* and another in the female's".¹⁵ So Empedocles' point is that the parts of the offspring coming from each parent are different, which is explicitly stated a few line below in Aristotle's text: "just as he says, not the same parts come from each of them".¹⁶ This is also quite obvious from the symbol metaphor, since the broken fragments would never fit if they were identical. So Empedocles' theory of generation is clearly based on the difference and fertile complementarity of both sexes, and this could account for an explanation of mules' sterility by excessive sameness rather than excessive difference.

¹⁴ ARISTOTLE, *De generatione animalium*, I 18, 722^b10–12 [= DK 31 B 63]: φησὶ γὰρ ἐν τῷ ἄρρενι καὶ τῷ θήλει οἶον σύμβολον ἐνεῖναι, ὅλον δ' ἀπ' οὐδετέρου ἀπιέναι, "ἀλλὰ διέσπασται μελέων φύσις, ἥ μὲν ἐν ἀνδρός..."

¹⁵ This is also the interpretation of H. DIELS and W. KRANZ, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 6th ed., Berlin, 1951–1952, who translate: "Aber der Ursprung der (menschlichen) Glieder liegt auseinander: das eine liegt in dem männlichen, (das andere in dem weiblichen Samen verborgen)."

¹⁶ ARISTOTLE, *De generatione animalium*, I 18, 722^b15–16: οὕτως ὥσπερ ἐκεῖνος λέγει, οὐ ταῦτ' ἀφ' ἑκατέρου.

4 Textual problems in Aristotle's refutation

The interpretation given above of Aristotle's second argument is based on a few emendations to the text of most recent editions of *On the generation of animals*.

The first one is in sentence (3): διὰ τοῦτο γίνονται ἄγονα ἐξ ἀμφοτέρων, ὥς φησιν, ὅτι ἐξ ἀμφοῖν πύκνον τι γίνεται, μαλακῶν ὄντων τῶν σπερμάτων. The text of manuscripts is corrupt and the word πύκνον is in fact an excellent correction by Platt, where manuscripts have έν. In his authoritative work on Empedocles, Bollack does not correct the text and reads έν as it is transmitted by manuscripts,¹⁷ but in that case the sentence would mean that unity of the semen mixture is the cause for mules' sterility, and that this unity is itself caused by softness of the seminal matter coming from both parents; but such statements would be altogether unrelated to the context of Aristotle's account of Empedocles' theory and his refutation of it; as argued above, it is very clear that in the context mules' sterility is explained by the semen mixture being too hard, not by its being one unified thing. Recent editors of *On the generation of animals*, first Peck and after him Louis as well as Drossaart Lulofs, rightly follow Platt's correction, but instead of replacing πύκνον by έν, they add πύκνον after γίνεται while keeping έν before τι, which translates as: "from both of them is produced something one and hard". Of course the mention of unity could be understood in the context of mixture, meaning that seminal matter coming from both parents is mixed into something one, but once again this is not the point here: what matters in this passage is just that soft semen mixing with soft semen makes something hard, so on the whole a reference to unity of semen mixture is not really needed. Another good reason to return to Platt's correction of έν into πύκνον is palaeographical: the word έν could just be what is left of the end of πύκνον in majuscule script, since *epsilon* and *omicron* have a similar round shape in that kind of writing. The fact that this mistake is common to the whole tradition also argues for an early date, before transliteration from majuscule to minuscule script.

Another change from most recent editors' text of *On the generation of animals* is in sentence (5a): εί μὲν γὰρ θάτερον ἐμίγνυτο μόνον, ἐνῆν ἂν λέγειν ὅτι θάτερον αἴτιον τοῦ μὴ γεννᾶν ὁμοιον ὃν τῇ τοῦ ὄνου γονῇ. In our interpretation of this sentence, the first θάτερον refers to either male or female in the horse species, and the second θάτερον to the same sex as the first occurrence: if only the male could mate with a she-ass, then the male would be the cause for the sterility of hinnies, and conversely if only the mare could mate with a he-ass, then the female would be the cause for the sterility of mules. In both cases, the reason of sterility is the softness of both parents' semen, i.e., the fact that the semen from the stallion or the mare is *similar* to that coming, respectively, from the she- or he-ass. Although the manuscript reading ὁμοιον seems perfectly adequate in this context, it has been corrected in ἀνόμοιον by Platt, followed by Peck and Louis in their own editions. Without using Platt's correction, Drossaart Lulofs agrees with his interpretation since he chooses the equivalent reading οὐχ ὁμοιον which he finds in only one *recentior* Greek codex, the *Riccardianus* 13, and which is also reflected in the Arabic and Graeco-Latin translations of the treatise;¹⁸ yet there is little philological ground for this editorial choice because ὁμοιον without

¹⁷ J. BOLLACK, *Empédocle*, vol. II, Paris, 1969, p. 261.

¹⁸ H. J. DROSSAART LULOFS, *Aristotelis De generatione animalium*, Oxford, 1965, p. 91, critical apparatus *ad locum*.

the negation οὐχ is given by all the most authoritative manuscripts, including Z, P and S, whose consensus is usually taken by Drossaart Lulofs himself as the base of his edition.¹⁹ The reason for this surprising decision may be the one adduced by Bollack, who also chooses οὐχ ὅμοιον²⁰ and interprets the negation as meaning that, for instance, the stallion is responsible for the sterility of hinnies because he is *not* able to provide the she-ass with the same semen as the he-ass.²¹ Yet, as already said, this does not match the precise context of Aristotle's report on Empedocles, and the negation before ὅμοιον in part (and not the most authoritative one) of the tradition could easily have been added at some point in transmission by a process of banalisation or trivialisation of the text, since the idea that sterility comes from the difference of cross-bred species is far more commonplace than explaining it by a *similar* property in both parents' semen.

The last and most intricate textual problem is about sentence (5b), whose interpretation is made difficult both by Aristotle's extreme concision and by corruptions in the transmitted text.²² All recent editors, Peck, Louis and Drossaart Lulofs, give the same text: νῦν δ' οἴαπερ οὔση ἐκείνη μίγνυται, τοιαύτη καὶ τῇ τοῦ συγγενοῦς. The train of thought leading to this sentence requests the conclusion that "in fact" (νῦν δέ), since cross-breeding is possible both for male and female of the horse and donkey species, the quality of softness that is said to cause mules' sterility will also be found in congeners, so that the semen of the congener is exactly *such as* the semen of the partner of different species in the case of hybridisation; in the Greek text, it is most likely that the οἴαπερ... τοιαύτη... correlation expresses this idea of *such as*. Now we are embarrassed with datives τοιαύτη and τῇ in the main clause;²³ here the manuscript tradition is of some help since

¹⁹ *Ibid.*, p. xiii.

²⁰ J. BOLLACK, *Empédocle*, vol. II, no. 682.

²¹ *Ibid.*, vol. III, p. 573, no. 8. The same interpretation of this argument (sterility could be caused by only one sex not providing the same semen as the same sex in the other species) could also be adduced by reading μὴ γεννᾶν ὅμοιον without the following ὄν, which is omitted by several manuscripts, including Z and S (but not P), and taking ὅμοιον as the object of μὴ γεννᾶν; in this interpretation, the subject of μὴ γεννᾶν is no longer mules, but θάτερον, namely either male or female horse, and the whole sentence means that, if hybridity were not reciprocal between both sexes, only one sex (in horse) could be said to be "responsible of its not giving birth to something similar to the donkey's semen". From a palaeographical point of view, one could indeed suppose that ὄν has been wrongly added by dittography after ὅμοιον, but the ὄν may just as well have disappeared in ὅμοιον ὄν by haplography, so the palaeographical argument is not decisive here; yet, since relating hybridity to a lack of similarity with the semen of the other species (μὴ γεννᾶν ὅμοιον τῇ τοῦ ὄνου γονῇ) is much more obvious than relating it to similarity with it (ὅμοιον ὄν), this latter variant seems to have the advantage of the *lectio difficilior*. Besides, in the context of Aristotle's discussion about mules, it is much more natural to take αἴτιον τοῦ μὴ γεννᾶν as meaning "the cause of mules' sterility" (with "mules" as an implicit subject of μὴ γεννᾶν) rather than the cause of any reproductive disability in horses (with θάτερον as the subject of μὴ γεννᾶν).

²² The meaning of this sentence is so closely determined by the preceding argument that it can be understood from the context in spite of its intrinsic obscurity. The interpretation given here is not new: it corresponds to that of most modern translators and already appears in the Byzantine commentary on Aristotle's *De generatione animalium* by Michael of Ephesus (wrongly attributed to John Philoponus, ed. M. HAYDUCK, *Ioannis Philoponi (Michaeli Ephesii) in libros De generatione animalium commentaria [Commentaria in Aristotelem Graeca]*, Berlin, 1903, p. 125). My attempt is just at providing a sounder textual base for this already existing interpretation.

²³ One way to account for these datives would be to invoke some kind of attraction of expected nominatives τοιαύτη and ἡ in the main clause by οἴαπερ οὔση ἐκείνη in the subordinate clause; yet since the expected nominatives have good manuscript authority, my hypothesis is that they were corrupted by contamination from the three preceding datives. If one wants to keep the datives in the main clause, I think they should be related to an implicit μίγνυται ("just as it mixes with that semen being such and such, likewise it mixes with the congener's semen also being such

Z has the nominative ἡ instead of τῇ; Z is the *Oxoniensis Collegii Corporis Christi* 108, nothing less than the most ancient (9th–10th century) and most authoritative manuscript of the treatise;²⁴ so a sound move seems to consider the nominative ἡ τοῦ συγγενούς as the grammatical subject of the main clause, the feminine ἡ referring to γονῇ at the end of the previous sentence. The next step is to take τοιαύτη as predicate and read it τοιαύτη in nominative, which also seems to be the reading of Z which has τοιαυτη with no accent and without the iota adscript used by the scribe for the dative.²⁵ Until now, our corrected text of the main clause can be translated as “the (semen) of the congener is such...” Things get a little more complicated with the subordinate clause introduced by οἷαπερ: here again Z has a better text with a relative pronoun ἥ before μίγνυται; Drossaart Lulofs' critical apparatus indicates that this relative is added by the original scribe of the manuscript,²⁶ but this does not affect the value of this reading since the pronoun could have been omitted first by haplography at the end of ἐκεῖνη. The antecedent of this relative is most likely the previous word ἐκεῖνη so that ἐκεῖνη ἥ μίγνυται would mean: “that (semen e.g. of species B) to which is mixed” the semen of species A. Once again we should read a nominative ἐκεῖνη rather than a dative (although in this case Z has ἐκεῖνη) and make it the subject of the subordinate clause with οἷαπερ, also corrected in οἷαπερ, as predicate. One last problem is οὕσῃ which has no reason to be in dative and participle form; a not so unlikely solution would be to consider it the corruption of the subjunctive ἂν ᾗ. A very literal translation of the whole corrected sentence (νῦν δ' οἷαπερ ἂν ᾗ ἐκεῖνη ἥ μίγνυται, τοιαύτη καὶ ἡ τοῦ συγγενούς) would then be: “in fact, such as is that semen to which it is mixed, such will also be that of the congener”; or more explicitly, “whatever quality (responsible for sterility, i.e., softness) that has that semen (of species B) to which it (i.e., the semen of species A) is mixed, the semen of the congener (of species A) will also have it (i.e., softness)”. Which is the required meaning for the sentence to match exactly the context of Aristotle's report, and refutation, of Empedocles' theory on mules' sterility.

5 Conclusion

Of the two testimonies we have about the way Empedocles explained mules' sterility, Aristotle's one is by far the most authoritative. This is not only because Aristotle is chronologically closer to Empedocles and as a rule more reliable than later and less accurate doxographical sources: as seen above, the name “Empedocles” in the testimony given by Aëtius may probably have been introduced in a text about another philosopher and physician, Alcmaeon, maybe by confusion with the physician Diocles whose anatomical observations were used to confirm Alcmaeon's (and not Empedocles' as in the present state of the text) theory about mules' sterility. With this high probability that this Aëtius testimony is just *not* about Empedocles, we have to rely exclusively on Aristotle to reconstitute Empedocles' original theory. We have two good reasons to trust Aristotle's testimony: first, it is included in a refutation of Empedocles' argument, which allows us to check our interpretation of the testimony itself by the way Aristotle tries to refute it; second, there is

and such”); this is quite rough syntax, but not impossible for Aristotle.

²⁴ H. J. DROSSAART LULOFS, *Aristotelis De generatione animalium*, pp. vi–vii and xiii.

²⁵ *Ibid.*, p. 91, critical apparatus *ad locum*.

²⁶ *Ibid.*

a strong congruence between a rather paradoxical feature of the view ascribed to Empedocles (sterility in hybrids such as mules is not due to difference but to sameness) and what we know of Empedocles' general theory of sexual reproduction. Yet, we have also two good reasons to remain careful about Aristotle's report: first, we have no parallel testimony to check its accuracy and Aristotle is well-known for often reworking or simplifying his predecessors' views to match his own context or arguments; second, Aristotle's text is not completely clear, which is due not only to the obscurity for which he blames Empedocles, but also to the various textual problems we have discussed above.

(Tokyo Metropolitan University)

シェリ訳『ヘルメース讃歌』

——読むに値する韻文訳——

神保菰

シェリ (P. B. Shelley, 1792–1822) 訳『ヘルメース讃歌』(*Hymn to Mercury Translated from the Greek of Homer*, 1820) はかなり評価されている。イヴリン・ホワイト (Hugh G. Evelyn-White) はロエブ版『ホメーロス讃歌』の序文で『ヘルメース讃歌』が滑稽な特質に於いて他の讃歌とは異なることを指摘した上で、「それはシェリ訳が出たお蔭で英語で読む人々には讃歌の中で一番よく知られている。」^{*1} と言い、これより前 19 世紀末にラング (Andrew Lang, 1844–1912) は彼自身のこの讃歌の散文訳への序文で、「『ヘルメース讃歌』のテキストは誤りだらけで欠陥本 (*lacuna*) とさえ言える。英語で読む人なら当然、他のどの訳よりも、生き生きとした魅力的なシェリ訳を選ぶだろう。詩人は混乱したテキストのいくつもの落とし穴にはまっても目に見えてもがいたりはずせずに物語をうまく潤色して語ることが出来るものである。」^{*2} と讃辞を呈している。これら二つの評はシェリ訳の特徴をよく示している。これらを念頭においてシェリがどのような意図と目的でこの仕事を手掛け、どのような努力をしたかを吟味し、この仕事の意義を考えたい。次の手順で論をすすめたい。

I 『讃歌』翻訳に至った経過及び意図

II ヘルマン版とシェリ訳

III シェリの表現・シェリの解釈——逐語 (literal) 訳より読むに値する韻文 (legible) 訳を——

IV シェリの表現と詩型の活用

V まとめ

* My thanks are due to the Bodleian Libraries, University of Oxford for kind permission to publish from the Bodleian Shelley MSS (Bodleian MS. Shelley adds. e.9, pp. 117 and 118) in this article: 'Shelley's *Hymn to Mercury Translated from the Greek of Homer*: A Legible Translation' by Suzuna Jimbo.

*1 Hesiod, *Homeric Hymns, Epic Cycle Homerica*, with an English Translation by Hugh G. Evelyn-White, The Loeb Classical Library, [1914], repr. 1998, p. xxxvii.

*2 Andrew Lang, *The Homeric Hymns, A New Translation and Essays, Literary and Mythological*, George Allen, 1899, p. 35.

I 『讃歌』翻訳に至った経過及び意図

シェリが『讃歌』を読んだきっかけはオックスフォード以来の親友ホッグに熱心にすすめられた(1817年4月5日)からである*3。7月11, 12, 13日に『讃歌』を読み*4、10月には『讃歌』が『イーリアス』や『オデュッセイア』とは別に印刷された版を注文し*5、1818年1月に33の『讃歌』から比較的短いものを6篇、全部または一部分訳したところで、目の具合が悪くなり(ophthalmia)、更にイタリア行きで家を引き払ったりで中断、3月11日に離英、約2年半後イタリアで一番長い『ヘルメース讃歌』を訳すことになる。

さてずっと愛読していた『イーリアス』や『オデュッセイア』とは「別に印刷されたテキスト」として受け取ったのはヘルマン版(G. Hermann ed., *Homeri Hymni et Epigrammata*, Leipzig 1806)であったろうと言われている*6。1817年から翌年はじめにかけての半年間は友人三人と共に自ら「ギリシア愛好の仲間」(the society of Athenians)と称してギリシア語に熱中していた。それ以来イタリアへ行く道中も渡伊後もギリシア語、とりわけホメロス、ギリシア悲劇は毎日読み続け、同時に自身の創作も続けていたので『讃歌』だけに関しても2年半後に『ヘルメース』を訳した時のシェリのギリシア理解は2-3年前とは格段の差があった。したがって2年半前に『讃歌』6つを迷うことなく簡単に二行連句(couplet)で訳していたが、『ヘルメース』翻訳に際しては詩型その他に熟考のあとが見える。

その熟考のあとが見られる資料として『ヘルメース』翻訳前にシェリが認めたと考えられるメモに注目したい。シェリは1820年7月に翻訳した『ヘルメース』訳を記した同じノートブックの直前にこの訳に関する構想と見られるギリシア語4語ではじまる4つの断片を書きつけている*7。思いつくままに記された不完全なこれら断片の意図解明はなかなか困難であるが、重要な意味をもつと思われる。すでにこの手書きノートブックのファクシミリ版*8及びウェブの(シェリの翻訳を論ずる) *The Violet in the Crucible**9で、解説、解説されているが、二三疑問点があり、まだ検討不十分なので、この場で再考したい。ま

*3 *The Poems of Shelley*, ii, p. 338.

*4 *Mary Shelley's Journal*, p. 82.

*5 *Letters*, i, p. 565.

*6 Timothy Webb, *The Violet in the Crucible: Shelley and Translation*, Oxford at the Clarendon Press 1976, pp. 350-1.

*7 Bodleian MS. Shelley adds. e.9, pp. 117 and 118.

*8 *Percy Bysshe Shelley* vol. xiv, Shelley's "Devils" Notebook, Bodleian MS. Shelley adds. e.9, a Facsimile Edition with Transcription and Textual Notes, ed P. M. S. Dawson and Timothy Webb, Garland Pub. Inc. New York and London 1993, pp. 124-127, 284.

*9 Webb, *The Violet in the Crucible: Shelley and Translation* (cf. n. 6), p. 126.

ずこの手書き断片の私の（再考）解説案を、次に上記二書の解説案の問題点及び対策案を示し、然る後、それらを整理し 4 断片全体を通してこれらを書いた時の詩人の意図を考えたい。特にこのメモを記した時期（下記第 3 断片の部分で詳説）と殆んど同時期の 1820 年 7 月 12 日付親友ピーコック（Thomas Love Peacock）への手紙で詩人が伝えている内容をこのメモの第 3 断片と重ね合わせることによって、詩人の意図が鮮明になり、各断片がそれほど不完全ではなく、4 断片全体としても一つの繋がりという意味を持つてくると思われる。

The Four Fragments from the Bodleian MS. Shelley adds.e.9, pp. 117 and 118:

p. 117

ερικυδεος εκηβολος, εκαεργος δε
Wd fill up a blank verse, which is
 ill & easily made by the herd of
 Translators; but in the octave
 stanza

Methought I was a billow in the crowd
 Of common men—that stream without a shore
 That Ocean which at once is deaf and loud
 That I, a man, stood amid many more

When the structure of the verse
 has rendered it impossible to express
literally the sense of the original
 the author has *preferred*

p. 118

on the other hand it may be said
 This translation is as bad as Popes—
 without being as good;
 that is it has all its faults & none of its
 merits.—I beg those critics who
 mean to speak unfavourably of it
 to copy this sentence into their reviews,
 unless they can find a severer—
 (Italics mine.)

問題点 Ⅰ 第 Ⅰ 断片 2 行目、行頭の語をウェブは which と読んでいる。それは不可能ではないが文法的にすっきりしないのでファクシミリ版同様、Wd = Would と読みたい。

問題点 2 第 2 断片全 4 行は、この部分が過去形で書かれていることから、今まで、ホメロス訳をした詩人たちの訳も余り感心出来ず「自分自身」も二年半前に余りよく考えずに二行連句 (couplet) で訳したことを反省していると考えられる。特にシェリがこの時念頭においていたホメロス訳はこのノートブックのファクシミリ版の註によればチャップマン (George Chapman, 1559?-1634) の『イーリアス』1611、『オデュッセイア』1614、『讃歌』1624? (以上チャップマン訳の詩型は全て二行連句)、ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) の『イーリアス』1720 及び『オデュッセイア』1725-6 (いずれも詩型は二行連句)、それにクーパー (William Cowper, 1731-1800) の『イーリアス』と『オデュッセイア』 (いずれも 1791 年出版で詩型は五脚抑揚調無韻詩 blank verse) であったと考えられる*10。しかしこの第 2 断片の 4 行が、なぜ過去形で書かれ、この抽象的表現が何をさし、この 4 行がどういう意味を持つかは、上記いずれの書物でも説明されていない。

問題点 3 第 3 断片は 4 行の完結されない文章で終わっているので判読が困難になるがウェブは 3 行目 original の後にコンマを入れ 4 行目を the author has *prefixed* (イタリックは筆者、以下同様) とし、そのあとに第 4 断片の (1 行目を省き) 2 行目以下を 'This translation is as bad as Pope's—... severer.' として続けているがあまりしっくりつながらないし、これでは大変弱気なシェリの姿勢になる。このノートブックのファクシミリ版*11 にもある通り、これはあくまで『ヘルメース讃歌』を訳すに当ってシェリ自身が方針をまとめる時に自分で思いめぐらしたことを書いたメモで公表する気はなく、直後の自筆清書 (Harvard MS. Eng. 258.2, pp. 110-145)*12 にもこのメモは入っていない。したがってウェブ案には賛成しがたく、それよりも、4 行目の最後の単語は 'preferred' と読み、この 'prefer' した内容を同時期に書かれたピーコックへの手紙から推測することを提案する。

Preferred の r が二つあるかどうかは判読しにくい、例えばこの『ヘルメース』訳の 46 連の 1 行目 'O, let not e'er this quarrel be averred' (Bod. MS. Shelley adds. e.9, p. 146) の rre のシェリの書き方を参考に、又シェリ自身、自分では preferred と書いたつもりが自分用のメモであれば rre とはつきりは書かなかった可能性は多分にある。

さて次に、'preferred' で途切れた第 3 断片を書いていた時、シェリは何を考えていたか。直前の 3 行は「詩型 (ここでは八行連句) 故に原作の意味を逐語的に表現できない場合は」であるから、その場合シェリはどうしたいと考えていたか、ということを検討する必

*10 Cf. Facsimile Ed. of the notebook, p. 284.

*11 *Ibid.*

*12 Cf. *Percy Bysshe Shelley* vol. v, *The Harvard Shelley Poetic Manuscripts, Facsimiles of the Harvard Shelley Fair-Copy Notebooks ... and Manuscripts of Shelley's Poetry* (MS. Eng. 258.2, MS. Eng. 258.3 and fMS. Eng. 822), ed. Donald H. Reiman, pp. 105-141.

要がある。丁度このメモを書いたのと殆んど同時、すなわち 1820 年 7 月 12 日付親友ピーコックへの手紙でまさしくこのメモと同一内容が認められている。「僕は八行連句 (*ottava rima*) でホメーロスの『ヘルメース讃歌』(‘Hymn to Mercury’) を訳している。当然のことながらこの詩型で訳すと逐語訳は排除することになる (Of course my stanza precludes a *literal* translation.)。その代わり詩として読むに値するものにしなければならない (My next effort will be, that it should be *legible*) ——これこそ (韻文) 訳で大いに望まれる美点なのだ (a quality much to be desired in translations.)。’^{*13} という条りである。『ヘルメース讃歌』を訳し終えたのは 7 月 14 日^{*14} で訳を始めた記録はないが、ロングマン版のこの訳詩の解説にある通り「このノートブックには殆ど他の草稿や別のメモ類が皆無であるから、」^{*15} 一気呵成に書きあげたものと考えられる。したがって書いた期日は最短で上記ピーコックへの手紙で「今訳している」といった 7 月 12 日から 7 月 14 日まで、ながくて「6 月末から」^{*16} 7 月 14 日の間になる。いずれにせよ、訳し始める直前にこのメモを書きつつ、心の中では方針を固めメモを完成する間ももどかしく、あるいは他の何かの理由で訳に入ってしまう、調子が乗って来たところでピーコックへ上記の手紙を書いたものと考えられる。故に、ピーコックへの手紙にある「八行連句を用い、逐語訳ではなく、読むに値する韻文訳をめざしている。」というのはシェリ自身が決めた方針に従って今進行中の仕事の報告であるから、このメモを書いた時に考えていたことはこの手紙の報告と同じ内容の事であろうと考えて当然であろう。したがって ‘preferred’ のあとには ‘that it should be legible—a quality much to be desired in translations.’ のような内容を補うことが出来るのではないか。

問題点 4 第 4 断片の 1 行目をウェブは無視しているが第 3 断片に提案した内容とのつながりにはこの 1 行が生きてくる。

以上の観点から修正した私案に基づいてシェリのメモの内容を整理すると：

1. 無韻詩は、(脚韻の制約は受けない代わりに) これを使うと「ところが、輝かしい、遠矢を射る、遠矢を放つ」という決まり文句が訳詩を満たすことになる。これはホメーロスを訳す凡庸詩人たちによって気軽に行われているが詩をつまらないものになっている。しかし八行連句を使うと、
2. 我今まで凡人の群れの一員、

^{*13} *Letters*, ii, p. 213.

^{*14} *Mary Shelley's Journal*, p. 136.

^{*15} *The Poems of Shelley*, iii, p. 508.

^{*16} *Ibid.*

行きつく先もなく流れゆく群れの、
 他の物音すべてを、消し去る大音響の大海中、
 その大勢の中に一人の凡人として立つように思へり。

この4行は八行連句の前半の形で、内容的には今までのホメーロス訳を批判、彼自身も反省している*17。即ち、二行連句を用いたチャップマンやポウプ、連句の脚韻の制約を排し「原文に忠実に」「エピソードも英語になじめばそのまま」*18を看板に無韻詩で訳したクーパー等、今までホメーロスを訳した詩人たちやその読者そして自分自身も凡庸でこれが世間の趨勢となつて目標もなく押し流されてゆく、という内容を、実際に八行連句の途中までで例示し、

3. このように韻律の制約故に忠実に原文の意味を表現することが出来なくなった場合は訳者としてはせめて読むに値するものにしたい。このほうがずっと大切なことだ。
4. それでもやはり私の意図が理解出来ずにポウプのほうがましだという批評家がいるかも知れない。これ以上酷い評論が見つからなければ（見つからないと思うが）「この訳はポウプの欠点をすべて持ち合せ、ポウプの取柄は一つもない」というこの文章を彼らの評論に書き写せばよい。

以上の構想ではじめたシェリの『ヘルメース讃歌』訳はかなり自信をもって集中して行われたと私は思う。即ちこのメモやピーコックへの手紙（1820年7月12日）の直後一気に訳し（下書きは7月14日終了）続いて前述の如く自ら清書もした。

II ヘルマン版とシェリ訳

次にシェリが使用したヘルマン版故の問題点をどう処理したか、あるいはヘルマン版が必ずしも悪いと言えない場合はどうか、次の三か所についてシェリ訳と比較して見よう。Gk. (OCT Allen 版によるギリシア語原文)、S. (Jack Donovan etc. ed. Longman 版によるシェリ訳)、必要に応じて Ch. (チャップマン訳) の順でテキストを示す*19。

*17 この4行はこの同じノートブックの別の場所 (Bod. MS. Shelley adds. e.9, p. 21) にも記されており、シェリの他の作品 (*Adonais* や *The Triumph of Life*) との関連も考えられている。 (Cf. *The Poems of Shelley* vol. iv, pp. 6-7, and Dawson and Webb, Facsimile Ed. of the Notebook, pp. xxi-xxiv.) しかしその同じ内容の事をシェリが『ヘルメース』を訳すに当って考えていたとしてもおかしくない。又詩型も Spenserian stanza あるいは *ottava rima* いずれの前半ともとれる。

*18 William Cowper, Preface to *the Iliad of Homer*, vol. i, p. xv.

*19 はじめの2カ所 Gk. 79-81 と Gk. 156-159 についてはウェブも指摘している (*Violet*, pp. 91-2)。

I ヘルメースが牛を盗んだあと足跡をごまかすため工作する場面

Gk. 79–81

σάνδαλα δ' αὐτίκα ῥυβὴν ἐπὶ ψαμάθοις ἀλήσων
ἄφραστ' ἡδ' ἀνόητα διέπλεκε, θαυματὰ ἔργα,
συμμίσγων μυρίκας καὶ μυρσινοειδέας ὄζους.

(Underline mine. Hereafter the same.)

79 αὐτίκ' ἔρμυεν Herm.

S. 99–102 (st. 13)

His sandals then *he threw* to the Ocean spray
And for each foot he wrought a kind of raft
Of tamarisk, and tamarisk-like sprigs,
And bound them in a lump with withy twigs.
(Italics mine. Hereafter the same.)

Ch. 155–161

And he himselfe (as slye-pac't) *cast away*
His sandalls on the sea sands; past display
And unexcogitable thoughts in Act
Putting, to shunn of his stolne steps the Tract,
Mixing both Tamarisk and like-Tamarisk sprays
In a most rare confusion, to raise
His footsteps up from earth.

ギリシア語 I 行目、ヘルマン版では ῥυβὴν (こりやなぎを編んで) の代わりに ἔρμυεν (彼は投げ捨てた) となっているので文法的にかなりアレン版とは異なってくるが、l. 79, l. 80 それぞれの動詞 ἔρμυεν と διέπλεκε (編みあげた) に「サンダルを」と「前代未聞の名状しがたい見事な品物を」と目的語を割り当てて、次の分詞につないでいる。しかしこの「編みあげた」(シェリ訳は wrought) の目的語「前代未聞の……品物を」を文字どおりには訳さずに、S. 100 の如く、その「名状しがたい品物」が具体的にどんなものかを描き出す、即ち原文を音読した時に詩人の脳裏には、こりやなぎとこりやなぎもどきで編んだ今のスケートボード(但し両足別々の)のようなものがうかんだのではないかと。したがってそれには自然 S. 101 も付いて出てしまい、Gk. 81 の συμμίσγων 以下は S. 102 'And bound them ...' とまとめている。したがって Gk. 79 は「海の砂浜に」の代わりに「海中へ」(to the Ocean spray) 以外はヘルマンのテキスト通りの訳になっているが、Gk. 80–81 は 2 行ひとまとめの像として S. 100–102 の訳となっている。韻律の上からは、一音節語を主と

した素朴な単語が流れるように飛ぶように続き原文のリズム感をうまく表現して読んで楽しい。これに対してチャップマン訳は脚韻のためもあるがまず倒置 (ll. 156–8 *past display ... Putting, l. 158 of his stolne steps the Tract*) が目立ち違和感を与える。実に一語一語の用語と用法が不自然で原作への愛が感じられないのではないか。“*ἄφραστος*”を‘*past display*’ (= *beyond description*)、*“ἡδ’ ἀνόητα”*を‘*unexcogitable*’ (= *that cannot be thought out*) と訳しこれらはともに‘*thoughts*’に係る形容詞で、Gk. 80 を Ch. 156–158 で‘*Putting thoughts past display and unexcogitable, in Act*’ (名状しがたく考えも及ばない思考を実行に移して) と訳している。エリザベス朝好み (エリザベス女王自身は 1603 年に没しているが文学上の風潮は死後も続いた) と言おうか不自然さが強い。Gk. 81 は Ch. 159 で原文通り訳しているが、Ch. 158 ‘*to shunn of his stolne steps the Tract*’ (= *to hide the track of his secret steps*) と Ch. 160 ‘*In a most rare confusion*’ 及び Ch. 160–161 ‘*to raise | ... up from earth.*’ はギリシア語原文にはない。原文の率直な表現、特にこの詩の素朴な雰囲気とスピード感にこのような修辭や表現又 l. 157 の *unexcogitable* というようなラテン語由来の固い言葉は合わないし、リズム感を壊す。従ってシェリはチャップマン訳を入手 (1818 年 1 月 22 日注文、受取日は不明) 後すぐに一読したに違いないがどれほど評価したかは疑問である。

2 牛泥棒をしたあと洞窟の揺籃に戻ったヘルメースをマイアが叱る場面

Gk. 156–159

νῦν σε μάλ’ οἶω
ἡ τάχ’ ἀμήχανα δεσμὰ περὶ πλευρῇσιν ἔχοντα
Λητοῖδου ὑπὸ χερσὶ διέκ προθύροιο περήσειν,
ἡ σέ φέροντα μεταξὺ κατ’ ἄγκυα φηλητεύσειν.

159 *λαβόντα* [catching] *ἄγκυα... ulnas dici arbitror. Herm.*

S. 206–210 (st. 27)

‘Apollo soon will pass within this gate
 And bind your tender body in a chain
 Inextricably tight and fast as fate,
 Unless you can delude the God again
 Even when within his arms—ah, runagate!’

原文 l. 159 *φέροντα* (略奪しながら) の代わりにヘルマンは *λαβόντα* (つかまえて) とし、更に *ἄγκυα* (谷間) を *ulnas* (腕) を意味すると註をつけている。この「つかまえて」はどうも続きにくいし谷間と腕では大いに内容も異なるのであるがシェリはこの *σέ* にアクセントが付いて強調されていることに注目してか、この引用の前半はアポロンが縛り上げる

ことを強調し、後半はヘルメースの方が、アポロンの腕にかかってからでさえアポロンをだますという話に仕立て上げた。いやこのテキストではそれが最善の方法と言えるかもしれない。そしてここも一音節語を多用し、t-t, f-f (l. 208) や w-w, a-a (l. 210) の頭韻を利かせた 3 行目、5 行目、更に d-d-d, g-g (l. 209) の音を畳み掛ける 4 行目が心地よくきびきびしたりズム感を与える。

この部分に相当するチャップマン訳 293-302 行は、訳は内容を取り違えたか、原文から大きく外れている。即ち前半は「お前は外へ出て行く方がましだ。」(l. 296 *Thou rather shouldst be getting forth thy gate.*)、後半は「ラトーナが立腹、捕えに来るだろう。」(ll. 299-301 *To be impos'd by vext Latona's hands, | Justly incenst for her Apollo's harms.*) となりラトーナの息子ではなくラトーナが主語になっている。

3 ヘルマン版が誤りとは言えない場合

Gk. 478-479

εὐμόλπει μετὰ χερσὶν ἔχων λιγύφωνον ἑταίρην
καλὰ καὶ εὖ κατὰ κόσμον ἐπιστάμενος ἀγορεύειν.

479 ἐπισταμένην Herm.

S. 642-644 (st. 81)

...—and with fleet fingers make

Thy liquid-voiced comrade talk with thee,—

It can talk measured music eloquently.

l. 479 の分詞がアレン版では男性主格になっているので l. 478 の命令文の主体アポロンに係るが、ヘルマン版では女性対格になっているのでこの分詞句「語る事が出来る」は「清澄な声の友」即ちヘルメースが進呈しようとしている豎琴に係る。したがってシェリは上記の如く「この琴は感動的な調べの楽を奏でてくれる。」と訳して原文の感触をよく伝えている。さてこの部分に関してアレン版とヘルマン版のどちらが正しいかということになると私にはヘルマン版のようにするのが自然のように思われる。l. 479 の前半部分は「美しく見事に調律されている」と楽器に関する表現のようで、自然後半の分詞句も楽器にかかけたい。またこの作品全体の流れからも、それが相応しい。即ち原文 467-474 行ではヘルメースがアポロンを讃美し、アポロンが十分この特別の楽器を奏する能力があると認めた上で、この楽器を手渡すことになり、478-488 行はこの楽器がいかにすばらしいかを語る場面だからである。

III シェリの表現・シェリの解釈——逐語 (literal) 訳より読むに値する韻文 (legible) 訳を——

次の 4 つの例についてシェリ訳の特徴を調べたい。

I 亀の処理の速さの表現

Gk. 43-46

ὥς δ' ὅπότ' ὡκὺ νόημα διὰ στέρνοιο περήσει
ἀνέρος ὃν τε θαμναὶ ἐπιστροφῶσι μέριμναι,
ἢ ὅτε δινηθῶσιν ἀπ' ὀφθαλμῶν ἀμαρυγαί,
ὥς ἅμ' ἔπος τε καὶ ἔργον ἐμήδετο κύδιμος Ἑρμῆς.

43 περήσει Herm.

44 ἀνέρος, ὃν τε θαμναὶ Herm.

45 [ὥς δ' ὅτε] Herm.

S. 51-56 (st. 7)

Not swifter a swift thought of woe or weal

Darts through the tumult of a human breast

Which thronging cares annoy,—*not swifter* wheel

The flashes of its torture and unrest

Out of the dizzy eyes—*than* Maia's son

All that he did devise hath featly done.

原文の Gk. 43-44 「まるで心配事で頭がいっぱいになっている人の、心の奥まで、ある思想がす速く滲みわたる時のように」、Gk. 45 「あるいはちらっと見る目がまわってくらむ時のように」という比較の表現をシェリは、それぞれ、S. 51-53 「群がる憂慮、悩ます（人の）心の嵐の中を、悲喜の思いが（矢のように）射抜く速さも及ぶまい」、及び、S. 53-55 「又心の煩悶不安の閃光が目をくらます速さも及ぶまい」と訳し、更に原文最終行 Gk. 46 を「マイアの息子、そのたくらみを手際鮮やか仕遂げたのには。」(S. 55-56) と訳してこの条りを結んでいる。シェリの比較の表現は原文より大袈裟で強烈、使う用語も s-s-th, w-w (l. 51), d-th-t (l. 52) 等頭韻の音響的效果で加速度的な速さを表現したり dart (矢が飛ぶ) や tumult (大混乱、激動の嵐)、wheel (旋回する) や flash (雷電の閃光、発火) 等烈しい言葉を用い彼の詩のテンポよいリズムと相俟って、いかにすばやく処理したか、子供ながらその才能の非凡さを強調し迫力満点といえる。

2 簡略化——アポロンのワナが瞬時に消える

Gk. 409–413

Ὡς ἄρ' ἔφη, καὶ χερσὶ περιστρεφε καρτερὰ δεσμὰ
ἄγνου· ταὶ δ' ὑπὸ ποσσὶ κατὰ χθονὸς αἴψα φύοντο
αὐτόθεν ἐμβολάδην ἐστραμμέναι ἀλλήλῃσι
ῥεῖά τε καὶ πάσῃσιν ἐπ' ἀγραύλοισι βόεσσιν
Ἑρμῆω βουλῇσι κλειψίφρονος·

411 αὐτόθεν, ἀμβολάδην Herm.

S. 547–548 (st. 69)

—he spoke, and bound
Stiff withy bands the infant's wrists around.

S. 549–552 (st. 70)

He might as well have bound the oxen wild;
The withy bands, though starkly interknit,
Fell at the feet of the immortal Child,
Loosened by some device of his quick wit.

Gk. 409–410 「アポロンはこのように（原文 ll. 405–408 で言ったこと）言ってこりやなぎの枝で作った強力なワナを両手で振りまわした。」を S. 547–548 では「アポロンはこう言っで縛りつけた、| 強いやなぎの帯で赤児の手首ぐるぐる巻きに。」と訳し、続く Gk. 410–413 「ところがそのこりやなぎが足許のその同じ場所から地面一面に突然生え、ところかまわず生えのびて互いにかみ合い、人をたぶらかすヘルメースの意のままに、易々と野に住む牛たちすべての上に拡がった。」という描写をシェリは S. 552 「その児の賢い速業で解け。」という 1 行で片づけ、この S. 547–548 と S. 552 の間の S. 549–551 は必ずしも原文通りではないが、そもそも原文 l. 409 と l. 410 の間にテキストの欠落があり、特にアポロンがワナで何を縛ろうとしたかが明らかでなく岩波文庫の逸身・片山訳では「牛」と解釈^{*20}しているが、シェリはこれを「ヘルメース」と解釈（S. 548）し、S. 549–551 (st. 70) 「あばれ牡牛をしばるがましか、| やなぎの帯は、しっかり縄われてはいても | 不滅の赤児の足下に落つ」として辻褄をあわせて S. 552 につなげている。原文のように「ワナになるはずのこりやなぎがヘルメースを縛らずに、あたり一面に繁殖してアポロンを唾然とさせる」という話が伝わっていたものを原作者は入れたのであろうが、シェリはヘルメースの

*20 逸身喜一郎・片山英男訳『四つのギリシャ神話——「ホメーロス讃歌」より』岩波文庫 [1985], 1998, p. 138, pp. 214–215 n.

もっと知的な面や音楽的才能を重視し、全体のリズムも考えてこの挿話の逐語的詳述は避けたのであろう。

3 大袈裟な表現——滑稽味につながる

Gk. 309–311

οὐ γὰρ ἐγὼ γε
 ὑμετέρας ἔκλεψα βόας, οὐδ' ἄλλον ὄπωπα,
 αἱ τινές εἰσι βόες· τὸ δὲ δὴ κλέος οἶον ἀκούω.

S. 408–412 (st. 52)

‘—I

Stole not your cows—I do not ever know
 What things cows are—Alas, I well may sigh
 That since I came into this world of woe
 I should have ever heard the name of one—’

S. 410–412 ‘Alas ... the name of one’ に対応する原文は、Gk. 311 後半「噂だけは聞いていますがね。」のみ、逆に Gk. 310 後半「他人が盗むのも見たこともない」はシェリ訳にはないがそれに続く Gk. 311 前半「一体全体牛ってどんなものかも知らない」といえば他人が盗んでいても分からないということになるのでそういう無駄な逐語訳はしない、あるいは敢えて訳す必要もないとシェリは考えたかも知れない。それよりも赤児に牛泥棒の嫌疑がかけられるとはとんでもないという驚きと嘆きを強調するために人生の悲運を散々経験した者が使う表現「悲嘆のこの世」(this world of woe) を用いて雄弁に語る様は読む者の笑いさえ誘い滑稽な雰囲気を作り読者を引き込むことになる。すべて一音節語を用い幼児語も連想させ赤児の非凡な知力と滑稽さが強く印象づけられる。

4 「二人で牧場へ」はシェリの解釈か

Gk. 491–495

ἡμεῖς δ' αὐτ' ὄρεός τε καὶ ἵπποβότου πεδίοιο
 βουσί νομοὺς ἑκάεργε νομεύσομεν ἀγραύλοισιν.
 ἔνθεν ἅλις τέξουσι βόες ταύροισι μιγείσαι
 μίγδην θηλείας τε καὶ ἄρσενας· οὐδέ τί σε χρὴ
 κερδαλέον περ ἔοντα περιζαμενῶς κεχολῶσθαι.

492 νόμους ἐκάεργε Herm.

S. 661–667 (st. 84)

‘And let us two henceforth together feed

On this green mountain slope and pastoral plain
 The herds in litigation—they will breed
 Quickly enough to recompense our pain,
 If to the bulls and cows *we* take good heed—
 And thou, though somewhat over fond of gain,
Grudge me not half the profit.

まずこの引用の前半、牧場へ行くのは誰かということを考えたい。主語は「私たち」で動詞は「牧人生活をする」の未来形、Ⅰ人称複数であるから「私たち（即ちヘルメースとアポロン）は山や馬が草喰む野でその牛たちを育て牧人生活を致しましょう。」という意でシェリは S. 661-663 で「われら二人はこれから共に | この緑の斜面と草原で、訴訟の牛群を飼いましょう。」と訳している。ロエブ版 'while I for my part will graze down...' 岩波文庫の逸身・片山訳「わたくしのほうは……」両訳とも牧場へ行くのはヘルメースになっている。この引用の直後にヘルメースは琴をアポロンに渡し、それをアポロンは喜んで受け取り牧場の仕事をヘルメースに委ねる。更に引用前半に続く Gk. 493-4 では「すると牝牛たちが牡牛たちと交わって仔牛を牝も牡もいっぱい産むでしょう。」とあるのでこれに続く Gk. 494-495 は「でもあなたがいくら儲けに目がないお方でも、ひどくご立腹になってはいけません。」つまり琴と引き換えに牧場の仕事をヘルメースにまかせて損をしたと立腹してはいけないという。これでロエブ版イヴリン・ホワイト訳や逸身・片山訳は後半「牧場の儲けをヘルメースが独り占めする」と想定して、その場合「損をしたとひどく立腹してはなりません。」と解釈されたのであろう。これに対してシェリは兎に角前半 Gk. 491-492 は「われわれ」が主語になっているからにはヘルメースとアポロン二人が牧場へ行くのは原文通り、アポロンはヘルメースの仕事振りを見守るにしる、牛の所有者としてであれ牧場の仕事に関わると考えたのであろう。然る後 S. 663-667 「彼らはすぐに、| 仔を産み痛手埋めるでしよ、| 二人で面倒よくみれば——| あなたは儲けがお好きでも、| けちらず利益は折半で。」と解釈したとしても全く不自然ではない。音楽ですっかりアポロンを魅了してアポロンはヘルメースに牧場を支配する権限を与えて二人はすっかり仲直りした時、「これから二人仲良く牧場の仕事をし利益も半分ずつでいいですよ、それでも琴の方はあなたがそんなに気に入っていらっしゃるのですから惜しみなく進呈しますよ。」と琴を渡すヘルメースは一層魅力的で気品さえ感じられるのではないだろうか。

IV シェリの表現と詩型の活用

前章で見たシェリの表現とも関わるが内容に応じて八行連句をいかにうまく活用したか、二つの全く異なる使い方をⅠ例ずつ見てみよう。

I 知性と意志 (Wisdom and Will) の表現

S. 212-229, sts. 27-29 (Gk. 162-169, 170-175)

母女神への反論：

—‘Dear mother,’

Replied sly Hermes, ‘wherefore scold and bother?’

28

‘As if I were like other babes as old

And understood nothing of what is what

215

And cared at all to hear my mother scold.

I in my subtle brain a scheme have got

Which whilst the sacred stars round Heaven are rolled

Will profit you and me—nor shall our lot

Be as you counsel, *without gifts or food*

220

To spend our lives *in this obscure abode*.

29

‘But we will leave this shadow-peopled cave

And live among the Gods, and pass each day

In high communion, sharing what they have

Of profuse wealth and unexhausted prey,

225

And from the portion which my father gave

To Phoebus, I will snatch my share away,

Which if my father wills not—*nathelesse I*,Who am the king of robbers, *can but try*.’

ここでも S. 218 に当る原文はないが「永遠に」という意を強調し、これを含む S. 217-219 は「私はこの妙なる脳に企みがあり、| 聖なる星が『天』を巡る限りには、| 母上とわたしの益^{ため}になりましょう」と原文よりなめらかにつながり直前の 5 行 (S. 212-216) の「他の赤児と同様に思うな」という内容との対比もあざやかで ‘sly’ (S. 213) や ‘subtle’ (S. 217) の二語が効いてしたたかな赤児ぶりが印象づけられる。実に *ottava rima* の ab ab ab cc という 8 行を締め括る cc の韻律をうまく生かして、28 連の最後の 2 行 (S. 220-221) では、演説の中締め故か、不完全脚韻ながら、自分達の今の劣悪な条件二つ ‘without gifts or food’ と ‘in this obscure *abode*’ を強調、29 連では、神々の仲間入りという地位獲得のためには、自分の本来の職務を発揮しますよ (*nathelesse I*, | Who am the king of robbers, can but *try*.) と、とどめをさしてこの連を終わっている。

この演説の中締めと、とどめをさす結びの部分はそれぞれ原文の強い口調をよく伝えて

いる。即ち中締めは Gk. 167-169 「不死の神々の中で | 我々二人だけが捧げものも祈祷も
受けずに | 他でもないこの場にとどまることはできないのです。母上がおっしゃる通りに
は。」で、結びは Gk. 174-175 「そこでもし父上がそれを与えないなら、それこそ僕は | 泥
棒の長になって見せますよ。」である。

2 音楽と愛の力 (Music and Love)

S. 581-599, sts. 74-76 (Gk. 435-440, 441-446, 447-449)
ヘルメースの音楽を聴いた、アポロンの感動：

74

These words were wingèd with his swift delight—
‘You heifer-killing schemer, well do you
Deserve that fifty oxen should requite
Such minstrelsies as I have heard even now.—
Comrade of feasts—little contriving Wight, 585
One of your secrets I would gladly know,
Whether the glorious power you now show *forth*
Was folded up within you at your *birth*,

75

‘Or whether mortal taught or God inspired
Thy power of unpremeditated song— 590
Many divinest sounds have I admired,
The Olympian Gods and mortal men among,
But such a strain of wondrous, strange, untired
And soul-awakening music sweet and strong
Yet did I never hear except from *thee*, 595
Offspring of May, impostor *Mercury*!

76

‘What Muse, what skill, what unimagined use,
What exercise of subtlest art has given
Thy songs such power?’

同じ八行連句でもこの部分は「母女神への反論」の場合と趣を異にする。即ち 74 連の前半は「これだけすばらしい音楽を聴かせてもらったら 50 頭の牛泥棒の罪は帳消にするに十分だ」と取引をまず片づけて、いやむしろ牛泥棒への怒りを愛が消し去り形勢逆転、連の途中で大きな段落。その感動を、これから後 74 連後半から 75 連終わりまでで、息もつかずに一息で歌い上げている。

内容的には音楽の専門家である筈のアポロンがヘルメースの才能に脱帽して 74 連の後半で「その不思議な音楽の秘訣を一つでも知りたいが天性のものか」と言いすぐに 75 連に続きしかもこの連では「人の教えか神の誰かの靈感か | 巧みなく自然に歌うその力—— | 数多の妙なる楽に敬服したが、| オリュムポスの神々や死すべき人との交わりで。 | だがこんな驚嘆すべき、不思議な、飽きない、| それに甘美で強力で、魂揺さぶる楽曲は | お前以外にためしなし、| マイアの息子、詐欺師ヘルメースよ。」とこの連の終りまで即ち 74 連後半から 75 連の終りまで 12 行を一息で歌う。したがって 74 連の最後の 2 行は脚韻も *forth, birth* で完全な cc ではなくこの連は完結していないことを音楽的にも感じさせ、75 連後半の 4 行は音楽のすばらしさを表現するのに *soul-awakening* というこの詩の中では珍しく長い形容詞で表現に窮した様を示しつつ 6 つの形容詞を用い 7 つの s 音で音楽の透明性を表現しつつ一気に歌いあげこの連の最後の 2 行で息詰るような 12 行の結びとなる。したがってこの 75 連の最後の 2 行はしつかり cc の韻 (*thee* と *Mercury*) を踏み、非常に強く、重い。そして 76 連初めの 3 行では短く区切った質問を矢継ぎ早に息も絶え絶えに連発して「どんな詩神が、どんな手腕が、至高の秘術の | どんな訓練、想像できぬ方法が | お前の歌にかかる力与えしや。」と知りたくて気が狂いそうなアポロンの様子が目に浮かぶ。

ここに引用した 2 連余のシェリ訳は全篇を通して最も原文に近いものではないだろうか。それはアポロンの感動が原作者に乗り移り、それが読み手であり再現者であるシェリに伝わり自然に訳となったように感じられる。更にこの感動の源はヘルメースの音楽の力によってかきたてられたアポロンの胸の中の「愛」(音楽とヘルメースに対する愛)で、これこそこの讃歌の最大の魅力でありシェリも最も魅せられたところではないか。これはまさにこの条りの直前 Gk. 434 (τὸν δ' ἔπος ἐν στήθεσσιν ἀμήχανος αἶνυτο θυμὸν) 「するとアポロンの胸の中でおさえがたい愛が心をとらえた」(S. 579–580 では ‘—and [he] did move | Apollo to unutterable love.’) の 1 行で表現されている事実をアポロン自身の「翼ある言葉で」(Gk. 435, S. 581) 表現したものであるからである。

V まとめ

シェリは『詩の弁護』(*A Defence of Poetry*, 1821) で翻訳の無意味 (the vanity of translation) を主張し*21、同じころ、ある婦人への手紙でも翻訳は原作を破壊するものでさえあると言っている*22。それにもかかわらず彼が翻訳したのはかなりの事情があったはずであ

*21 *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, ed. Roger Ingpen and Walter E. Peck, vol. vii Prose, p. 114.

*22 *Letters*, ii, pp. 277–8.

る。1818年から翌19年にかけて二人の愛児、クレアラとウィリアムを失い*23、これと相前後して非常に身近で大切な人物を二人も失い*24、シェリは極度に意気消沈していた。この頃書いたとされる詩行を見ると彼が完全に生きる望みを失い死への憧れさえ感じられる。即ち*25

Alas, I have nor hope nor health,
Nor peace within nor calm around,

や更に「しおれたすみれに」(‘To a Faded Violet’)*26には生きている自分自身をあざ笑う罪悪意識さえ感じられる。愛児に先立たれ妻メアリとも気まづくなり精神的に孤立し創作意欲さえ失ったシェリの心の逃げ場はギリシア文学であり、しかも、日常的に彼の興味はホメロスの長詩やギリシア悲劇にあったが、この時のように心が落ち込み兎に角慰めやインスピレーションを求める時はパストラルや『ホメーロス讃歌』が相応しかった。第一章で見たように、1818年1月にははじめた『ホメーロス讃歌』の翻訳が中断されて残っていた中に『アフロディーテ讃歌』(ヘルマン版番号 III) 57行以後と『ヘルメース讃歌』(同 II)があった。インスピレーションを求め勇気を奮い立たせてくれるものとして『ヘルメース讃歌』は打って付けでこれを選んだと考えられ、更にシェリにとって原詩から吸い取った精神を反芻し再現すること即ち翻訳が自らの創造力を育てるに必要な練習過程のようなものであった。このためにも『ヘルメース讃歌』は長さや内容から適しており、ギリシア悲劇やホメロスの長詩は原作を壊したくない気持ちも強かったようだ。こうして選んだこの『讃歌』の主人公ヘルメースの所々自在、多芸多才です速い行動力はシェリを魅了し自分自身がヘルメースになったつもりでキュレネーからピエリアの山へ、ピエリアからオンケストスへと飛びまわる気分になったにちがいない。それはそのままリズムカルな生き生きした表現になった。アーノルド(Matthew Arnold)はホメロスを訳すには特に原作のスピード感、単純率直さ高貴さを大切に原作者の精神を正しく掴みその上適切な詩型を選ばなければいけないといっている*27。アーノルドは『イーリアス』の英訳を例に話をすすめているが原作者の精神(divine essence)を訳者が把握あるいはそれと一体化し

*23 Clara Shelley, 1818年9月24日1歳でヴェネツィアで、William Shelley, 1819年6月7日3歳半でローマで死亡。

*24 この二人の人物については複雑な出来事と事情がからまっており、Thomas Medwin, *The Life of Percy Bysshe Shelley*, vol. 1, London, Thomas Cautley, 1847, pp. 324-9 及び James Bieri, *Percy Bysshe Shelley: A Biography*, the Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore, pp. 431-448 に詳述されている。

*25 ‘Stanzas written in dejection—December 1818, near Naples’, ll. 19-20.

*26 Medwin, vol. 1, p. 333.

*27 Matthew Arnold, *On Translating Homer* [1861] in *On the Classical Tradition*, ed. R. H. Super, Ann Arbor, the University of Michigan Press, 1960, pp. 102, 142.

それを表現する適切な詩型を選びこれをいかに生かすかが優れた韻文訳の条件になることは『讃歌』の場合にもあてはまることである。すでに見たとおり、インスピレーションを求めて翻訳対象の原作を選んだわけであるから原作の精神とは極自然に一体となることが出来たであろうし、ノートブックに記されたメモで見たように、詩型選択にもあれだけ苦心した。八行連句だけでも英内外の作品を音読し、とりわけイタリアの詩人フォルテグエルリ (Niccolò Forteguerri) の風刺詩『リッチャルデット』(Ricciardetto, 1738) は『ヘルメース』翻訳直前 2 週間以上 (1820 年 6 月 26 日～7 月 11 日) 殆ど毎日音読し*28 八行連句の本場イタリアの音やリズムにも耳を馴らしこの詩型には自信をもっていたにちがいない。その上で逐語訳を排し音読して読むに値する音楽的な訳にしようと心掛けた。原詩 6 行を 8 行の英訳に、を目安に時には思い切った強調や省略もある、ということはすでに見てきた通りである。テキストの不備も余り気にせずというのは冒頭のラングの言葉にもあったが、そのラングは「優れた韻文訳の花」(the movement and the fire of a successful translation in verse) のない「散文訳は豪華な御馳走の食卓からこぼれ落ちたパン屑のようなものである」*29 と言って、散文訳の味気なさを十分承知しシェリ訳『ヘルメース讃歌』のことを念頭においていたのではないか。アーノルドも翻訳は「読む者に翻訳であると感じさせぬもの」であるべきだといっている*30。シェリ訳『ヘルメース讃歌』を読む者は翻訳であることを忘れ「シェリの詩」を読んでいる気持になる筈だ。確かにそれは原詩の代わりにはなり得ないがアーノルドが言う原作のスピード感、単純率直さそれに高貴さもあり、原作の精神に限りなく近いものが伝えられ韻律の上からも心地よく読めるものならば、シェリがめざした「読むに値する韻文訳」(a legible translation) は達成されたのではないだろうか*31。

(立命館大学)

参考文献

I ギリシア語関係

Allen, Thomas W. ed. *Homeri Opera* 5 vols., vol. v, Oxford Clarendon Press, 1912.

*28 *Mary Shelley's Journal*, p. 135.

*29 *The Odyssey of Homer Done into English Prose* by S. H. Butcher and A. Lang, the Clarendon Press, 1879, revised and repr. Macmillan and Co., 1893, p. viii.

*30 Arnold, p. 97.

*31 査読者の方々からは誤りや疑問点の貴重なご指摘を頂き、感謝し修正させて頂いた。

- Arnold, Matthew, *On the Classical Tradition* ed. R. H. Super, Ann Arbor, the University of Michigan Press, 1960.
- Butcher, S. H., and Lang, Andrew, *The Odyssey of Homer Done into English Prose*, the Clarendon Press, 1879, revised and repr. Macmillan and Co., 1893.
- Evelyn-White, Hugh G. ed. *Hesiod Homeric Hymns Epic Cycle Homerica*, Harvard Univ. Press, [1914], repr. 1998, Loeb C. L.
- Hermann, G. ed. *Homeri Hymni et Epigrammata*, Leipzig, 1806.
- Lang, Andrew, *The Homeric Hymns, A New Prose Translation and Essays Literary and Mythological*, George Allen, 1899.
- Nicoll, Allardyce ed. *Chapman's Homer, The Iliad, The Odyssey and The Lesser Homerica* 2 vols., vol. 2, Princeton University Press, 1967.
- Southey, Robert ed. *The Works of William Cowper, Esq.* vols. XI–XII, *The Iliad of Homer trans. into English Blank Verse* by W. Cowper repr. from 1837 ed., AMS ed. 1971.

逸身喜一郎・片山英男訳『四つのギリシャ神話——「ホメーロス讃歌」より』岩波文庫 [1985], 1998。

2 シェリ関係

手稿

- Bodleian MS. Shelley adds. e.9, pp. 117 and 118.
- Percy Bysshe Shelley* vol. xiv, Shelley's "Devils" Notebook, Bodleian MS. Shelley adds. e.9, A Facsimile Ed., ed. P. M. S. Dawson and Timothy Webb, Garland Pub. Inc., 1993, pp. 124–127 etc.
- Percy Bysshe Shelley* vol. xviii, *The Homeric Hymns and Prometheus* Drafts Notebook: Bodleian MS. Shelley adds. e.12 (A Facsimile Ed.), ed. Nancy Moore Joslee, Garland Pub. Inc. 1996, pp. 275–244 (writ. in reverse).

テキスト (含書簡・日記)

- The Complete Works of Percy Bysshe Shelley* Newly ed. Roger Ingpen and Walter E. Peck in 10 vols., vol. 7 Prose, Gordian Press & Earnest Benn, 1965.
- The Letters of Percy Bysshe Shelley* vol. i *Shelley in England* ed. F. L. Jones, Oxford at the Clarendon Press, 1964.
- The Letters of Percy Bysshe Shelley* vol. ii *Shelley in Italy* ed. F. L. Jones, Oxford at the Clarendon Press, 1964.
- Mary Shelley's Journal* ed. F. L. Jones, University of Oklahoma Press, 1947.
- The Poems of Shelley* vol. ii, 1817–1819 ed. Kelvin Everest and Geoffrey Matthews etc., Longman, 2000.
- The Poems of Shelley* vol. iii, 1819–1820 ed. Jack Donovan etc. Longman, 2011.
- The Poems of Shelley* vol. iv, 1820–1821 ed. Michael Rossington etc. (Longman Annotated English Poets) Routledge, 2014.

批評

Bieri, James, *Percy Bysshe Shelley: A Biography*, the Johns Hopkins University Press, Baltimore, 2008.

Medwin, Thomas, *The Life of Percy Bysshe Shelley* in two volumes, vol. i, Thomas Cautley Newby, 1847.

Thompson, Francis, *Shelley* with an Introduction by George Wyndham, Burns and Oates, 1911.

Webb, Timothy, *The Violet in the Crucible: Shelley and Translation*, Oxford Clarendon Press, 1976.

ギリシア語の現在分詞・アオリスト分詞の 男性単数主格形

松浦高志

I はじめに

ギリシア語の能動態現在分詞・アオリスト分詞には *-οντ-* / *-ντ-* 語幹が用いられる*1。男性単数主格形には *φέρων* (: *φέρω*) 「運びつつ」、*ίών* (: *εἶμι*) 「行きつつ」のように *-ων* に終わるものと、*τιθείς* (: *τίθημι*) 「置きつつ」、*διδούς* (: *δίδωμι*) 「与えつつ」、*ιστάς* (: *ἵστημι*) 「立てつつ」、*δεικνύς* (: *δείκνυμι*) 「示しつつ」などのように「長母音+*-s*」に終わるものの2種類がある。どちらも規則的な変化形とは考えられないから、類推によるものと考えられるが、どのような類推がどのような順序で起こったかについては意見の一致を見ていないように思われる。

まず、*-ων* に終わるのは *-ον-* 語幹、たとえば *εὐδαίμων*, *εὐδαίμονος* (gen.) 「幸せな」のような単語からの類推と考えられる。*-ον-* 語幹の単数主格形、たとえば *τέκτων* 「建築家」の語末の *-ν* は、対応する古インド・アーリア語（いわゆるヴェーダ語とサンスクリット語）の *tákṣā* からわかるように、印欧祖語のある段階では失われていたと考えられる。この *-ν* はギリシア語の段階で復元されたと考えられるから、この類推はギリシア語の段階で起こったと考えられる。これはおそらくギリシア語の語末子音の消失（この場合では **-ont* > **-on*）が起こった後である。したがって印欧祖語ではもともと男性単数主格形は **-s* を用いない **-ont* であったと考えられる*2。この類推が起こった原因が、男性単数主格形と中性単数主格形がどちらも **-ον* に終わってしまうのを避けるためであることは明らかである。

一方 *-ων* が **-ont-s* に由来すると考えられる場合もある。しかし **-ont-s* (> **-ovs*) ならばギリシア語では第2代償延長が起こって **-ovs* となるはずであるからそうとは考えられ

* 脚注でそれぞれの箇所を示すことはしなかったが、特に全体的な論旨と内容について2名の査読者から数々の有益な指摘をいただいたことに感謝し上げたい。もちろんそれでもなお誤りや不備が残っていれば、すべて私の責任である。

*1 以下では中動態・受動態分詞や能動態完了分詞については論じないので、単に「分詞」と言った場合、すべて能動態現在分詞・アオリスト分詞を表すこととする。

*2 Beekes, *Nominal*, 72.

ない。あるいは、いわゆる Szemerényi の法則により、印欧祖語の段階ですでに $^{**}\text{-ont-s} > ^*\text{-ön}$ となっていたと考えられる場合がある。しかし古インド・アーリア語では同じ形が $-\text{ān}$ に終わる。古インド・アーリア語で $^{**}\text{-ön} > ^*\text{-on}$ という変化が起こる一方で、ギリシア語では起こらないと考えるのは難しい。したがって印欧祖語ではもともと $^{**}\text{-ont}$ であったと考えられる*³。

2 分詞語幹の母音交替

分詞語幹はギリシア祖語の段階では $^{**}\text{-ont-} / \text{-nt-}$ だけであり、 $^{**}\text{-ent-}$ となることはなかったと考えられる。まず、 $\epsilon\acute{\iota}\mu\acute{\iota}$ 「……である」や $\epsilon\acute{\iota}\mu\acute{\iota}$ 「行く」のような非語幹母音型 (athematic) の動詞でも $^{**}\text{-ont-}$ が用いられる。また、名詞 $\acute{o}\delta\acute{\omega}\nu$ 「歯」(< $^{*}\text{h}_3\text{d-önt-}$) は古インド・アーリア語の dán やラテン語の dens に対応し、 $\acute{\epsilon}\kappa\acute{\omega}\nu$ 「自発的な」(< $^{*}\text{uk-ónt-}$) は古インド・アーリア語の usánt- に対応するが、これらは非語幹母音型の動詞の現在分詞に由来し、古形を保存していると考えられる*⁴。ギリシア語以外でも、たとえばラテン語の $\text{in-sons} (: \text{sum})$ 「潔白な」は形容詞に変化しているから古形が保存されていると言える。 prae-sens 「現存の」(< $^{*}\text{h}_1\text{s-nt-s}$) のように一見 $^{**}\text{-ent-}$ 語幹に由来すると思われるものが存在するが、ラテン語ではこの場合 $^{*}\text{ŋ} > \text{en}$ となるから、 $^{**}\text{-nt-}$ に由来すると言える。

2.1 $^{**}\text{-ent-}$ 語幹

男性単数主格形が $\tau\acute{\iota}\theta\epsilon\acute{\iota}\varsigma$ のように「長母音 + -s」に終わるものについては、分詞語幹の母音交替について検討する必要がある。まず、ギリシア語の方言には分詞語幹に $-\text{ent-}$ を用いているもの、あるいは用いているように見えるものがあるが、方言での刷新であり、ギリシア祖語 (Proto-Greek) にはさかのぼり得ないと考えられる*⁵。たとえばアルゴリス方言のうちのいくつかでは $\epsilon\acute{\iota}\mu\acute{\iota}$ 「……である」の女性単数主格形が $\acute{\epsilon}\sigma\sigma\alpha$ (= Att. $\acute{o}\nu\sigma\alpha$) となる。たとえば女性単数対格形の $\acute{\epsilon}\sigma\sigma\alpha\nu$ (IG IV.757.B.2I、トロイッゼーン出土、紀元前 146 年) がある。これは $^{*}\acute{\epsilon}\nu\tau- > \acute{\epsilon}\nu\tau-$ のように母音消失 (hyphaeresis) が起こっているためと考えられる*⁶。また、同じドーリス方言でも、たとえばキューレーネー方言においては同様の形は存在しないので、以上はいくつかの方言での刷新であると考えられる。カッリマコ

³ Sihler, 615–616 は $^{}\text{-ön}$ が印欧祖語の形とするが、そうではないと考えられる。

*⁴ Beekes, *Etymological*, s.vv.

*⁵ Rix, 234, Meier-Brügger, *Griechische*, ii.63 では非語幹母音型で用いられる $-\text{ent-}$ が古い可能性が示唆されているが、Meier-Brügger, *Indogermanische*⁹, 318–319 にあるように、新しい形とするべきである。

*⁶ Nieto Izquierdo, 517–521; López Eire, 215. 母音消失については Lejeune, 251–253 を見よ。

スにある ἔσαν (*Lav. Pall.* 69) は彼の母方言ではなく、この作品の舞台であるアルゴスの方言を反映したものと考えらるべきである*7。したがって *-ent- という分詞語幹はギリシア祖語にはさかのぼり得ない。またテッサリア方言の ἐντεσσι (: εἰμί, *SEG* 36.548) も新しい*8。

2.2 弱語幹

ギリシア語では非語幹母音型で -οντ- / -ντ- の交替が見られるが、弱語幹の -ντ- が用いられる例は限られている。すなわち非語幹母音型で語根が子音で終わる動詞の女性形のみで用いられている。たとえばミュケーナイ・ギリシア語には (a-p)e-a-sa (: εἰμί, < *h₁s-ŋt-ih₂, = Ion. ἀπ-εοῦσαι) が*9、キューレーネ方言には κατ-ιασσα (< εἰμι, *SEG* 9.72.101), ἐκασσα (*SEG* 9.72.87. ただし -οντ- に由来する ἐκοισα [*SEG* 9.72.89] もある)、ῆσαν (εἰμίの女性複数属格形, *SEG* 9.11.17) が*10、クレータ方言には ἰαττα, ἰαθθα が*11、アルカディア方言には ἐασας (女性複数対格形) がある*12。また辞典にも γεκαθά· ἐκούσα (Hsch.) があり、これはクレータ方言の γεκαθθα (= Att. ἐκούσα) を表していると考えられる*13。

3 長母音語根の動詞

ギリシア語では、いわゆる長母音語根の動詞では分詞語幹に *-ont- が用いられていない。たとえば τιθείς < *τιθεις, διδούς < *διδους, ἰστάς < *ἰστανς である。その説明には次のようなものがあつた。まず、これらの動詞では分詞語幹に零階梯の *-nt- を用い、Osthoff の法則により長母音が短くなるというものである。たとえばアオリストの *d^hē-nt- > θέντ- 「置きつつ」のような場合である。しかし Osthoff の法則が作用するのは一般に語末の *-VRC という音素の組み合わせの場合であるから、単数主格形での語幹の形が類推によりほかの格形に広がったということになる。類推の起こりやすさで言えば逆の方が起こりやすいから、この説明には無理があると言える。次に、Hoffmann が言うように分詞語幹にもともと *-ent- が存在し、これらの動詞では *-ont- ではなくて *-ent- の方が用いられたと

*7 Dobias-Lalou, 135 n. 34.

*8 Morpurgo Davies, 163–165 はドーリス方言では δίδοντι: διδόντες = ἐντί: x より x = ἔντες、あるいはテッサリア方言では φιλέντι: φιλέντες = *ἐντί: x より x = ἔντες という類推から説明しているが、あるいは López Eire, 214 の説明するように、母音消失によるものかもしれない。

*9 Bartoněk, 339; Aura Jorro, s.v. a-pe-e-si.

*10 Dobias-Lalou, 135–136.

*11 Bile, 243.

*12 Dubois, i.74, iii.26 n. 466.

*13 Risch, „Verbalparadigmas“, 324, Beekes, *Etymological*, s.v. ἐκών.

いうものである*¹⁴。たとえば *d^hh₁-ént- > θέντ-, *sth₂-ént- > στάντ- 「立ちつつ」、*dh₃-ént- > δόντ- 「与えつつ」である*¹⁵。しかし第2節で見たように *-ent- 語幹の痕跡は認められないし、またいわゆる長母音語根の動詞にしか用いられないので、むしろ類推によるものと考えた方がよいと考えられる。たとえばもともと *d^hh₁-ónt- > *θόντ- であったのが τίθη-μι / τίθε-μεν などからの類推により θέντ- になったと考えた方がよいと考えられる*¹⁶。しかしそれでも不十分である。男性単数主格形は *θέντ-s > θείς となるが、これは一般に語幹に -εντ- を用いる形容詞、たとえば χαρί-εις, χαρί-εντ-os (gen.) 「魅力的な」のような単語からの類推と説明される。しかしたとえば δίδωμι 「与える」の現在分詞の語幹は -οντ- を含むから、これは *-ων になる方が自然であると考えられる。

この問題は古インド・アーリア語の現在時称の第3類（重複類）と比較することで解決されることが考えられる。たとえば τιθεντ- 「置きつつ」は古インド・アーリア語の dádhāt- < *d^hed^hh₁-ŋt- に、ίσταντ- 「立てつつ」は tísthat- < *stisth₂-ŋt- に、διδοντ- 「与えつつ」は dádat- < *dedh₃-ŋt- に対応し、古インド・アーリア語では現在分詞の語幹として零階梯の *-nt- をすべての性・数・格で一貫して用いる。これらにおいて、ギリシア語と古インド・アーリア語の形は対応しない。古インド・アーリア語でこれらの語幹が常に *-nt- であるのは一般に刷新であると考えられている*¹⁷。しかし古インド・アーリア語が本来の形を保存していると考えた方がよいと考えられる。まず、Rix, 234 (§256.b) はシーグマ型アオリストについて、*d^hég^{wh}-s-ŋt-s > Ved. dhákṣat (N. sg. m.) 「焼きつつ」、*d^hég^{wh}-s-ŋt-os > dhákṣatas (G. sg. m.) の例から、アクセントが常に語根に置かれ、分詞語幹に一貫して *-nt- が用いられる形を想定している*¹⁸。第3類（重複類）では、常に重複音節にアクセントが置かれると考えられるから*¹⁹、シーグマ型アオリストと同様に分詞語幹は常に *-nt- であると考えられる。さらに、男性単数主格では *-s が容易に付され得ると考えられる。これについてはラテン語の例が特徴的である。ラテン語では現在分詞の中性単数主格形が -ns (< *-nt-s) で終わり、男性形と同じであるが、これはラテン語の曲用体系の中では例外的である。これは *-s が付される前から男性形も中性形も同じ *-nt で終わっていたと考えれば説明できると考えられる*²⁰。古インド・アーリア語の現在時称の第3類（重複類）ではラ

*¹⁴ Hoffmann, 4 n. 3.

*¹⁵ 以上については Bammesberger, 286 が簡潔にまとめている。

*¹⁶ Bammesberger, 289–291.

*¹⁷ Sihler, 616; Bammesberger, 287 n. 3.

*¹⁸ ὁμοοατα (< *-s-ŋt-ŋ) 「誓いを立てた彼を」(ICret. IV.72.IX.38–39) は、もし ὁμοοα(ν)τα の誤記でなければ古い形を保持していると言える。

*¹⁹ Macdonell, 190–191.

*²⁰ Beekes, *Nominal*, 66; Beekes, *Introduction*², 197.

テン語と同様に一貫して *-nt- を用いるから、*-s が付されていたと考えることができる。

したがって $\tau\acute{\iota}\theta\eta\mu\iota$ (< * $d^h e h_1-$) について考えると、印欧祖語では男性単数主格形が * $d^h e d^h h_1-\text{nt-s}$ であり、ギリシア祖語では * $t^h i t^h a t s$ であった可能性がある。この形は不規則なのでまず $\tau\acute{\iota}-\theta\eta-\mu\iota$ / $\tau\acute{\iota}-\theta\epsilon-\mu\epsilon\nu$ のような母音交替の型より、*a が *e に置き換えられ、分詞語幹であることを示すために *n が挿入されて * $t^h i t^h e n t s$ > $\tau\iota\theta\epsilon\acute{\iota}s$ のようになったと考えられる*²¹。アクセントは $\acute{\omega}\nu$ などからの類推であろう。

4 結論

したがって以上をまとめると次のようになる。印欧祖語では、現在分詞とアオリスト分詞では語幹に *-ont- / -nt- が用いられていた。また、非語幹母音型の動詞のうち、いわゆる長母音語根をもち現在で重複を行う動詞では、現在分詞の語幹には一貫して *-nt- が用いられ、男性単数主格形では *-s が付されていた。この後ギリシア語では、語幹母音型などでは男性単数主格形が -ov- 幹からの類推で *-ων となった。ギリシア語では、いわゆる長母音語根をもち現在で重複を行う動詞では $\tau\iota\theta\eta-$ / $\tau\iota\theta\epsilon-$ のような、異なる長さの同じ音による母音交替の型ができていたが、現在分詞ではたとえば * $\tau\acute{\iota}\theta a t s$ というわかりにくい形になってしまっていた。このわかりにくさは類推により語幹の *a を e で置き換え、さらに ν も復元して $\tau\iota\theta\acute{\epsilon}\nu t-$ とすることにより解消された。男性単数主格形はしたがって * $\tau\iota\theta\acute{\epsilon}\nu t s$ > $\tau\iota\theta\epsilon\acute{\iota}s$ となった*²²。

(東京大学)

参考文献

- Aura Jorro, F. (red.), *Diccionario Micénico* (Madrid, 1985–93).
 Bammesberger, A., „Das -nt-Partizip bei athematischen Verbalstämmen im Griechischen“, *ZVS* 95 (1981), 286–292.
 Bartoněk, A., *Handbuch des mykenischen Griechisch* (Heidelberg, 2003).
 Beekes, R. S. P., *The Origins of the Indo-European Nominal Inflection* (Innsbruck, 1985).
 — *Etymological Dictionary of Greek* (Leiden, 2010).
 — *Comparative Indo-European Linguistics: An Introduction*², rev. M. de Vaan (Amsterdam, 2011).

*²¹ 今まで調べてきたように、 $\tau\iota\theta\epsilon\acute{\iota}s$ のような分詞では、このような類推による変化を考えなければ説明が不可能である。たとえば Sihler, 617 を参照のこと。

*²² これは重複を行わないものも含めた長母音語根をもつ動詞全般に広がり、 $-\nu\mu\iota$ 動詞や第 I アオリスト分詞にも広がったと考えられる。

- Bile, M., *Le dialecte crétois ancien* (Paris, 1988).
- Dobias-Lalou, C., *Le dialecte des inscriptions grecques de Cyrène* (Paris, 2000).
- Dubois, L., *Recherches sur le dialecte arcadien* (Louvain-la-Neuve, 1988).
- Hoffmann, K., „Vedisch *vidh*, *vindh*“, *Sprache* 15 (1969), 1–7.
- Lejeune, M., *Phonétique historique du mycénien et du grec ancien* (Paris, 1972).
- Liddell, H. G., Scott, R., and Jones, H. S. (eds), *A Greek-English Lexicon*⁹ (Oxford, 1940).
- López Eire, A., « A propos de l’attique *ὦν*, *οὔσα*, *ὄν* », *Glotta* 64 (1986), 213–216.
- Macdonell, A. A., *Vedic Grammar* (Strassburg, 1910).
- Meier-Brügger, M., *Griechische Sprachwissenschaft* (Berlin, 1992).
- *Indogermanische Sprachwissenschaft*⁹ (Berlin, 2010).
- Monier-Williams, M. (ed.), *A Sanskrit-English Dictionary*² (Oxford, 1899).
- Morpurgo Davies, A., ‘Thessalian *εἴντεσσι* and the Participle of the Verb “to be”’, in *Étrennes de septantaine. Travaux de linguistique et de grammaire comparée offerts à Michel Lejeune par un groupe de ses élèves* (Paris, 1978), 157–166.
- Nieto Izquierdo, E., *Gramática de las inscripciones de la Argólida* (Madrid, 2008).
- Risch, E., *Wortbildung der homerischen Sprache*² (Berlin, 1974).
- „Ein Problem des griechischen Verbalparadigmas: Die verschiedenen Formen der 3. Person Plural“, in J. Tischler (Hg.), *Serta Indogermanica. Festschrift für Günter Neumann zum 60. Geburtstag* (Innsbruck, 1982).
- Rix, H., *Historische Grammatik des Griechischen* (Darmstadt, 1976).
- Schwyzler, E., *Griechische Grammatik* (München, 1939).
- Sihler, A. L., *New Comparative Grammar of Greek and Latin* (Oxford, 1995).

裁判員は何を被ったのか？

——プラトン『ソクラテスの弁明』冒頭のメッセージ——

納富信留

プラトンの対話篇では冒頭の一語、あるいは一行が全体のモチーフを象徴的に示すことがあり、有効な文学・哲学技法として認められている。『ゴルギアス』『パイドン』『ポリテイア』『法律』では冒頭の一語に、『クラテュロス』『メノン』では冒頭の一行にそのような意味が込められている^{*1}。それはプラトンが「書き物」としてのソクラテス対話篇に込めた仕掛けであり、法廷演説の形態をとる『ソクラテスの弁明』（以下『弁明』と略）には、これまで認められてこなかった。冒頭部が作品全体をまとめる意味を帯びることは、全体を読み終えた後で最初に立ち戻って解釈する読者にのみ明らかとなるからである。一回きり与えられ記録さえ残らない口頭の弁論では、基本的に用いられにくい技法である^{*2}。とりわけ、多くの註釈者はプラトン『弁明』を、前 399 年の裁判でプラトン自身が見聞きしたソクラテスの言葉のある程度忠実に報告する作品と見なしており、その場合、完全な創作であるソクラテス対話篇との違いは一層大きくなる。

『弁明』については、以上の理由から、冒頭部はとりたてて検討に付されてこなかった^{*3}。本稿はその先入観を否定し、冒頭の一行が作品全体へのメッセージを含むこと、ただしそれは普通に読む限りでは理解できないこと、従って、著者プラトンはこの作品をくり返し読み解く言論として書いたことを示す。その場合『弁明』は、ソクラテスが法廷でなした弁論の報告として他の対話篇と異なる種類の著作ではなく、むしろ同じソクラテス対話篇に属することになる。

^{*1} これらの例は、M. F. Burnyeat, 'First words: a valedictory lecture', *Proceedings of the Cambridge Philological Society* 43 (1997), 1–20 が論じている。Diskin Clay, 'Plato's first words', *Yale Classical Studies* 29 (1992), 113–129 も参照。『パイドン』冒頭の *αὐτός* を Clay は authority とし、Burnyeat はイデア論との関係、さらにアリストファネス『雲』やピュタゴラス派との連想で捉える。N. Notomi, 'Socrates in the *Phaedo*', *The Platonic Art of Philosophy*, George Boys-Stones, Dimitri El Murr and Christopher Gill (eds.), Cambridge University Press, 2013, 54, 66–67 も参照。この技法を強く意識して註釈したのはプロクロスであった（『ティマイオス』『パルメニデス』註解）。

^{*2} とはいえ、『イリアス』冒頭の一語 *μῆνιν* が同様の役割を担うことは、口承文学でもこの技法が用いられる証拠となる。

^{*3} むしろ「序論」にあたる部分が当時の法廷弁論の技法にどの程度沿っているのかが、Schanz, Riddell, Burnet, Smith & Brickhouse, Stokes ら註釈者、研究者の大きな問題関心となってきた。

まず、その冒頭部と拙訳を見ておこう*4。

17 A1-2-4

Ὅτι μὲν ὑμεῖς, ὦ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, πεπόνθατε ὑπὸ τῶν ἐμῶν κατηγορίων, οὐκ οἶδα· ἐγὼ δ' οὖν καὶ αὐτὸς ὑπ' αὐτῶν ὀλίγου ἔμμαντοῦ ἐπελαθόμεν, οὕτω πιθανῶς ἔλεγον. καίτοι ἀληθές γε ὡς ἔπος εἰπεῖν οὐδὲν εἰρήκασιν.

アテナイの皆さん、皆さんが私の告発者たちによってどんな目にあわれたか、私は知りません。ですが、私のほうは、あの人たちのおかげであやうく自分自身を忘れるところでした。それほど説得力をもって、彼らは語ったのです。しかし真実は、あの人たちは、いわば何一つ語りませんでした。

μὲν ... δ' οὖν ... καίτοι と対比されるこの有名な書き出しで、冒頭の一行に注目したい。そこではまず、「私は知りません οὐκ οἶδα」というソクラテスの表白が目を引き、その含意はここではまだ明瞭ではない（本論末尾で立ち返る）。他方、従属節の動詞 *πεπόνθατε* の意味について、これまで註釈者たちはまったく議論してこなかった。ここに全篇を読み解く鍵がある。

「目にあう」と訳したその語は、従来の日本語訳では「印象、心持ち」といった訳があてられ、心の状態、主観の問題と解されてきた*5。こういった訳語は欧米の翻訳をそのまま受けるもので、*impression, effect, Eindruck* という名詞、あるいは *affect, feel* といった動詞でそのような意味が与えられている*6。

動詞 *πάσχειν* は *ποιεῖν* の受動を意味し、なにかを被る状態を表す。それは物理的な被害であることも、心理的な受動、つまり印象であることもあるが、従来は後者の意味で解されてきた。だが、この語は『弁明』で計 10 回用いられ、それぞれの箇所できわめて重要な役割を担っている。その議論の流れを追うと、冒頭の語の意味が次第に明らかになる。

[1] 現在完了が用いられる冒頭 17 A1 の後、ソクラテスはアポロン神託に促されて始めた「知と不知」をめぐる探求の従事でこの語を用いる。[2] 21 C5 ではアオリストで「そ

*4 以下の翻訳は基本的に、光文社古典新訳文庫の拙訳（2012 年）による。

*5 「感を有せし」（木村麗太郎、1903）、「印象を与えたか」（久保勉・阿部次郎、1921）、「印象を受けられた」（田中美知太郎、1963）、「心持ちになっている」（山本光雄、1973）、「心持ちになられた」（三嶋輝夫、1998）となっている。

*6 Jowett 訳では “How you have been affected”, “How you have felt” となっており、John Burnet, *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Oxford University Press, 1924, 148 は “what effect (impression) has been produced on you” と註記している。古くは、ステファノスが “animi vestri ... affecti fuerint” とやや敷衍した訳をつけ、フィチーノは “affecerint” と一語で訳していた。日本語訳はこれら伝統的な理解を受けたものであるが、英語の *impression, impressed* が「印象」という日本語より強烈な意味を持つことには注意した方がよい。

の吟味で次のような経験をしました *ἔπαθον*」と語り、[3] 22 A2 「誓って、私はこんなことを経験した *ἔπαθον* のです」とくり返す。これは探求においてソクラテス自身が受けた経験を指すが、[4] 22 C4 では、「詩人たちもまた、なにかこのような状態にある *πάθος πεπονθότες* ことが私には明らかになりました」として、判明した相手のあり方を指す。それは、「知らないのに、知っていると思っている」という無知 *ἀμαθία* にあたるが、他人によって被ったものではなく自分の思い込み *δόξα* がもたらす状態であった。

若者墮落という罪状の検討においては、ソクラテスの周りに集った若者たちが本当に害悪を被ったのかが問われる。[5] 33 D7 では過去完了で、「自分の親族が私によってなんらかの害悪を被った *ἐπεπόνθησαν* わけですから」と問いを提起し、そのような被害を申し出る本人や親族が皆無であったことを指摘する。何を被ったのか、被らなかったのかが、裁判の焦点であった。

罪は刑罰で償われる。アニュトスら告発者たちは、ソクラテスを死刑にすることで大きな損害を加えたと思うだろうが、それは [6] 35 A6 「死刑にでもなったらさぞひどい目に遭う *πέσεισθαι* と考えているのでしょうか」という人々の思い込みに基づく。だがソクラテスは、死刑が彼自身にとって大きな害悪、つまり被害となることを否定する。死が本当に悪いものか善いものかは、だれも知らないからである。

有罪確定後にはアオリスト形で、どんな「刑罰を受ける」のか、という争点が語られる。ソクラテスは [7] 36 B5 「人生を平穩に過ごさなかったという理由で、どんな処分を受けたり *παθεῖν*、支払いをしたりすれば、私に相応しいのでしょうか」と問い、[8] 36 D1 では、「私はこういった人間なのですが、一体何を受ける *παθεῖν* のに値するのでしょうか」とたたみかける。ソクラテスはなかなか刑罰を申し出ないが、[9] 37 B5 「メレトスが私に求刑したことを受けない *πάθω* ようにと、恐れてでしょうか」と自ら疑問を發し、不合理にも見える頑さが死刑を恐れてではないことを明言する。この裁判で受けるであろう刑罰が、自分にとっては害悪を被ることではないという確信を、ソクラテスはこう語っていた。

「では、いいですか。もしあなた方がこの私を死刑にしたら——その私とは、私が今お話ししているそんな人物なのですから——私よりも、皆さんご自身を害することになるのです。と言いますのは、私に危害を加えることは、メレトスにもアニュトスにもできないからです——それは不可能なのです。善き人が悪しき人によって害を加えられるというのは、思うに、神の掟に適わないのですから。」(30 C7-D2)

さらに、死刑判決後に「裁判員たち」に向けた言葉は、こう明言する。

「しかしながら、裁判員の皆さん、あなた方は死に対して善き希望をもち、またこの一つのことを真実だと考えるべきです。すなわち、善き人には生きていても死んでしまっても、悪しきことは何一つないし、その人のことは、神々によって配慮されないことはないのだと。」
(4I C8-D2)

哲学の生き方を貫き、正義から外れることがなかったと自認するソクラテスには、重大な被害を受けるという意味での「刑罰」は存在しない*7。自分の受けた「経験 *πάθη*」(4I B4) を彼岸の英雄たちのそれと比べたいと言う時、それは「被害」ではない。

最後に [10] 42 AI で、息子の将来について一つの依頼を語る*8。もし彼らが魂の配慮を怠っているのにそれを為しているように思い込んでいたら、ソクラテスが行ったのと同様の吟味と論駁を加えて欲しい。「もしあなた方がこのこと〔そういった仕返し〕をして下されば、私自身も息子たちも、あなた方から正しい報いを受けた *πεπονθώς* ことになるでしょう」。無知の状態に留まりながら知ったつもりでいる場合、論駁と矯正は、その人にとっては善き被害なのである。

善きあり方をする人にはどんな被害も生じない。他方、悪しく不正な行為やあり方をする者は自分の魂を害しており、その責任は加害者ではなく彼自身にある。だが、悪しき状態にあった人は論駁や刑罰によって正しく善き方向へと変えられる。それが「被る *πάσχειν*」の語に込められた哲学である。

以上の箇所と合わせて冒頭の *πεπόνθατε* を読むと、弁論によって受ける印象といった主観的で軽い意味ではないことが分る。「被る、目にあう」という観点から、各人のあり方が問題となるからである。冒頭のメッセージは、次のように解される。

「アテナイの皆さん。皆さんが私の告発者からどのような被害を被られたのか、あるいは被られなかったのか、私には分かりません。善き人、正しい人に対しては、彼らも決して危害を加えることはできません。もしあなた方が彼らの告発弁論によって害されることがあるとしたら、それは、あなた方ご自身が感情なり思い込みなりで善きあり方から逸脱し、正しく判決しなかった場合のことです。他方で、正しく判断し判決を下す者は、彼らの言葉によってもなんの害悪も被りません。

この裁判は私の生死をめぐるものというより——それは大きな問題ではあ

*7 正しい人の魂は自身の害悪によって以外は壊されないという論点は、『ゴルギアス』で展開され、『ポリテイア』が最終的な論証を与える。

*8 ここでの「息子たち」が何を意味するのかについては、光文社古典新訳文庫での解説 167-8 頁を参照。

りません。私は哲学者の生を貫きますので——むしろ裁判員、つまり正義の裁き手一人ひとりの生をめぐる裁判なのです。私の弁明を聞いて判決を下される皆さん、これから裁かれ試されるのは、あなた方ご自身です。」

これは、ソクラテスによる裁判員、つまり同胞アテナイ人に向けた生への挑戦であり、正しさの判断を徳とする「裁判員 δικάστης」(I8A) という市民の義務において「正しさ」という人間のあり方を問う言葉である。さらにこれは、著者プラトンから私たち読者へ向けた挑発である。裁判員、そして読者は、他人事としてソクラテス裁判を傍観したり、無責任に決断を投げ出ししたりすることは許されない。自身の魂が正しいあり方を保つか、自身を壊して劣悪になるかの瀬戸際である。

冒頭の一文に戻ろう。もう一つの対比である μὲν ὑμεῖς ... ἐγὼ δ' οὖν は、通常は省略される人称代名詞を明示的に用いることで「私／あなた方」の対比を強調^{*9}、作品の末尾の呼びかけに呼応する（リング・コンポジション）。そこで「私は知りません οὐκ οἶδα」に込められた意味も明らかとなる。

42 AI-2-5

ἀλλὰ γὰρ ἤδη ὥρα ἀπιέναι, ἐμοὶ μὲν ἀποθανουμένῳ, ὑμῖν δὲ βιωσομένοις· ὁπότε-
ροι δὲ ἡμῶν ἔρχονται ἐπὶ ἄμεινον πρᾶγμα, ἄδηλον παντὶ πλὴν ἢ τῷ θεῷ.

ですが、もう去る時です。私は死ぬべく、あなた方は生きるべく。私たちのどちらより善き運命^{きだめ}に赴くのかは、だれにも明らかではありません。神は別にして。

これが『弁明』という作品の冒頭に込められたメッセージである^{*10}。

(東京大学)

^{*9} R. Kühner, B. Gerth, *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*, II-1, §454, H. W. Smyth, *Greek Grammar*, §1190 参照。

^{*10} 本稿の作成にあたっては、『フィロロギカ』査読者の方々から貴重なコメントをいただき、指摘された論点を反映させていただいた。お礼申し上げます。

Tibullus, 1.9.21–22

日向太郎

はじめに

ティブッルスは、第 1 巻第 9 歌（以下 1.9）において、同巻第 4 歌および第 8 歌と同様に、少年愛について歌っている。名前が拳がっていないので、「私」の呼びかける少年が誰なのか定かではないが、それはおそらく 1.4 および 1.8 同様マラトゥスだろう*1。1.4 の末尾では、この少年が冷酷な態度を取って、恋する「私」を苦しめることが言われている。1.8 では、少年自身がポロエーなる女性に対する恋に目覚め、苦しんでいることが歌われる。「私」は「恋愛の師（magister amoris）」として、したり顔で彼に忠告を加えたり、彼に冷たい態度を取る女性を戒めたりする。そして、いわゆる「マラトゥス作品群」の最後にあたるこの歌において、詩人は、少年が自分を裏切り富裕な恋敵に身を任せたことを断固たる態度で糾弾し、少年に訣別を言い渡す。

「私」はかつて富がもたらす災いについて、以下のように戒めたことを想起している（1.9.17–30）*2。

admonui quotiens “auro ne pollue formam:
saepe solent auro multa subesse mala.
divitiis captus si quis violavit amorem,
asperaque est illi difficilisque Venus. 20
ure meum potius flamma caput et pete ferro
corpus et intorto verberare terga seca.
nec tibi celandi spes sit peccare paranti:
scit deus, occultos qui vetat esse dolos.
ipse deus tacito permisit lingua ministro 25
ederet ut multo libera verba mero;
ipse deus somno domitos emittere vocem
iussit et invitos facta tegenda loqui.”
haec ego dicebam: nunc me flevisse loquentem,

*1 D. F. Bright, *Haec mihi fingebam. Tibullus in his World*, Leiden, Brill 1978, p. 249: “(...) the very omission of the name enhances the vigor of Tibullus’ indignation without obscuring his point. There can be no doubt that the boy is Marathus.”

*2 以下に引用するテキストおよび apparatus は、G. Luck, *Albius Tibullus Carmina*, Stuttgart und Leipzig, Teubner 1998 に基づく。

nunc pudet ad teneros procubuisse pedes. 30

21 potius *codd.*: si vis *Montaigne* 24 scit *Voss, Postgate*: sit
 AGVX+: est fH: vetat fH: veter AGVX+ 25 lingua *Rigler*,
Haupt: lene HV²: leve AVX+: laene G: laeva Y: lege *Della Corte*

私は何度君に忠告したことか。「黄金によって容貌を汚すことがないようにしたまえ。しばしば黄金には多くの災いが隠れているものだ(17-18)。もし誰かが富に心を奪われ、愛を汚したとするならば、ウェヌスは彼に対して冷酷で敵対的になるだろう(19-20)。むしろ我が頭を焼くがよい、刃で我が肉体を突け。背をよじれた鞭で打つがよい(21-22)。罪を犯そうとするならば、君はこれを隠せると望んではならない。神は知っており、欺きが隠れていることを拒む(23-24)。神御自身が、口数の少ない下僕に、大量の葡萄酒によって舌が自由な言葉を発するように許したのだ(25-26)。神御自身が、眠気に負かされた者らに声を出すよう、望まないのに隠すべきことを話すよう命じた(27-28)。」このようなことを、私は口にしていた。今は、話しながら涙を流したことや柔らかい足許に平伏したことを恥じている(29-30)。

21-22の「むしろ我が頭を焼くがよい、刃で我が肉体を突け。背をよじれた鞭で打つがよい」の2行は唐突な印象を禁じ得ない。文脈に即して無理のない範囲で考えれば、命令は少年に向かっていると思われる。だが、そうだとすると、何故突然少年に自分を罰することを命じているのか不可解である。この couplet の直前と直後にある少年に対する戒めや脅しにもそぐわない。

仮に、この2行を取り除いてみよう。19-24の一節は、「もし誰かが富に心を奪われ、愛を汚したとするならば、ウェヌスは彼に対して冷酷で敵対的になるだろう(19-20)。罪を犯そうとするならば、君はこれを隠せると望んではならない。神は知っており、欺きが隠れていることを拒む(23-24)」となる。つまり「私」は、19-20において、富に心を奪われて愛の掟を破る者に課される神罰を一般原則的に述べた上で、「罪を犯そう(=愛の掟を破ろう)」としながらこれを隠そうとしている「君」という特定の個人に神罰が及ぶことを警告していることになる。一般原則から個別例に向かう言説の流れは、円滑であり、無理がないものとなる。説論的な調子は維持され、その台詞は「恋愛の師」として語りかける「私」に相応しい。

写本通りに読む場合、解釈にはどうしても無理な補いが必要となる。たとえば、Dissenは以下のように説明している*3。

*3 L. Dissen, *Albii Tibulli carmina*, pars posterior, Göttingen 1835, p. 183.

Malim potius servilia supplicia pati, dicebam, quam periurum te videam. Servi, ut constat, severissimis poenis afficiebantur a dominis crudelibus vel leves ob causas, urebantur admotis facibus aut lamina candente, vulnerabantur ferro, verberabantur flagellis.

すなわち、マラトゥスから裏切られるよりも (periurum te videam)、むしろマラトゥスから奴隷のように頭を焼かれたり、体を刺されたり、鞭打ちを受ける方がましだと解することになるが、potius (むしろ) という言葉が示唆する体罰との比較対象として「マラトゥスの裏切り」を即座に想定するというのは、文脈上かなり困難であるように思われる。恋愛の掟に背いた者への罰に触れている 2 つの couplet に挟まれて、罪ある者 (マラトゥス) に罪のない自ら (「私」) への責め苦を課すよう命ずるのは、不自然である*4。しかし、大多数の注釈者はこの不合理を甘んじて受け入れてきた*5。

Smith は、モンテーニュが Tibullus, I.9.21-22 を『エッセー』第 2 巻第 12 章 (「レーモン・スポンの弁護」) において引用していることを指摘している*6。しかし、モンテーニュはここで potius のかわりに si vis (君が望むならば) と記している (Ure meum si vis flamma caput, et pete ferro | corpus, et intorto verberare terga seca)*7。そのことには、奇妙にも Smith は触れていない。モンテーニュがティブッルススのどんな刊本もしくは写本を参照しているのかは不明であるが*8、引用したモンテーニュ自身がこの文脈における potius の解釈に疑

*4 Cfr. F. Della Corte, *Tibullo. Le Elegie*, Milano, Mondadori 1980, ad loc.: “Se l’apostrofe fosse rivolta a Marato, non si comprende perché il *caput*, il *corpus* e i *terga* siano di Tibullo e non del colpevole.”

*5 W. Wimmel, *Der frühe Tibull*, München, Fink 1968, p. 95: “(...) einmal bedauernde Reue, dem zarten Knaben gegenüber innerlich so weit gegangen zu sein; zweitens, und darüber hinaus, wächst die Idee in Tibull, solche Schmerzen selbst zu leiden. Ja die Vorstellung solcher Schmerzen ist ihm lieber als der Gedanke, Marathus an einen Reichen zu verlieren.” P. Murgatroyd, *Tibullus I. A Commentary on the First Book of the Elegies of Albius Tibullus*, Pietermaritzburg, University of Natal Press 1980, ad loc.: “It seems most likely that the lines are addressed to the *puer delicatus* and that Tibullus is asking the boy to take him as his abject slave and treat him as he wishes, rather than sell himself.” R. Perrelli (*Commento a Tibullo: Elegie, Libro I*, Rubbettino, Soveria Mannelli 2002, ad loc.) は、Venus へ呼びかけているという解釈は困難があるとした上で、“Più probabilmente il discorso, che è introdotto da *Adomoniui quotiens*, è rivolto a Marato e il suo significato è pressappoco ‘Fammi tutto ma non tradirmi per un amante ricco’” とする。R. Maltby, *Tibullus: Elegies. Text, Introduction and Commentary*, Cambridge, Francis Cairns 2002, ad loc.: “Tibullus would rather suffer traditional slave punishments, presumably as a slave of Marathus (*servitium amoris*), than see Marathus sell himself.”

*6 K. F. Smith, *The Elegies of Albius Tibullus*, New York, Cincinnati, Chicago, American Book Company 1913, ad loc.

*7 Michel de Montaigne, *Essais II*, édition d’E. Naya, D. Reguig-Naya et A. Tarrête, Paris, Gallimard 2009 (Folio classique), p. 192.

*8 ティブッルススの引用の直前で、モンテーニュは Petronius, *Satyricon*, 117.5 に言及している。上記 Gallimard 版の注 (II, p. 708) および宮下志朗訳の注 (『エッセー』4, 白水社 2010, p. 302 n. 68) によれば、モンテーニュは両箇所がともに引用されている Iustus Lipsius, *Saturnalia sermonum libri duo qui de gladiatoribus*, Antverpiae, apud Christophorum Plantinum 1585, p. 93 (Liber II Caput V) を参照しているようである。ただ

問を抱き、改変した可能性もあるのではないか。いずれにせよ、従来の研究者らが当該詩行の抱える問題を過小視してきたことは否めない。

以上の検討を踏まえ、この問題の 2 行の存在自体を疑問視し、削除するという解決策もあり得るだろう。ただ、削除が適切だと主張するならば、何故この *couplet* がこの箇所挿入されるに至ったか、その経緯を説明する必要がある。それは、たしかに困難である。そこで以下、この 2 行を可能な限り生かす方針で問題解決を試みる。

I *servitium amoris*?

自身の肉体に責め苦を加えるように呼びかける言葉は、ティブッルスの中で、他の箇所でも認められる。

Ure ferum et torque, libeat ne dicere quicquam
magnificum posthac: horrida verba doma.
(1.5.5-6)

尊大な者を焼き、苛むがよい、今後いかなる大言壮語をも吐くのも望まないよう。荒い言葉を抑えよ。

1.9.21 と同様に、命令形 *ure* が冒頭に置かれているこの一節には、恋人デーリアに暴言を吐いたことの反省、彼女に対する未練が表明されている。「私」は、恋人との関係を修復し、いわゆる *servitium amoris* に戻るために、自身に奴隸的体罰が加えられることを進んで受け入れようとしている。2.3 を締め括る 2 行 *Ducite: ad imperium dominae sulcabitur agros: | non ego me vinclis verberibusque nego.* (2.3.79-80) には、自身が恋人ネメシスと結ばれることに絶望しつつも、彼女の魅力の虜となった自分は奴隸とならざるを得ないという自嘲めいた諦観が込められている。*servitium amoris* の甘受という点で、1.5.5-6 と共通している。いずれも文脈上、何の問題もない。他方、1.9.21-22 は文脈に即しているとは言い難い。また、1.5.5-6 および 2.3.79-80 は、あくまでも自身が隷属状態にあることを伝えれば十分であり、体罰の方法については略式で述べれば事足りた。ところが、この両者と異なり、1.9.21-22 には 3 通りの方法が具体的に述べられている。それぞれに命令法が用いられ、対格によって行為の及ぶ体の部分が、奪格によって用いる道具が特定されている。1.9.21-22 では、いわば体罰そのものの列挙と表現が眼目となっている。

翻って考えるに、そもそも体罰は何のために加えられるのだろうか。25-28 においては、普段は口の堅い奴隸たちが、酩酊や睡眠の状態にあるとき、無意識のうちに主人の

し、リプシウス自身はティブッルスの一節を写本伝承通りに引用している。

秘密を喋ってしまったことが歌われている。そこで、21-22 で挙げられている具体的な体罰が、*servitium amoris* を表現するのではなく、本来は奴隷の自白を目的とする拷問として言及されていたのではないかと推定することは、ごく自然である。もし、1.9.21-22 の *meum* にしかるべき修正を施し、28 行の直後に置くならば、文脈上の問題は緩和されるだろう。「私」は、マラトゥスの下僕らが彼の裏切りの事実を酒の席や睡眠時についつい漏らしたことを指摘した上で、罪を確証すべく、彼に向かってその下僕に対する拷問の執行を命じているのではないか（「君は、むしろ〔下僕の〕頭を焼くがよい、刃でその肉体を突け。背をよじれた鞭で打つがよい」）*9。移動した場合、*potius* が、拷問による自白と（25-28 における）酩酊時や睡眠時における無意識の漏洩とを比較して、「むしろ」を意味することは明白である。1.9.21-22 を伝承通りの位置に置いた場合（つまり、「私」がマラトゥスから拷問を受けることの比較対象として「マラトゥスの裏切り」を補って解釈する場合）よりも、*potius* の理解は容易になるだろう。

焼いた刃や煉瓦を奴隷の自白に用いることについては、たとえばプロペルティウス 4.7 にも認められる。キュンティアの亡霊は、自分を毒殺した（疑いのある）奴隷をこの種の責め苦にかけるよう詩人に促している（4.7.35-38: *Lygdamus uratur: candescat lamina vernae. | sensi ego, cum insidiis pallida vina bibi | aut Nomas. arcanas tollat versuta salivas. | dicet damnatas ignea testa manus*）*10。

さらに、紀元前 99 年に執政官を務めた弁論家マルクス・アントーニウス（前 143-86 年）について、ウァレリウス・マクシムスは彼がウェスタの巫女と性的関係を持ったと告発されたことに触れているが、その一節は 1.9 と少なからぬ関連を持っているように思われる。

M. Antonius avorum nostrorum temporibus clarissimus orator incesti reus agebatur. cuius in iudicio accusatores servum in quaestionem perseverantissime

*9 主語が「君」すなわちマラトゥスであるとしても、彼は拷問の執行自体を他人に委ねても構わない。*ure* などの一連の命令形によって、「私」は奴隷の生殺与奪権を持つマラトゥスに、拷問が執行されることを認めるよう命じていると考えればよい。たとえば、*Verg. Aen.* 6.152 でシビュッラはアエネアースにミーセーヌスの亡骸を運び出し、墓に安置することを命ずるが、実際に亡骸の搬送と埋葬にあたるのは、英雄の同志たちである。

*10 P. Fedeli (*Properzio. Elegie Libro IV*, Bari, Adriatica 1965, ad 4.7.35) は、以下の箇所を比較例として挙げている。*Vitr.* 7.9.5; *Plaut. Asin.* 548 ss; *Cic. Verr.* 2.5.163; *Lucr.* 3.1017; *Val. Max.* 6.8.1. また、R. Dimundo (*Properzio 4.7*, Bari, Edipuglia 1990, ad loc.) は *Plaut. Asin.* の他、以下の箇所を挙げている。*Hor. Epist.* 1.15.36; *Tib.* 1.5.5-6; *Tib.* 1.9.21-22; *Sen. Epist.* 78.19; *Petr.* 105.4. プラウトゥスは、カタログ風に奴隷が受ける拷問器具を列挙している。*qui advorsum stimulos, lamminas crucesque compedesque, | nervos, catenas, carceres, numellas, pedicas, boias, | inductoresque acerrumos gnarosque nostri tergi*（家畜用の突き棒、熱した刃、十字架、手枷、首縄、鎖、牢獄、首枷、足枷、首輪、極めて冷酷にして、我らの背中を知る絵描き（＝鞭）に対する者は……）。ウァレリウス・マクシムスの例については、本考察の後続部分を参照。

postulabant, quod ab eo, cum ad stuprum irent, lanternam praelatam contenderent. erat autem is etiam tum inerbis et stabat <in> corona videbatque rem ad suos cruciatus pertinere, nec tamen eos fugitavit. ille vero, ut domum quoque ventum est, Antonium hoc nomine vehementius confusum et sollicitum ultro est hortatus ut se iudicibus torquendum traderet, adfirmans nullum ore suo verbum exiturum, quo causa eius laederetur, ac promissi fidem mira patientia praestitit: plurimis etenim laceratus verberibus eculeoque inpositus, candentibus etiam lamminis ustus omnem vim accusationis custodita rei salute subvertit. argui fortuna merito potest, quod tam pium et tam fortem spiritum servili nomine inclusit. (Valerius, 6.8.1)

我々の父祖の時代もっとも高名な弁論家であったマルクス・アントーニウスが、不貞の罪で告訴されたときのことである。告発者らは、彼の奴隷を法廷の場で吟味するよう、極めて執拗に要求した。というのも、彼らの言うところでは、アントーニウスが密会に向かう際、彼が提灯を携えていたからである。奴隷は当時まだ髭も生えておらず、傍聴人たちのあいだに立っていた。事は自分の拷問にかかわることを分かっていたが、拷問から逃げることはなかった。むしろ彼は、家に戻るや否や、このためにひどく狼狽し心配したアントーニウスを、自分の方から促し、自身を拷問にかけるべく裁判官に引渡すように言った。自分は主人の分が悪くなるような言葉をけっして口から漏らすことはないと言確言し、そしてその約束が嘘でないことを驚くべき忍耐で示した。実際、何度となく鞭で打たれ、木馬責めに合い、熱した刃ですら焼かれたが、被告の安泰を守り、告発に基づくあらゆる責め苦を斥けたのだった。運命が非難されるのも当然のことであり得よう。というのも、かくも忠義で勇気ある精神を、下郎の名に閉じ込めてしまったからである。

木馬責めは別としても、熱した刃を体に当てたり、鞭打ちを加える拷問は、1.9.21-22 で言われている責め苦とも共通している。奴隷が主人を不貞の糾弾から守ろうとしている状況も（もっともマラトゥスの奴隷たちは酒を飲んだり、眠っているあいだに秘匿すべきことをついつい喋ってしまうのだが）、1.9 に類似している。マルクス・アントーニウスについての上記のようなエピソードを伝える作家は、ウァレリウス以外には知られていないが、時代的に言って、彼よりもアントーニウスに近いティブッルスもまた知っていたはずである。そして、詩人は 1.9 を創作するときに、このエピソードを念頭に置いていた可能性もある。マラトゥスの奴隷よろしく、彼が逢引をするときに何度もその提灯持ちすら務めたことに触れた 41-42 (O quotiens, vobis ne quisquam conscius esset, | ipse comes

multa lumina nocte tuli!) もそのことを示唆する。これは、アントーニウスの奴隷が、主人の密会につき添って、提灯持ちを務めたという点 (ab eo, cum ad stuprum irent, lanternam praelatam) についての詩人の記憶に基づいているのではないか。

2 meum caput

残る問題は、caput という名詞と一緒に用いられている meum である。これについては、かわりに mereo の現在分詞 merens を本来の読みとして提案する。つまり、頭は「(焼かれるという責め苦) に相応しい」の意味に取る。主人の秘密を隠そうとする下僕は、主人の共犯者であるから、彼の頭は拷問を受けるに相応しいのである。この動詞が、「[罰に] 相当する」の意味で、現在分詞で用いられている例としては、scelus expendisse merentem | Laocoonta ferunt (Verg. *Aen.* 2.229) 「ラーオコーンはそれが当然であるように、罪の償いをしたのだと人々は言う」、sumpsisse merentis | laudabor poenas (Verg. *Aen.* 2.585) 「私は、罰を受けるべき人を罰したとして褒められるだろう」、cives odere merentem (Ov. *Met.* 8.116) 「[メガラ]の」市民たちは、憎まれて当然である者 (=私) を憎む」が挙げられるだろう。

なお、罰や責め苦を受けるべき人間の体の部分に、mereo が限定辞として用いられる例としては、プロペルティウスの以下の一節が挙げられる。

imponitque notam collo morsuque cruentat,
praecipueque oculos, qui meruere, ferit.
(Propertius, 4.8.65-66)

(キュンティアは私の) 首筋に傷をつけて、噛みついて血を流す。とりわけ、
そうされて当然である目を傷めつける。

ケルススの以下の一節では、mereo が現在分詞の形で、(人ではなく) 人の臓器に用いられている。

Neque credendum utique nostris est, qui cum in adversa valetudine vinum aut
frigidam aquam concupiverunt, deliciarum patrociniū in accusatione[m] non
merentis stomachi habent. (Celsus, 1.8.2)

我々の患者の言うことを、けっして信じてはならない。彼らは、健康がすぐれないときに葡萄酒や冷たい水を所望した上で、快楽を擁護して断罪される
いわれの無い胃を断罪する。

さらに、一層注目すべき例は、オウィディウス『名婦の書簡』の以下の一節である*11。

Haec mihi narraras et me movere. merentem
ure: minor culpa poena futura mea est.
(*Heroides*, 7.85-86)

このことをあなたは話し、それは私を動揺させました。焼かれるべき我が身を焼いてください。そうすれば、私の罰（＝生きている限り続く恋の苦しみ）は罪よりも軽くなることでしょう。

アエネアースは、ディードーにトロイア陥落の物語を聞かせる。彼が、トロイアの脱出に際して、妻クレウーサを見殺しにしてしまったことを知り、彼の薄情さに彼女は衝撃を受けたはずである。それにもかかわらず、彼女は亡夫に対する貞潔の誓いを破り、彼に恋してしまった。だから、彼女はその身を焼かれるという罰を受けてしかるべきである*12。ここでは、ure が merentem と近接して置かれている。もし本考察の推論が正しければ、オウィディウスの上記一節は 1.9.21 に含まれる本来の読み、merens に影響を受けていると考えられる。

おわりに

以上の考察に基づき、想定される本文は、1.9.17-30 の範囲で、以下の通りである。

admonui quotiens “auro ne pollue formam:	
saepe solent auro multa subesse mala.	
divitiis captus si quis violavit amorem,	
asperaque est illi difficilisque Venus.	20
nec tibi celandi spes sit peccare paranti:	23
scit deus, occultos qui vetat esse dolos.	
ipse deus tacito permisit lene ministro,	25
ederet ut multo libera verba mero;	
ipse deus somno domitos emittere vocem	
iussit et invitos facta tegenda loqui.	28
ure merens potius flamma caput et pete ferro	21
corpus et intorto verbera terga secal!”	22
haec ego dicebam: nunc me flevisse loquentem,	29
nunc pudet ad teneros procubuisse pedes.	30

*11 本文は、P. E. Knox, *Ovid Heroides. Select Epistles*, Cambridge UP 1995 に基づく。

*12 Cfr. Knox, *op. cit.*, ad 7.85.

私は何度君に忠告したことか。「黄金によって容貌を汚すことがないようにしたまえ。しばしば黄金には多くの災いが隠れているものだ (17-18)。もし誰かが富に心を奪われ、愛を汚したとするならば、ウェヌスは彼に対して冷酷で敵対的になるだろう (19-20)。罪を犯そうとするならば、君はこれを隠せると望んではならない。神は知っており、欺きが隠れていることを拒む (23-24)。神御自身が、口数の少ない下僕に、大量の葡萄酒によって舌が自由な言葉を発するように許したのだ (25-26)。神御自身が、眠気に負かされた者らに声を出すよう、望まないのに隠すべきことを話そう命じた (27-28)。いつその事 (potius)、君は罰を受けるに相応しい (merens) 頭を焼くがよい、刃で肉体を突け。背をよじれた鞭で打つがよい (21-22)。」このようなことを、私は口にしていた。今は、話しながら涙を流したことや柔らかない足許に平伏したことを恥じている (29-30)。

1.9 の冒頭では、「もし君が後から哀れな恋心を傷つけようとするつもりだったならば、何故神々にかけて、こっそり破ることになる約束を与えたりしたのだ。ああ、哀れなる者よ、たとい誰かがはじめは偽りの誓いを隠したとしても、後になって音を立てない歩みで、「罰」はやってくるのだから (1-4: Quid mihi, si fueras miseros laesurus amores, | foedera per divos, clam violanda, dabas? | Ah! miser etsi quis primo periuria celat, | sera tamen tacitis Poena venit pedibus)」と隠蔽した罪が罰せられることを確言する。ところが、その直後には、「天の神々よ、どうかお情けを！美しき者らは罰を受けることなく、一度はあなた方神々の御威光を愚弄することができます。それは正当なことです (5-6: parcite, caelestes: aequum est impune licere | numina formosis ludere vestra semel)」と口走っている。マラトゥスに対して強く厳しい態度で臨み、彼の裏切りを非難し始めながら、美少年に対する未練がそうさせるのか、彼が犯した罪に対する許しを神々に乞うている。

同様の心理の揺れ動きは、行の移動によって 17-30 の範囲でも、効果的に表現されることになるだろう。金持ちに靡き、愛の盟約を破ったマラトゥスを言葉の上では激しく責め立てながらも、29-30 にあるように、「私」は涙を流して少年の足許に平伏する。「私」の言説は、完了時称で導入され (admonui [17])、未完了時称で結ばれる (dicebat [29])。「私」は、マラトゥスの裏切りが事実であったとしても、それを直視したくはない。だから、彼の罪状を決定づけるような拷問を本来は望んでいない。未完了時称は、奴隷への拷問を要求する強硬な言葉で少年を追い詰めながらも、同時に少年への執着を隠せなくなった「私」の心理状態を反映しており、弱みを露呈しているのである。

なお、このように想定した本文から現行の本文への移行過程についても、説明を加えておこう。まずは *merens* という文字の末尾の音節が、おそらくはカロリング・ルネサンスより以前に、汚れや破損などの事故によって読めなくなったと考えられる。ティブッルス の *servitium amoris* の傾向を知る人は、1.5.5-6 (*ure ferum et torque ... horrida verba doma*) を想起し、*ure* で始まる当該 *couplet* もまた自分への虐待を呼びかける一節である とみなし、*meum* という推定を本文に加えたのだろう。29-30 で言われている「私」の涙な がらの平伏も、そのような推定の一因となったかも知れない。いったん *meum* という読 みが確定すると、今度はこの位置で *potius* がいかなる比較を想定しているのか、当然問題 になる。そこで、後の世代の人は、文脈的に「マラトゥスの裏切り」が比較の対象となる べきだと考え、裏切りを意味し得る *violavit amorem* (19) なる語句に近づけるべく、当該 *couplet* を現行の位置に移動したと思われる*13。

(東京大学)

*13 本考察を査読された方々から、多くの有益なご指摘を賜りました。厚く御礼申し上げます。

Propertius, 3.7.7-18

平野智晴

nam, dum te sequitur, primo miser excidit aeuo,
et noua longinquis piscibus esca natat;
et mater non iusta piaē dare debita terrae
nec pote cognatos inter humare rogos; 10
sed tua nunc uolucres astant super ossa marinae,
nunc tibi pro tumulo Carpathium omne mare est.
 infelix Aquilio, raptae timor Orithyiae,
 quae spolia ex illo tanta fuere tibi?
 aut quidnam fracta gaudes, Neptune, carina? 15
 portabat sanctos alueus ille uiros.
 Paete, quid aetatem numeras? quid cara natanti
 mater tibi in ore est? non habet unda deos.
 (Prop. 3.7.7-18)

本論は、構成上の問題が多数指摘され様々な修正案が提案されている Propertius, 3.7 において、7-18 に対して新たな類例を提示し、これが属する文学的伝統について再考し、当該詩行の連続性について論ずるものである*1。

本詩テキストの錯綜とした問題について、Butler & Barber は、簡潔に、以下の三点に整理している。すなわち：(1) 1-8 において tu と te は pecunia を参照しているのに対し、11 における tua は、導入的な呼格なしにパエトゥスに帰せられる；(2) 25 reddite において、誰に呼びかけているのか不明である；(3) 17-20 において、詩人が Paete, quid aetatem numeras? ... と叫ぶのは奇妙であり、むしろ 57-64 におけるパエトゥスの実際の台詞との関わりが示唆される*2。これらを根拠に、本詩の前半部については、おおよそ、1-10：パエトゥスの難破による死への言及、51-66：パエトゥスが死に際に残した台詞を含んだ具体的な描写、17-18：死にゆくパエトゥスに対する詩人のペルソーナの呼びかけ、11-16：埋葬されることのないパエトゥスの亡骸^{なきがら}の描写、という叙述の流れになるよう、詩行の入れ替えが提案されている*3。

*1 テキストは、Heyworth が自身の校訂本の巻末に補遺として採録した N 写本に拠る (Heyworth, *Elegos* 193-195)。ただし、本論引用テキスト中の下線は筆者に拠り、これについては、vid. p. 75.

*2 Butler & Barber 275-276.

*3 Heyworth は、このような立場を押し進め (Heyworth, *Cynthia* 309-312)、極限まで手を入れた詩行の入れ替え案を提示している (id., *Elegos* 111-114)。

これに対して、Orlebeke は、上記 (1) に対して詩行の入れ替えという修正手段を採ったことが際限のない詩行の入れ替えの連鎖を引き起こすきっかけとなったとし*4、寧ろ、第 8 行と第 9 行の間に 1-2 カプレットの脱落 lacuna を想定すべきである、と主張した。まず、彼女は、従来指摘されてきた Prop. 3.7 と A.P. 7 の関連性を改めて論じ、前者 5-12 に対して、後者 652.1-4, 273, 652.5-8, 285, 288 を比較し、9-12 の詩行の入れ替えはプロペルティウスによるこうしたエピグラムの主題の繋がりを不必要に乱すとした*5。そして、Fedeli, Barber, Camps, Richardson らの句読法から ‘pecunia’ への呼びかけは 1-8 で完結していること、9-10 の主語 mater と 11-12 の主語 uolucres の間に認められる平行性から 9-12 全体がパエトウスを指し示していることを示し*6、さらに、それでもパエトウスの呼格が必要であることを論じた*7 上で A.P. 7.286 を引用し、およそ「パエトウスよ、……吹き荒れる嵐が到来したとき、贅沢な生活はお前を助けはしなかった。お前の富への希望は失われ……」という内容の詩行が脱落したものと推測した*8。

際限のない詩行の入れ替えに走るのではなく第 8 行と第 9 行の間における lacuna の想定に止めよ、という主張には一定の説得力がある*9 が、しかし、それでも、彼女の議論には、いくつかの点で曖昧さが残るように思われる。本論では、A.P. 7.652.5-8 との比較に着目して、二点だけ考えてみたい。

第一は、Prop. 3.7.9-10 et mater non iusta pia dare debita terrae | nec pote cognatos inter humare rogos に対して A.P. 7.652.7-8 Τιμάρης δὲ κενὸν τέκνου κεκλαυμένον ἀθρῶν | τύμβον δακρύει παῖδα Τελευταγόρην が比較されるとき、前者で言及されているのは息子を弔うことができない母親であるのに対し、後者で言及されているのは息子を弔うことのできない父親であることである*10。Orlebeke はどちらも「子を失った親」と総称している*11 が、後述するように、言及する対象が父親と母親では、語り手のニュアンスがいささか変わってくる。

第二は、9-12 et mater non ... | nec pote ... | sed tua nunc uolucres astant super ossa marinae, | nunc tibi pro tumulo Carpathium omne mare est に対して 7.652.5-8 χὰ μὲν που καύηξιν ἢ ἰχθυόβόρους λαρίδεσσιν | τεθρήνητ' ἄπνους εὐρεῖ ἐν αἰγιαλῷ, | Τιμάρης δὲ ... | ... が比較される

*4 Orlebeke 424-425.

*5 id. 421.

*6 id. 422.

*7 id. 423.

*8 id. 426-428.

*9 これについては、vid. pp. 77-78.

*10 Orlebeke 419.

*11 ibid.

とき、その叙述の流れは、前者では、亡骸を「(母) 親は弔うことができない」代わりに「海鳥が^{たか}集まっているであろう」、となっているのに対し、後者では、亡骸には「海鳥が集まっている」が「(父) 親は弔うことができない」、となっていることである*12。この順序の転倒の理由として、彼女は、パエトウスの亡骸の残酷な運命に力点が置かれているからである、と説明するが、これは十分に説得的とはいえない*13。

A.P. 7 との明らかな関連性にも関わらずこのような曖昧さがなお見られる、ということは、これらのエピグラムが組み合わせられ引用されるにあたって、その背景に別の要因があることを意味しており、それは、A.P. 7 とは異なる類例が、何かさらに踏まえられていることに拠るのかも知れない。

そもそも、遠方で悲惨な死を遂げた若者を描写するにあたり、弔うことができない血縁として（「父親」や「両親」ではなく）「母親」のみが挙げられるとき、これを一人取り上げることによって、この若者の死の悲劇性が最大限に強調される、という効果が期待されるものらしい。

例えば、Hom. *Il.* において*14、中盤を過ぎた辺りから、「お前は近親者に嘆かれることなく、(その亡骸は) 山犬や猛禽に引き裂かれるであろう」という定型句が、繰り返し現れるようになる*15。最初のうちは、主たる武将が敵兵に向かって罵倒するにせよ味方に向かって警告するにせよ「両親」が挙げられるが、終盤に近付き表現が激しさを増すにつれて、これが削ぎ落とされて「母親」のみになってゆく。こうした罵倒のうち最も強調された形が、瀕死のヘクトールに投げかけられるアキッレウスの一言であることは、論を俟たないであろう：22.349-354 οὐδ' εἴ κεν δεκάκις τε καὶ εἰκοσὴν ἥριτ' ἄποινα | στήσωσ' ἐνθάδ' ἄγοντες, ὑπόσχωνται δὲ καὶ ἄλλα, | οὐδ' εἴ κέν σ' αὐτὸν χρυσῷ ἐρύσασθαι ἀνώγοι | Δαρδανίδης Πρίαμος· οὐδ' ὥς σέ γε πότνια μήτηρ | ἐνθεμένη λεχέεσσι γοήσεται, ὃν τέκεν αὐτή, | ἀλλὰ

*12 *ibid.*

*13 Heyworth は 1 カブレット分の lacuna の後に 11-12, 9-10 と詩行の入れ替えを行っている (Heyworth, *Elegos* 114) が、その際、lacuna も含めたこの箇所と A.P. 7.652 を比較し、間接的にこの処置の根拠としている (Heyworth & Morwood 170-171 ad vv. 11-12, 9-10)。

*14 本詩 Prop. 3.7 には、文脈がはっきりしないものの、トロイア圏の武将への言及が一度ならず見られる。cf. 21-24 (アガメムノーン) ; 39-46 (オデュッセウス)。

*15 この定型については、cf. Hom. *Il.* 11.452-455 (オデュッセウスがトロイアの武将ソーコスに向かって罵倒して、父母に言及して) ; 15.349-351 (ヘクトールがトロイア勢に向かって警告して、親戚の男女に言及して) ; 21.122-127 (アキッレウスがトロイアの武将リュカーオーンに向かって罵倒して、母親に言及して) ; 22.86-89 (ヘカベーがヘクトールに向かって懇願して、自身と嫁アンドロマケーに言及して) ; 22.352-354 (アキッレウスがヘクトールに向かって罵倒して、母親に言及して) ; *Od.* 24.290-296 (ラエルテースが(我が子と知らず) オデュッセウスに向かって悲嘆して、自身と妻そして嫁アンドロマケーに言及して)。

κύνες τε καὶ οἰωνοὶ κατὰ πάντα δάσσονται.*16

それゆえ、Prop. 3.7 においても、プロペルティウスは、「亡骸を喰い貪る魚」と「弔うことのできぬ母親」を対比させることで、パエトゥスの死の悲劇性*17 を可能な限り強調しようとしている、とも考えられるのである。この、「魚」と「母」の組み合わせは、Hom. *Il.* においては、アキッレウスのリュカーオーンの亡骸に対する罵倒の言葉に見られるが、Hom. を熟知していた読者であれば、プロペルティウスの詩句を目にしたとき、ヘクトールに対する罵倒に次いで印象深い当該詩行を容易に想起し得たかも知れない：

ἐνταυθοὶ νῦν κείσο μετ' ἰχθύσιν, οἳ σ' ὠτειλὴν
αἶμ' ἀπολιχμήσονται ἀκηδέες· οὐδέ σε μήτηρ
ἐνθεμένη λεχέεσσι γοήσεται, ἀλλὰ Σκάμανδρος
οὔσαι διήεις εἴσω ἁλὸς εὐρέα κόλπον. 125
θρῶσκων τις κατὰ κῦμα μέλαιναν φρίχ' ὑπαίξει
ἰχθύς, ὅς κε φάγησι Λυκάονος ἀργέτα δημόν.
φθείρεσθ', εἰς ὃ κεν ἄστυ κιχείομεν Ἴλιου ἱρῆς,
ὑμεῖς μὲν φεύγοντες, ἐγὼ δ' ὀπιθεν κεραΐζων.
οὐδ' ὑμῖν ποταμός περ εὐρροὸς ἀργυροδίνης 130
ἀρκέσει, ᾧ δὴ δηθὰ πολέας ἱερεύετε ταύρους,
ζωοὺς δ' ἐν δίνῃσι καθίετε μώνυχας ἵππους.
ἀλλὰ καὶ ὥς ὀλέεσθε κακὸν μόρον, εἰς ὃ κε πάντες
τείσσετε Πατρόκλοιο φόνον καὶ λοιγὸν Ἀχαιῶν,
οὓς ἐπὶ νηυσὶ θοῇσιν ἐπέφνετε νόσφιν ἐμεῖο. 135
 (Hom. *Il.* 21.122-135)

上記引用における下線部は、本論冒頭に引用した Prop. 3.7.7-18 における下線部と共に、類似性が認められる部分である。

Prop. 3.7.7-18 と Hom. *Il.* 21.122-135 を比較したとき、以下のような類似性が見られる。すなわち、前者においては、およそ「彼（パエトゥス）は魚の餌となるのだ（7-8）。そして、母親は弔うことができないのだ（9-10）、そうではなく、お前の亡骸の上を海鳥が集って、全カルパティア海がお前の墓となるのだ（11-12）」と叙述が進んで行くのに対し、後者においては、およそ「お前は魚の餌となるであろう（122-123）、お前を母親は弔うことができないだろう（123-124）、そうではなく、スカマンドロス河が海へ運び去り（124-125）、リュカーオーンを魚が喰らうであろう（126-127）」と叙述が進んで行く。既に論じたように、両者には、若者の亡骸を喰らう動物と若者を弔うことのできない母親の対比が見られ、しかも、前者においては、「魚（が喰らう）－母親（は弔えない）－そう

*16 テキストは、Monro & Allen に拠る。

*17 cf. Prop. 3.7.17-18, 57-64.

ではなく、海鳥（が集って、カルパティア海が墓となる）」と、後者においては、「魚（が喰らう）－母親（は弔えない）－そうではなく（、スカマンドロス河が海へ運び去って）、魚（が喰らう）」と、動物と肉親の現れ方や詩行の構文、そして両者の関係性が類似している*18。

また、この比較から、「海は神々を持たない（18）」の解釈についても、ひとつの可能性を考えることができる。すなわち、Prop. 3.7 においては、18 non habet unda deos という、語り手による非情な呼びかけに対して、*Il.* 21 においては、130-131 οὐδ' ὑμῶν ποταμός περ ἑύρροος ἀργυροδίνης | ἀρκέσει... という、アキッレウスによる非情な呼びかけが見られるのであるが、前者を「海にはお前の助けになるような神々などいない」といったほどの意味に理解することができるならば、両者の呼びかけもまた類似しているということができるのである。このことは、両者の類似性が、前者においては 7-12 から少し離れた 18 にまで、後者においては 122-127 から少し離れた 130-131 にまで及んでいる、ということを示しており、前者における 7-18 はおよそ一つのまとまりを成している、ということを示しているように思われる。

ところで、詩人のペルソーナが、パエトウスを描くにあたりリュカーオーンを踏まえたのは、彼もまた溺れかけていた*19 というだけでなく、以前アキッレウスに捕えられ捕虜としてレームノス島へ売り払われた、という経緯もあったからだと思われる。

リュカーオーンは、アキッレウスに対して、次のように嘆願する：78-85 καί με πέρασσας ἄνευθεν ἄγων πατρός τε φίλων τε | Λήμνον ἐς ἡγαθέην, ἐκατόμβοιον δέ τοι ἦλφον. | νῦν δὲ λύμην τρίς τόσσα πορών· ἥως δέ μοί ἐστιν | ἥδε δυωδεκάτη, ὅτ' ἐς Ἴλιον εἰλήλουθα | πολλὰ παθών... | ... | ... μινυνθάδιον δέ με μήτηρ | γένατο Λαοθόη, すなわち、彼は、自らの命が金で^{あがな}購われ海を^{また}跨いで放浪を強いられたことを訴え、故郷に帰ってからの短い日数を数えて見せ、息子を若くして亡くすことになる母親のことを持ち出して命乞いをするのであるが、これに対して、アキッレウスは、次のような非情な言葉を返す：

*18 後者において、河畔で行われた戦いであったから亡骸を喰らう動物として魚が登場しているが（cf. *Il.* 21.203-204）、基本的に、この定型において、亡骸を喰らう動物は野犬や猛禽である（cf. 22.354）。ゆえに、前者において、（魚の代わりに）海鳥が出てくるとしても、これは、後者との類似性を損なうものではない。無論、私は、Orlebeke が論ずるように、この海鳥が *A.P.* 7.652.5-6 を踏まえてのものである、ということも否定しない（cf. Orlebeke 419）。

*19 リュカーオーンは、アキッレウスに追われて河に逃げ込んだトロイア兵の一人であった、と思われる。アキッレウスが見かけたとき、リュカーオーンは兜も盾も身に付けず槍も打ち捨て河から上がっており、戦闘態勢になく戦闘意欲も喪失した状況にあったことから、恐らく、溺れかけていたのであろう。cf. *Il.* 21.49-52。

νήπιε, μή μοι ἄποινα πιφαύσκειο μηδ' ἀγόρευε·
 πρὶν μὲν γὰρ Πάτροκλον ἐπισπεῖν αἰσιμον ἦμαρ, 100
 τόφρα τί μοι πεφιδέσθαι ἐνὶ φρεσὶ φίλτερον ἦεν
 Τρώων, καὶ πολλοὺς ζωοὺς ἔλον ἠδὲ πέρασσα·
 νῦν δ' οὐκ ἔσθ' ὅς τις θάνατον φύγῃ, ὃν κε θεός γε
 Ἰλίου προπάρειθεν ἐμῆς ἐν χερσὶ βάλλῃσι,
 καὶ πάντων Τρώων, πέρι δ' αὖ Πριάμοιό γε παίδων. 105
 ἀλλά, φίλος, θάνε καὶ σύ· τίη ὀλοφύρεαι οὕτως;
 κάτθανε καὶ Πάτροκλος, ὃ περ σέο πολλὸν ἀμείνων.
 οὐχ ὀράας οἷος καὶ ἐγὼ καλός τε μέγας τε;
 πατρός δ' εἴμ' ἀγαθοῖο, θεὰ δέ με γείνατο μήτηρ·
 ἀλλ' ἔπι τοι καὶ ἐμοὶ θάνατος καὶ μοῖρα κραταιή· 110
 ἔσσεται ἢ ἥως ἢ δαίηλ' ἢ μέσον ἦμαρ,
 ὁππότε τις καὶ ἐμεῖο Ἄρη ἐκ θυμὸν ἔλγῃται,
 ἢ ὅ γε δουρὶ βαλὼν ἢ ἀπὸ νευρῆφιν οἴσῃται.

(99-113)

これらは、13-18 infelix Aquilio, raptae timor Orithyiae, | quae spolia ex illo tanta fuere tibi? |
 ... | Paete, quid aetatem numeras? quid cara natanti | mater tibi in ore est? において、その反映
 が認められる。すなわち、金では買えない命を奪われようとするパエトウスもまた、嵐と
 海の神に嘆願するにあたり、自らのまだ若い年齢を数えて、母親に言及するのであるが、
 詩人のペルソーナは、こうしたことを非情にも問いかけてみせることによって、むしろ嵐
 と海の神の非情を詰っているのである。

アキッレウスは、リュカーオーンの嘆願によって、以前は捕虜として捕えて金儲けにし
 たトロイア人ではあったが、パトロクロスが死んだ今もう誰も生かしてはおかぬ、という
 姿勢を鮮明にする。詩人のペルソーナは、パエトウスの嘆願によって、以前は何回かの質
 易によって多少の金儲けをしたかもしれないが、嵐と海の非情によって遂にその生を終え
 なくてはならぬ、という事実を鮮明にする。一度は金で贖い海を渡った命を結局は落とす
 ことになるリュカーオーンと、金を追い求め海を渡っている内に命を落とすことになるパ
 エトウス。二人には、いわば金と命が天秤に掛けられながらも、結局は金では買えない命
 を落とすことが避けられなかった、という点においても類似性があるのであり、こうし
 たことが 128-129 φθείρεσθ', εἰς ὃ κεν ἄστυ κιχέομεν Ἰλίου ἱρῆς, | ὑμεῖς μὲν φεύγοντες, ἐγὼ
 δ' ὀπιθεν κεραῖζων を 13-18 infelix Aquilio, ... というかたちに敷衍させ、18 non habet unda
 deos へと続く文脈を構成していると考えられるのである*20。

*20 そして、この 18 non habet unda deos について、130-131 οὐδ' ὑμῖν ποταμός περ εὐρροος ἀργυροδίνης | ἀρκέσει
 ... を踏まえてさらにニュアンスを出すならば、「イーリアスの世界では、供犠まで行った河の神ですら
 救ってはくれなかったのだから、まして、(詩人のペルソーナの属する) 我々の世界では、何ら関わりの

そして、この、嵐と海の非情を詠るにあたり「金か命か」の瀬戸際が問題とされる、という文脈は、例えば、*A.P.* 7.652.1-4 Ἠχέεσσα θάλασσα, τί τὸν Τιμάρεος οὕτως | πλώοντ' οὐ πολλῇ νηὶ Τελευταγόρην | ἄγρια χειμήνασα καταπρηνώσαο πόντῳ | σὺν φόρτῳ, λάβρον κῦμ' ἐπιχεναμένη; 286.3-5 τὰ δ' ὄλβια κέῖνα μέλαθρα | φρούδα (...) πάσης ἐλπίς ὄλωλε Τύρου, | οὐδέ τί σε κτεάνων ἐρρύσατο にも通底するのであり、とりわけ、Orlebeke が第 8 行と第 9 行の間で脱落した内容の根拠とした後者は、この点において妥当なものであると思われる。

以上を踏まえ、*Prop.* 3.7.7-18 は、*A.P.* 7 のエピグラムを組み合わせ引用するにあたって、その背景にさらに *Hom. Il.* 21.122-135 を踏まえているのであり、これが、プロペルティウスの叙述の骨格を成していた、と、そして、こうした事情から、第 8 行と第 9 行の間に *lacuna* が想定されはするものの、この 7-18 は大がかりな詩行の入れ替えの対象とすべきではなく、ひとまず、伝承をそのまま維持すべきである、と考えるのである。

そして、1-8 についてその連続性は疑われていないのであるから、私は、1-18 まではおおよそ伝承を維持すべきである、と考えるのである^{*21}。

(東京大学)

参考文献

- Baehrens, E. ed., *Sex. Propertii Elegiarum Libri IV* (Teubner; Lipsiae 1880).
 Butler, H. E. and Barber, E. A. ed., *The Elegies of Propertius* (Oxford 1933).
 Camps, W. A. ed., *Propertius: Elegies Book III* (Cambridge 1966).
 Enk, P. J. ed., *Sex. Propertii Elegiarum Liber Secundus*, 2 vols. (Leiden 1962).
 Fedeli, P. ed., *Sextus Propertius: Elegiarum Libri IV* (Teubner; Stuttgart 1984).
 Goold, G. P. ed., *Propertius: Elegies* (Loeb CL; Cambridge, Massachusetts and London 1990).
 Gow, A. S. F. and Page, D. L. ed., *The Greek Anthology, The Garland of Philip and Some Contemporary Epigrams*, 2 vols. (Cambridge 1968).
 Gow, A. S. F. and Page, D. L. ed., *The Greek Anthology, Hellenistic Epigrams*, 2 vols. (Cambridge 1965).
 Heyworth, S. J., *Cynthia* (Oxford 2007).
 Heyworth, S. J. ed., *Sexti Properti Elegos* (OCT; Oxford 2007).

ない海の神々が救ってくれようはずもない」というかたちで、嵐と海の神の詠るべき非情をさらに際立たせることができるであろう。

^{*21} 本稿は、2015 年 10 月 17 日に成城大学で行われた第 14 回フィロロギカ研究集会での発表に基づき、加筆修正を行ったものである。研究集会で司会を担当して下さった大芝芳弘先生をはじめ、貴重なご質問・ご意見を下さった方々、そして、本稿作成にあたって様々な助言を下さった匿名査読委員の方々に感謝を申し上げます。

- Heyworth, S. J. and Morwood, J. H. W. ed., *A Commentary on Propertius Book 3* (Oxford 2011).
- Hosius, C. ed., *Sex. Propertii Elegiarum Libri IV* (Teubner; Lipsiae 1922).
- Hubbard, M., *Propertius* (New York 1975).
- Kuinoel, C. T. ed., *Sexti Aurelii Propertii Opera Omnia* (London 1822).
- Monro, D. B. and Allen, T. W. ed., *Homeri Opera*, Tomus II (OCT; Oxford 1920).
- Morsley, K., 'Propertius 3.7', *CQ* 25 (1975) 315–318.
- Orlebeke, A., 'Propertius 3.7. 1–12', *CQ* 46 (1996) 416–428.
- Paley, F. A. ed., *Sex. Aurelii Propertii Carmina* (London 1872).
- Richardson, L. ed., *Propertius: Elegies I–IV* (Norman and Oklahoma 1976).
- Richardson, N., *The Iliad: A Commentary* Vol. VI (Cambridge 1993).
- Robertson, F., 'Lament for Paetus—Propertius 3.7', *TAPhA* 100 (1969) 377–386.
- Rothstein, M., ed., *Propertius Sextus: Elegien* (Dublin and Zürich 1966).
- Segal, C., *The Theme of the Mutilation of the Corpse in the Iliad* (Leiden 1971).
- Shackleton Bailey, D. R., *Propertiana* (Cambridge 1956).

has translaticias quas proprie sententias dicimus (Sen. *Con.* 1.pr.23)

吉田俊一郎

本論は、大セネカは『模擬法廷弁論』第1巻序23節に見られる translaticius の意味を考察する。大セネカはこの序の後半部において、幼い頃からの友人で高名な模擬弁論家であった故人ラトロローの思い出を語っており、23節では、警句 (sententiae) に関してラトロローが行っていた訓練について述べている*1。

Sen. *Con.* 1.pr.23. Solebat autem et hoc genere exercitationis uti, ut (aliquo die) nihil praeter epiphonemata scriberet, aliquo die nihil praeter enthymemata, aliquo die nihil praeter has translaticias quas proprie sententias dicimus, quae nihil habent cum ipsa controversia implicitum sed satis apte et alio transferuntur, tamquam quae de fortuna, de crudelitate, de saeculo, de divitiis dicuntur; hoc genus sententiarum supellectilem vocabat.

彼 [ラトロロー] はまた、次のような種類の練習を用いていた。すなわち、ある日にはエピポーネーマ以外の何も、別の日にはエンテューメーマ以外の何も、別の日には、我々が固有の意味で警句と言っている、伝統的な (?) 警句以外の何も書かないということである。最後のものは、模擬法廷弁論主題自体に関わるものを何も持たず、他のところへ移しても十分適合するような警句、たとえば運命について、残酷さについて、時代について、富について言われる警句のことである。この種の警句を彼は「家具」と呼んでいた。

ここでは、ラトロローが書く練習を行っていた三種類の警句 (sententia) が挙げられている。epiphonema と enthymema という二つの種類に続いて大セネカは、警句の第三の種類として、has translaticias quas proprie sententias dicimus を挙げている*2。これが指している内容は、次の部分 (quae nihil habent ... de divitiis dicuntur) で説明されている。一言で言

*1 大セネカの本文は Håkanson (1989) による。和訳は論者自身のものである。

*2 これら二つは、クインティリアヌス『弁論家の教育』において警句が扱われている第八巻第五章に名前が挙げられている。そこでは、epiphonema は、論の結びに付け加えられるもので、陳述ないし立証されたことの最終的な締め押しであり、enthymema は、論証にも属するものだが、警句としては正反対の事からなるものを指すと説明されている (Quint. *Inst.* 8.5.9-11)。大セネカの側にはこれらの語に関する説明はないが、この二つが何を指すかは、クインティリアヌスの説明の通りであると考えて良いだろう。

えばそれは一般的格言ということになるが、よく用いられている修辞学用語で言うならば「共通論題」loci communes であり*3、クインティリアヌスが *gnome* というギリシャ語で呼んでいる種類の警句に対応している*4。警句のこの種類が指している内容そのものは、明確になっていると言って良いだろう。

ここで問題となるのは、第三の種類を指すのに大セネカが用いている *translaticius* という形容詞の意味である*5。まず確認しておく、そもそもこの語は比較的稀な語であり、これが *sententia* ないし他の修辞学用語を修飾している例は他にない。従って、類例に頼ってこの表現の意味を決定することは難しい*6。

翻訳者たちは、キケローなどに多く見られる、「古くから伝えられた」、「伝統的な」という意味でここを訳している*7。しかしここで述べられている警句が「伝統的」であるというのは、どのようなことを指しているのだろうか。この表現が意味するのは、このような警句の種類そのもの、あるいは、後で述べられている運命や残酷さのような、この種の警句において扱われる主題が、古くからあるものである、ということのように思われる。「固有の意味で」*proprie* という語があることや、先に引いたクインティリアヌスの箇所 (*Inst.* 8.5.3) においてこの種の警句が「最も古い」*antiquissimae* と言われていることに、この解釈は適合するように思われる。しかしこうした用法は、他の用例において *translaticius* が持つ「伝統的」の意味と合致しない。この語がこの意味を持つのは、多くは、法律やそれに準ずるものについて言われる場合である*8。そこでは、こうした法律が一言一句変えずに受け継がれているという含意が強く現われている。それ以外の文脈で「伝統的」と訳しうる最初の例はパエドルスに見られるが、そこでも、「古いしきたりどおりに語った」と述べられており、字句を変更しないことという同じ含意が読み取れる*9。この含意を考慮するならば、これらの警句は、古くから一言一句変わらずに伝わるものであったということになるだろう。しかしそれは考えられない。ここで話題とされているのはラトローが練習

*3 Winterbottom (1974) のこの箇所への注を参照。

*4 Quint. *Inst.* 8.5.3. 大セネカとの対応は、これらが「固有の意味で警句と呼ばれている」*proprie...sententiae vocantur* という、よく似た表現によっても確かめられる。また、「一般的な言明」*vox universalis* という表現もここで用いられている。

*5 幾つかの写本には *translativas* ないし *translatas* という異読がある (Müller (1887) を参照)。しかし主要写本 (ABV) の読みは *translaticias* で一致しているので、この読みを疑う根拠はないと考えられる。

*6 私の調べた限り、アウルス・ゲッリウスまでの用例は 25 ある。Díaz y Díaz (1969) も参照 (ただしこの論文は、大セネカのこの箇所に言及していない)。

*7 Winterbottom (1974) は 'traditional'、Schönberger と Schönberger (2004) は 'herkömmlich'、Javier 他 (2005) は 'consagradas por la tradición' と訳している。Bornecque (1932) や Dal Bo (1986) は単に 'lieux communs', 'concerti generali' としており、この語をどう取っているか明らかではない。

*8 Cic. *Ver.* 1.114; 117; *Att.* 3.23.2; 5.21.11. *OLD* s.v. 2.

*9 Phaedr. 5.7.22-3 *aulaeo misso, devolutis tonitribus, di sunt locuti more tralaticio* (劇場の開幕の描写)。

として書くのを常としていた警句のことであり、それらは彼がその場で考え出した新しい警句であつたに違いないからである。したがって、この箇所での語を「伝統的な」と訳すことは不適切であり、我々はこの語の別の意味を探す必要がある。

しかし、辞書に記されている他の意味は、一見してここには適用不可能なものばかりである。比較的多く見られる用法は、先に述べた意味から転じて「普通の、ありふれた」を意味するものだが*10、一般に否定的なニュアンスで用いられており、大セネカが尊敬する友人であつたラトリウスの書いていた警句にそうした意味合いでこの形容詞を付したとは考えにくい。ワローなどに見られる「転義的な」という意味は、語の意味に関するものであり、警句とは関連しない*11。アウルス・ゲッリウスにある「翻訳の」という意味も、こことは無関係である*12。ただし後二者は、この語が、先に述べた「伝統的な」という意味と無関係に、語源である *transfere* の様々な意味（「語義を転ずる」、「翻訳する」）に関連する新たな意味を持ちえたことを示しているという点で、大セネカのこの箇所の解釈にも示唆を与える。

以上のことから、この箇所の *translativus* は別の意味で解されるべきである。その手がかりは、すぐ後に現れる *transferuntur* という表現にある。*transfere* は *translativus* の語源であるから、それらがこれほど近接しており、しかも同じ *sententiae* という語に結びついているということは、両者の意味上の関連性を強く示唆する。この示唆に従えば、動詞の方はここでは警句が様々な主題に「転用される」ことを表しているので、そこから派生した形容詞の方は「転用に関わる」、「転用向けの」といった意味になると推定できる*13。

こう取るならばこの語はここで、警句の第三の種類の特徴を表現し、その種を一語で言い表す名称として働いていることになるだろう。この名称は、大セネカがここで作り出したものであるかもしれない*14。なぜなら、この種の警句は固有の意味で警句と呼ばれているものであり、それ故にそれ自身の名称を持っていなかったと考えられるのに対し、彼はここでこの種の警句と他の種の警句との区別を問題としており、それゆえ、何らかの名称をこれに対しても必要としていたはずだからである。この意味は *translativus* の他の用

*10 *OLD* s.v. 3 を参照。

*11 *OLD* s.v. 1 を参照。

*12 *Gell.* 9.9.8.

*13 この解釈は、Schott (1672) に収められている Faber の該当箇所への注で既に示唆されている (*Translativus autem dixit, vel quod apte satis alio transferantur: vel quia non novae, sed aliunde translatae essent*)。しかしこの示唆はその後の研究に生かされているとは言いがたく（私の知る限り、現代の翻訳はいずれもこの注を反映していない）、また、この語をこのように解釈することが持ちうる様々な問題は Faber 自身によっても、その後の研究者によっても、まだ十分に議論されていない。本論はこの点において新たな寄与をしようと試みるものである。

*14 この点に関しては、以下の補足議論も参照。

例には想定することができない独特のものだが、上で見たようにワローやゲッリウスが *transfero* の意味からこの語の新たな意味を作り出していることからすれば、こうした意味で用いることはとくに不自然ではなかったと思われる。

(東京大学)

補足

最後に、この語をこの意味で取る場合に考慮すべき問題を二点論じておきたい*15。

第一に、この意味と、先に見た「普通の、ありふれた」という意味との間にはつながりがあると考えられるかもしれない。「転用に関わる」という意味が、「どこにでもありうる」といった意味を通じて、「ありふれた」に転じたという推測である。こう考えるならば、ここでのこの語の意味は *OLD* ならば 3 に属することになり、特に新しい意味ではないと言えることになるだろう*16。

私はこの推測を否定する根拠を持たないが、ただ次の 2 点だけを指摘したい。まず、上記の私の議論が正しいならば、大セネカのこの箇所では、この語には否定的なニュアンスはないし、また、彼はこの語を *transfero* という語と意識的に結びつけて用いている。それに対して *OLD* の 3 に見られる用例では、この語のニュアンスは明らかに否定的であり、また、「転用」との関連は希薄である。したがって、前者の意味から後者の意味が派生したとするならば、それはかなり大きな変化である。次に、「ありふれた」という意味は、「転用に関わる」という意味ではなく、「伝統的な」という意味から派生した可能性も十分考えられる。この語が「伝統的な」という意味を持つ場合、そこには「一字一句そのままの」というニュアンスがあることは既に指摘したが、それは「決まりきった、つまらない」といった意味に容易に転じうるように思われるからである*17。

以上の二点を考慮するならば、「ありふれた」という意味は「転用に関わる」という意味から派生したという考えは可能ではあるが、それが「伝統的な」という意味から派生したという考えに比べ、可能性が大いに高いとは言えない。したがって、もし辞書で分類するならば、この三つの意味はそれぞれ独立しているものとして並列するのが妥当であろう。あるいは、「転用に関わる」という意味は、*transfero* の様々な意味から派生した様々な用法として、「転義的な」や「翻訳の」という意味と並列して一つの項目に置かれるべきか

*15 以下の論点は、『フィロロギカ』誌の匿名の査読者の指摘による。ここに記して謝意を表する。

*16 *OLD* の当該箇所にはまさに *commonplace* という説明が用いられている（査読者の指摘による）。

*17 Díaz y Díaz (1969), 329–330 を参照。

もしれない。

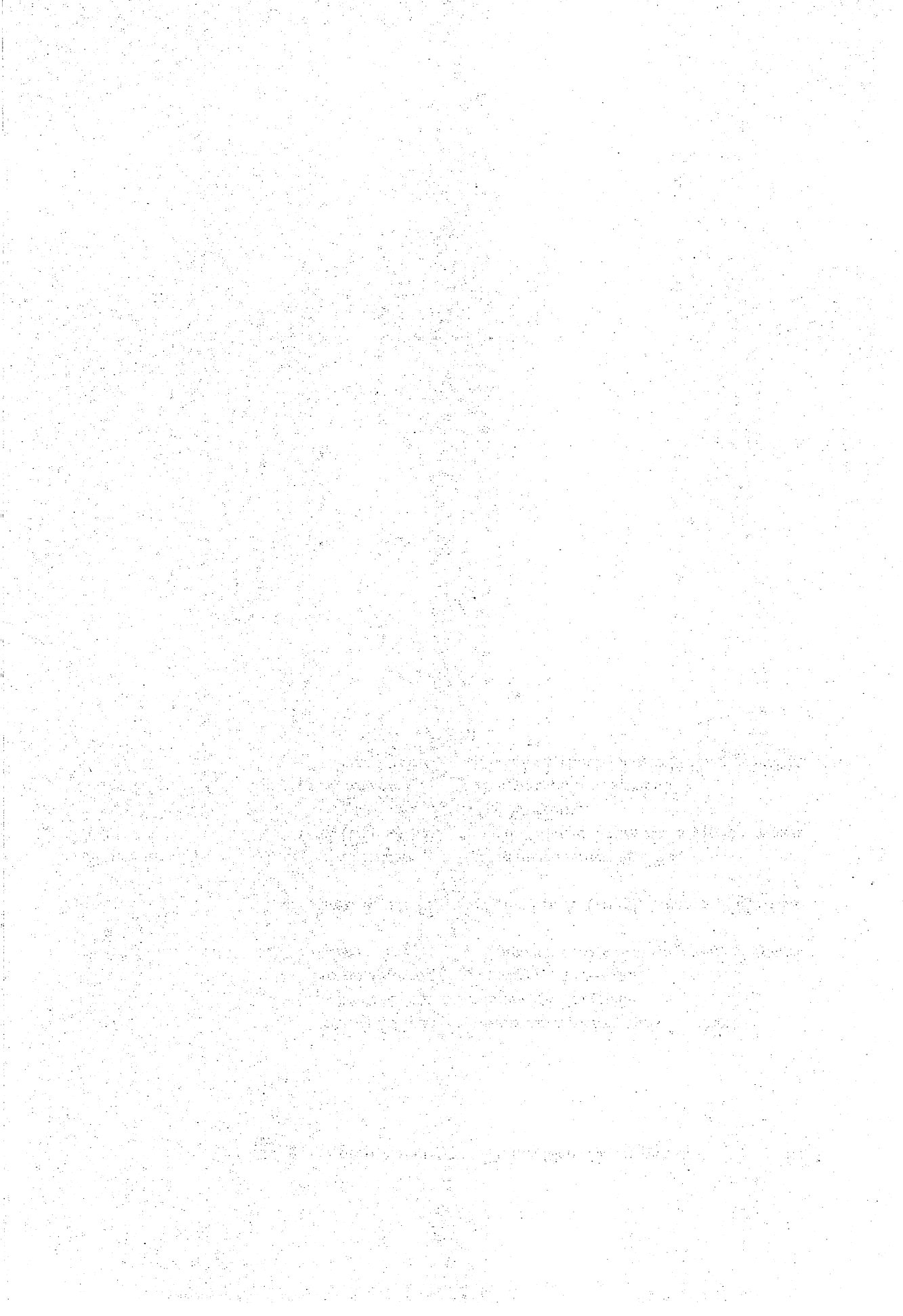
考慮すべき第二の問題は、この名称が誰によって作られ、用いられていたのかという点である。この語を警句に適用する用例が大セネカのこの箇所しかないことは最初に述べたが、このことは必ずしも、この名称が彼や彼に引用されている模擬弁論家たちの間で生まれ、そこでだけ通用していたということを示すわけではない。一つの類似する用語法が、先に見たクインティリアヌスの警句についての箇所に見られる。そこでは、一般的言明であるこの種の警句を個別の事物や人物に応用することが、*refero* や *tralatō* といった近縁の語によって表されている^{*18}。これと大セネカの箇所との類似を考慮するならば、*translativus* ないしそれに類似する名称は、一般的警句を示すものとして、修辞学の伝統の中に既に存在していたのではないかという推測も可能である。

しかし私は（この推測を否定する根拠は持たないと再び言わねばならないが）、それでもやはり、この名称の使用は大セネカ周囲の模擬弁論家たちに限定されていたのではないかと考えている。そう考える理由は以下のとおりである。まず、クインティリアヌスにおける *refero* や *tralatō* はいずれも「一般的概念の個別的事物への適用」を指すのに対し、大セネカの「転用」は様々な個別の箇所の間の転用を指している。したがって両者は異なる概念であり、必ずしもその間に関係があるとは言えないだろう。次に（こちらの方が重要であると思われるが）、もし *translativus* という名称がある程度広く用いられていたのならば、大セネカはこの箇所でわざわざそれを *transfere* を用いて説明したりはしなかったろうと考えられる。また、もしそうであれば、クインティリアヌスがそれに言及していたとしてもおかしくないのに、彼もまた「固有の意味での警句」という表現に頼っている。このことは、おそらく彼はこの名称を知らなかったか、知っていたとしても一般的とはみなさなかったことを示唆するだろう。最後に、本論冒頭の引用の最後において大セネカは、こうした種類の警句をラトローが「家具」*supellex* と呼んでいたと述べている。この語と *translativus* とは、同じ発想（一般的警句は家具のようにあちこちへ持っていくことができる）から警句に適用されたと思われる。そしてこの語を警句に適用することは他に知られておらず、またわざわざ大セネカが「ラトローが呼んでいた」と述べているので、これはラトローの独自の名称だった可能性が高い。そうだとすれば、*translativus* ももしかしたらラトローの作り出した名称だったかもしれない。

*18 Quint. *Inst.* 8.5.3 est autem haec vox universalis... interim ad rem tantum relata; *ibid.* 8.5.5 maiorem vim accipiunt [sc. huiusmodi sententiae] tralatione a communi ad proprium (査読者の指摘による)。

引用文献

- Bornecque, H. (ed.) (1932), *Sénèque le Rhéteur: Controverses et suasoires*, Paris (2 tomes).
- Dal Bo, Z. (ed.) (1986), *Oratori e retori. Controversie. Libro 1^o*, Bologna.
- Díaz y Díaz, M. C. (1969), 'En torno a *tralaticius*', *Emerita* 37, 327–333.
- Håkanson, L. (ed.) (1989), *L. Annaeus Seneca maior, Oratorum et rhetorum sententiae, divisiones, colores*, Leipzig (Teubner).
- Javier, I., Lajara, A., Artigas Álvarez, E., De Riquer Permanyer, A. (2005), *Séneca el Viejo: Controversias libros I–V*, Madrid.
- Müller, H. J. (ed.) (1887), *L. Annaei Senecae patris scripta quae manserunt*, Wien.
- Schönberger, O., Schönberger, E. (Übers.) (2004), *Lucius Annaeus Seneca der Ältere: Sentenzen, Einteilungen, Färbungen von Rednern und Redelehrern*, Würzburg.
- Schott, A. (ed.) (1672), *M. Annaei Senecae rhetoris opera, quae extant*, Amsterdam.
- Winterbottom, M. (ed.) (1974), *Seneca the Elder: Declamations* (Loeb Classical Library, 2 vols).



フィロロギカ——^{こ てんぶんけんがく}古典文献学のために 第 XI 号

2016 年（平成 28 年）6 月 30 日発行

編集・発行 フィロロギカ編集委員会（古典文献学研究会）
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1
首都大学東京人文科学研究科 大芝芳弘研究室
Tel: 042-677-2069（直）
Mail: philologica@hotmail.co.jp

印刷・製本 株式会社インフォテック
頒価 2000 円

ISSN 1884-1562

Philologica XI 2016

Societas Philologorum

(Secretary) Yasunori KASAI

Editorial Board:

(Hon.) Masaaki KUBO, (Hon.) Elizabeth CRAIK, (Hon.) Makoto ANZAI,
Yoshihiro OSHIBA, Hiroyuki TAKAHASHI, Yoshinori SANO,
Noburu NOTOMI, Taro HYUGA, Martin CIESKO

Contents

Three Odes in <i>Antigone</i>	I
Tomoharu HIRANO	
Empedocles on Mules' Sterility: A Philological and Philosophical Note	21
Jocelyn GROISARD	
Shelley's <i>Hymn to Mercury Translated from the Greek of Homer</i> : A Legible Translation . . .	31
Suzuna JIMBO	

Shorter Notes

N. sg. m. of the Present and the Aorist Participles in Greek	51
Takashi MATSUURA	
What Do Juries Suffer? The First Sentence of Plato's <i>Apology of Socrates</i>	57
Noburu NOTOMI	
Tibullus, 1.9.21–22	62
Taro HYUGA	
Propertius, 3.7.7–18	72
Tomoharu HIRANO	
has translaticias quas proprie sententias dicimus (Sen. <i>Con.</i> 1.pr.23)	80
Shunichiro YOSHIDA	